
台風十八号とミサイル

ヒジャイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

台風十八号とミサイル

【Nコード】

N2542G

【作者名】

ヒジャイ

【あらすじ】

台風上陸に高性能ミサイル五基をカリーナ弾薬庫から盗むのを企てた男がいた。台風の目に入った数時間に海外に運び出すのである。小さなウチナー島を舞台にしたスケールの大きいノンストップアクション長編小説の登場だ。

台風のとさくさに紛れてミサイル五基を盗め

プロローグ

—

二〇〇四年、八月の半ば、赤道近くの南太平洋上で低気圧が発生した。低気圧は次第に発達して最大風速が二十五メートルを越した。台風十八号の誕生である。

ラジオ・テレビでは「南太平洋上の低気圧が発達して今年十八番目の台風になりました。」と報道し、新聞の天気図では台風十八号と表記されるようになった。

台風十八号は南太平洋上を西北西にゆっくりと進みながら次第に勢力を増していき、航空写真で台風の目がはっきりと分かるくらいに大型で強力な台風に発達した。

台風十八号は発生した直後は西北西に進んでいたが、次第に北よりに進路は変わり北西の方に進むようになった。台風十八号が進んでいる北西の方角にはジャパン国の南端にあるウチナー島があった。

台風十八号は北西への進路を維持し、ウチナー島に向かって直進し続けた。

台風十八号はウチナー島を直撃し、台風の目が通過するとラジオやテレビで予報している。台風十八号の中心気圧は八百五十ヘストパスカルまで下がり、中心付近の最大風速は四十メートルになった。台風十八号のような超大型台風がウチナー島を直撃するのは久しぶりである。

ラジオやテレビは盛んに超大型台風十八号による被害は計り知れないだろうと警告を発し、急いで台風対策をするように忠告した。

目が上陸する台風が一番恐ろしい。目が上陸する台風は被害が甚大になる。台風十八号の目がウチナー島を通過するということは台風十八号が襲来してから去っていく間にウチナー島は三百六十度の方向から猛烈な暴風雨に襲われるということである。四方八方から激しい風雨に襲撃されて家や建物は壊され、川は氾濫し、山は崩れ、大木でさえも四方八方から襲い掛かる暴風雨に耐えることができなくて倒されてしまうだろう。農作物は壊滅を免れない。恐ろしい超大型台風十八号のウチナー島直撃である。

ウチナー島の人々は超大型台風十八号の来襲に恐怖していた。商店はシャッターを下ろし、あちらこちらの家々からは板を張り付ける音が聞こえ、港では漁船を陸に上げ、庭の木の枝を切り落とし、風に飛ばされそうな物はすべて物置に入れた。

ウチナー島の人々が台風十八号に慄き、台風対策に懸命になっていた。最中に、台風十八号のウチナー島直撃を密かに歓迎している男がいた。男の名前は梅沢という。

梅沢は台風がウチナー島を直撃するのをずっと待ち望んでいた。梅沢にとって台風の目のウチナー島襲来は千歳一遇のビッグビジネスのチャンスであった。台風十八号がウチナー島を直撃することを知った時に梅沢はほくそ微笑んだ。待ちに待った台風十八号の来襲である。

梅沢はウチナー島に駐留しているアメリカ軍が台風の対策に右往左往しているどさくさに紛れて、アジア最大の弾薬庫であるカリーナ弾薬庫から核爆弾搭載可能な五基の高性能のミサイルを盗み出そうというトンでもない計画を立てていたのであった。梅沢の奇想天外な計画は台風がウチナー島に上陸しないと実現できない計画であった。

カリーナエアークラスはカリナーシティー、コザシティー、チャタ
ンシティーにまたがった総面積は、約19・95十九、九五キロ平
方メートル。四〇〇〇メートルの滑走路を二本を有し、二百機近く
の軍用機が常駐する極東最大の空軍基地である。なお、成田国際空
港と関西国際空港には四〇〇〇メートル級の滑走路が一本ずつしか
ないため、二本ある嘉手納基地は日本最大の飛行場ということにな
る。カリーナエアークラスは面積においても日本最大の空港である
東京国際空港（羽田空港）の約二倍である。カリーナエアークラス
はアジア最大のアメリカ空軍基地である。カリーナエアークラスは
ベトナム戦争ではB 52重爆撃機がカリーナエアークラスから南
ベトナムに飛び立ち、ベトナムが潜むメコンデルタの密林に爆弾や
枯葉剤を雨あられのように落とした。アフガニスタン侵攻の時には
カリーナエアークラスから戦闘機や爆撃機が飛び立った。イラク戦
争の時にも多くの戦闘機や重爆撃機がカリーナエアークラスから参
戦してイラクを攻撃している。

カリーナエアークラスが存在するウチナー島は北朝鮮から中国、ベ
トナムに対して扇形の要の位置にあり、アメリカ国家にとってウチ
ナー島のアメリカ軍事基地はアジア全体に睨みを利かすアメリカ国
家の軍事戦略基地として重要な存在であり、その中でもカリーナ
エアークラスは中心的な役割を担っている。

カリーナエアークラスには滑走路、戦闘機の格納庫、洗浄室、エン
ジン調整室、基地司令部、兵舎、通信施設、だけではなく、カリ
ーナエアークラスに勤務する多くのアメリカ兵とその家族が生活して
いる広い居住区があり、居住区には家族住宅、病院等があり、幼稚
園、小・中高校、図書館、野球場、ゴルフ場、映画館、カミサリ
ー（スーパーマーケットのようなもの）、ボーリング場等の教養娯楽
施設も完備されていて現代的なタウンになっている。カリーナエ
アークラスのタウンには九千人以上の兵士と家族が生活している。

アジア最大のアメリカ空軍基地であるカリーナエアークラスはアメ

リカの対アジア軍事戦略基地としてアジアの国々に睨みを利かしている。ベトナム戦争、アフガニスタン侵攻、イラク侵攻の時に、カーリーナエアークラスから飛び立つ戦闘機にはミサイルが装備され、重爆撃機にはクライスラー爆弾や大型爆弾が積み込まれていた。これらのミサイルや爆弾を格納しているのがカーリーナエアークラスの北方に隣接しているカーリーナ弾薬庫である。

カーリーナ弾薬庫はカーリーナエアークラスに近くはならない存在である。総面積はカーリーナエアークラスよりも大きい約二十七平方キロメートルの広大な森林地帯にある。カーリーナ弾薬庫はカーリーナエアークラスに必要な弾薬を貯蔵しているだけではない。アメリカ空軍、アメリカ海兵隊、アメリカ海軍、アメリカ陸軍などあらゆる軍隊で使用する兵器を貯蔵していて、アジアから中近東にまたがる広大な地域で活動しているアメリカ軍が使用する弾薬類の補給基地として、きわめて重要な役割を果たしている。

広大な森林地帯のカーリーナ弾薬庫の奥深くには梅沢という男が盗もつとして五基の核爆弾搭載可能な高性能ミサイルがひっそりと眠っている倉庫があった。

三

二〇〇四年九月四日。台風十八号がウチナー島に上陸する二日前。気象予報は台風十八号がウチナー島に二日後には上陸するだろうと報じた。台風十八号の動きに注目していた梅沢は台風十八号が二日後にウチナー島に上陸すると確信した時にカーリーナ弾薬庫からミサイルを盗む準備に取り掛かった。梅沢はリストアップしている五十人の日本、中国、フィリピン、台湾、香港、インドネシア、タイに在住している男達にカーリーナ弾薬庫から五基のミサイルを窃盗するのに必要な者を選んで次々と電話をした。

電話では仕事の内容は秘密にした。それはいつものことである。梅沢の仕事は犯罪であり、依頼した人間が警察に密告したら万事休す

である。梅沢は依頼する仕事の報酬を五十万円から百万円に決めた。一日だけの仕事の報酬としては今まで依頼した仕事の中でもかなり高い方である。しかし、成功した時の梅沢の儲けは莫大でありそれくらいの報酬はむしろ安いくらいであった。

梅沢は仕事がキャンセルになる場合の可能性があるとすることも仕事を依頼する人間に告げた。過去に台風の目がウチナー島に上陸するということ予報があり、梅沢はミサイルを盗み出すためのメンバーを集めたが梅沢の計画をあざ笑うかのように台風の目はウチナー島に上陸しなかった。そんなことが三度あった。今度の台風十八号が百パーセント確実にウチナー島を直撃する保障はない。相手は大自然である。台風十八号がウチナー島に向かってしていると気象庁が予報しているも途中で台風十八号の進路が変わりウチナー島を直撃しないこともありえる。台風の目がウチナー島から外れたら梅沢が計画しているミサイル窃盗は断念しなければならない。しかし、仕事がキャンセルになったからといって報酬がゼロというわけにはいかない。梅沢は仕事キャンセルになった時には一日五万円として五日から七日までの三日分の報酬の十五万円は保証することを約束した。

梅沢が最初に電話をしたのはガウリンだった。ガウリンは梅沢の依頼で東南アジアの国々からジャパンに麻薬の密輸出をする仕事をしていた、梅沢にとって信頼できる人間の一人だった。それにガウリンはウチナー島のことをよく知っているし、ジャパン国の運転免許も持っている。ガウリンは今度の仕事に必要な人間であった。

「ガウリン、梅沢だ。」

「ああ、梅沢さんですか。」

ガウリンの疲れた声が聞こえた。

「昨日、三十キロのヘロインを隠したコンテナを貨物船に乗せて日本に向けて送り出しました。今度はバナナの中に隠しました。コンテナの底には腐ったバナナを混ぜてその中にヘロインを隠しました。必ず梅沢さん指定の倉庫に届きます。」

ガウリンは梅沢が電話したのはヘロインの送り出しについての確認のためだと思っただよう。

「そうか。ご苦労。しかし、電話したのはそのことについての話ではないんだ。別の話をするために電話したんだ。」

「そうですか。別の話とはどんな話ですか。」

「新しい仕事の話だ。」

「え、新しい仕事ですか。」

ガウリンは浮かない声をした。

「そうだ、明日までにウチナー島に来てもらいたい。」

「え、ウチナー島にですか。」

「そうだ。明日までにウチナー島に來い。」

ガウリンは暫く黙っていた。

「梅沢さん。ウチナー島に行くのはキャンセルしたいです。私は一ヶ月もフィリピンで動き回りました。今度の仕事で疲れました。私はインドネシアに帰って暫くの間は休みたいです。キャンセルが駄目なら、せめて一週間くらい待つてくれませんか。」

「駄目だ。今度の仕事は待ったなしだ。明日までにウチナー島に來るんだ。」

「他の人間に頼んでください。私は休みたいです。」

ガウリンはウチナー島行きを渋った。

「ガウリンはウチナー島に何度も来たことがあるからウチナー島についてよく知っている。それにガウリンは日本の自動車運転のライセンスも持っている。今度の仕事にはガウリンが必要なのだ。」

「しかし、梅沢さん。私は一ヶ月間もフィリピンに居て、ヘロインの調達から送り出しまでやりました。今度の仕事で疲れしました。インドネシアに戻って休みたいです。家族にも会いたいです。」

「それは分かる。しかし、今度の仕事はどてかいし、どうしてもガウリンが必要だ。」

「そうですか。」

ガウリンはどうしようか悩んでいるようだ。

「成功報酬一万ドルでどうだ。仕事は六日か七日の一日だけの仕事でだ。」

「え、一万ドルですか。たった一日の仕事で本当に一万ドルをくれるのですか。」

報酬が一万ドルであると聞いてガウリンは驚きの声を発した。そして、二年前にも同じ内容の仕事の話があったのをガウリンは思い出した。

「もしかすると二年前と同じ仕事ですか。二年前は途中で梅沢さんがキャンセルしましたよね。」

梅沢は苦笑した。

「ああ、二年前と同じ仕事だ。条件も同じだ。一万ドルは仕事が成功した時に払う。状況によっては二年前と同じように仕事をキャンセルする場合がある。その時にはウチナー島に滞在する三日間の日当の合計として千五百ドルの報酬をやるう。」

「そうですか。二年前と同じ仕事ですか。」

「ああ、同じ仕事だ。」

「二年前と同じようにキャンセルになるのではないですか。」

ガウリンは仕事がキャンセルになり千五百ドルの報酬をもらうよりはインドネシアに帰りたいかった。

「今度はキャンセルにならない可能性が高い。」

「どんな仕事なのですか。」

「それは二年前と同じで言えない。」

「そうですか。」

ガウリンは梅沢の仕事の依頼を断ろうと思ったが、

「ガウリン。私とお前の仲だ。断ることはできないよ。」

と梅沢は言った。ぞくつとする氷のような梅沢の声だった。梅沢の声を聞いてガウリンは断ることができないことを悟った。

「分かりました。私はウチナー島へ行きます。」

「そうか。急いで来てくれ。」

「はい。」

ガウリンは荷物をまとめるとホテルを出て、マニラ国際空港に行くためにタクシーに乗った。

ミサイル窃盗の仲間を集める

ミサイル窃盗の仕事を成功させるには大型クレーンを運転できる人間はなくてはならない存在である。短時間で手際よく仕事のできる熟練の運転手が必要だった。梅沢は大型クレーンを運転できる人間をピックアップしてあり、腕の立つ人間から順番に電話をかけて明日中にウチナー島に来るように仕事の依頼をしたが、最初に電話をした男は中国でダム建設の仕事をしているという理由で梅沢の仕事の依頼を断った。次に電話した人間は中近東のサウジアラビアに居て二日以内にウチナー島に来ることができないという理由で断わった。梅沢は三人目の人間に電話をした。三人目の人間の名前はハッサンといい、インド国籍の人間だった。

「やあ、ハッサン。元気が。梅沢だ。」

「梅沢さん。なにかいい仕事ないですか。」

「仕事をしていないのか。」

「道路工事の仕事をしているが給料が安いです。梅沢さん。給料の高い仕事が欲しいよ。梅沢さん。なにかいい仕事はないですか。」
ハッサンの話を聞いて梅沢はほっとした。ハッサンは今度の仕事に飛びついてきそうだ。

「ハッサンは今どこに居るんだ。」

「台湾に居る。」

台湾なら一日あればウチナー島に来れる。

「ハッサン。一日で七千ドルの仕事がある。」

「え、七千ドルですか。やるよ。どんな仕事なのだ。」

「仕事の内容は今言えない。」

「一日で七千ドルの報酬があるならやばい仕事に決まっている。そうだよな梅沢。仕事の内容は聞かなくていい。俺は仕事をやるよ。」
「それじゃあ決まりだ。しかし、断っておくことがある。この仕事

は状況によってはキャンセルになる時もある。その時は一日五百ドル出す。」

「日当が五百ドルなら喜んでやるよ。」

「そうか、わかった。仕事の現場はジャパン国のウチナー島だ。ハッサンはウチナー島を知っているか。」

「知らない。」

「ジャパンは知っているよな。」

「ジャパンは知っているよ。ジャパンを知らないアジア人は居ないよ。」

「ウチナー島はジャパンにある。」

「ジャパンにあるのか。」

「そうだ。ジャパンの南端にウチナー島はある。台湾からはウチナー島には直行便がある。調べれば簡単に探せるはずだ。ハッサン。今度の仕事は明日までにジャパンのウチナー島に来るのが条件だ。」

「ハッサンは明日までにウチナー島に来れるか。」

「行けるよ。」

「そうか、それなら決まりだ。」

「梅沢さん、お願いがあります。弟のシンも連れて行きたいですが。」

「

「え、弟も一緒なのか。」

「はい。」

「何才だ。」

「十九才です。」

「十九才か。」

梅沢はハッサンの弟が十九歳と聞いて迷った。

「お願いだ。梅沢さん。シンも雇ってくれ。」

ハッサンは何度も頼んだ。

「シンは英語を話せるか。」

「話せます。」

英語が話せるなら他の人間との共同作業ができる。

「まあ、いいだろう。シンには五千ドル出そう。それでいいか。」
「それでいい。ありがとう梅沢さん。」
「ウチナー島に来る日時が決まったら連絡してくれ。空港に迎えに行くから。」
「これからジャパンのウチナー行きの切符を買いに行く。」
「そうか。ウチナー島で待っているよ、ハッサン。」
梅沢はハッサンとの交渉を終えた。

梅沢はクレーンの運転手を一人確保した。しかし、一人では心細い。なにしろ激しい暴風雨の中の仕事だ。どんなアクシデントが起きるか分からない。予備の人間を準備しておく必要がある。
梅沢はメモ帳からジエノビッチの電話番号を探し、ジエノビッチに電話をした。ジエノビッチはクレーンの運転ができると聞いたことがあったので、クレーン操作のできる人間として梅沢はジエノビッチをピックアップしてあった。ジエノビッチはヨーロッパからジャパンに出稼ぎに来ている人間である。ジエノビッチとは半年以上電話をしたことがないが、まだジャパンにいるはずだ。

「やあ、ジエノビッチ。梅沢だ。」
「やあ梅沢。いい仕事はないかい。」
「ジエノビッチはまだジャパンに居るか。」
「ああ居るよ。ジャパンでは期待していた程は稼げないからチャイナのシャンハイに行こうかとミルコと相談しているんだ。」
「ミルコとまだ一緒なのか。」
「ああ。」
「ジエノビッチはクレーンの運転ができると言っていたよな。」
「ああ、できるぜ。」
「一トンの荷物をクレーンで移動したことはあるか。」
「一トンくらいの荷物なら何度もクレーンで運んだ。」
「そうか、ジエノビッチに七千ドルの仕事があるが乗るか。」

「え、七千ドルだって。何日間で七千ドルなんだ。一ヶ月間とか。」

「いや、二、三日だ。実際に仕事するのは数時間だけだ。」

「え、たった数時間で七千ドルか。殺しか。」

梅沢は苦笑した。

「いや、殺しの仕事じゃない。物を運ぶ仕事だ。クレーンを運転する人間が必要だからジェノビッチに電話したんだ。」

「クレーンの運転なら任してくれ。そんなつまい話だとするとその仕事はヤバイ仕事だということか。」

「まあそういうことだ。断るか。」

ジオノビッチは笑った。

「断るはずがないだろう。」

「仕事の内容について今教えるわけには行かないが、仕事をすれば七千ドルの報酬をやる。」

「二、三日で七千ドルがもらえるなんて、こんないい仕事はめったにない。ぜひやらしてくれ。」

「ミルコも雇いたいが、ミルコはやるかな。」

「あいつが断るなんて考えられない。」

「そうか。それじゃ、ミルコに仕事をするかどうかを聞いてくれ。」

もし、ミルコがオーケーなら私に電話しろ。しかし、明日中にウチナー島に来れないと雇うことはできない。」

「ウチナー島ってどこにあるのだ。」

「ジャパンの南端にある小さな島だ。ジャパンの人間に聞けばすぐ分かる。」

「そうか。」

「しかし、ことわっておくことがある。この仕事はキャンセルする場合がある。その時は一日五百ドルの報酬になる。その条件でどうだ。」

「交通費も含めてか。」

「いや、交通費は別だ。」

「つまり飛行機料金は梅沢が出すということかい。」

「そうだ。」

「一日五百ドルなら悪くない。ミルコと一緒に明日ウチナー島に行くよ。」

「ウチナー島で待っている。」

梅沢は電話を切った。

これでクレーンの運転手はハッサン、ジェノビッチの二人を確保してきた。ミサイルをカーリーナ弾薬庫から盗み出すのだから色々なアクシデントが起こるのは覚悟しなければならぬ。クレーン運転手が怪我をすることもあり得ることだ。それでも二人のクレーン運転手が居れば大丈夫だろう。

梅沢は梅津に電話した。梅津は梅沢の依頼で不良自衛隊員から銃火器などを買い集めて、梅沢に売っている人間である。

「梅津。梅沢だ。」

「あ、梅沢さん。すみません。」

梅津は申し分けなさそうに言った。

「対戦車バズーカ砲はなかなか手に入れ難いです。色々知り合いの自衛隊員に話を打ちかけているんですが。対戦車バズーカ砲の話をするとみんなびびるんです。」

梅津は対戦車バズーカ砲を入手していないことを梅沢に謝った。

「電話したのはそのことではない。梅津よ、直ぐにウチナー島に来てくれ。」

「え、ウチナー島にですか。」

「そうだ。来てくれ。」

「直ぐにですか。急ですね。」

「そうだ。梅津はウチナー島に行ったことはあるか。」

「いや、ありません。」

「そうか、ナーファ空港に仲間を行かすから、到着時間が分かったら電話をしてくれ。」

「そんなに急ぐ仕事なのですか。」

「ああ、そつだ。その代わり仕事の報酬は大きいぞ。百万円の仕事だ。」

「え、百万円。」

梅沢は百万円という大金の報酬に絶句した。

「ほ、ほんとうに百万円をくれるのですか。」

「ああ、ほんとうだ。しかし、仕事が成功すればという条件だ。」

「それは当然ですよ、梅沢さん。分かりやした。これからウチナー島に行きます。」

「ああ、そうしてくれ。」

梅沢は梅沢との交渉を終えて電話を切った。

梅沢は大城に電話をした。大城はウチナー島に住んでいる人間である。ウチナー島については梅沢よりも詳しい。大城は不良アメリカ兵と親しくしていて彼らがアメリカ軍から盗んだ銃火器を買い集めて梅沢に売る商売をしていた。

カリナ弾薬庫からミサイルを盗む計画は大城が「ミサイルを盗めると豪語しているアメリカ兵が居る。」という情報を梅沢に話したことから始まっていた。

梅沢は大城の話に半信半疑だったが大城は「ミサイルを盗めると豪語している」アメリカ兵を梅沢に会わせた。アメリカ兵の話には信憑性があった。ミサイルの種類、大きさ、重さ、ミサイルを保管している倉庫、合鍵を作る方法などの詳しい話を聞いた梅沢はアメリカ兵の話を利用して、ミサイルを盗み出して日本国外に運び出す方法を研究しながら、ミサイルを買ってくれる国際的な武器商人を探した。ミサイルを買うという国際的な武器商人はすぐに見つかった。その人物はミスター・スペンサーと呼ばれている男でアジアから中近東、アフリカ一帯で武器売買の商売をやっている人物であった。梅沢はその国際的武器商人スペンサーからミサイルを一基一億円で買うという確約を取った。

それからの梅沢はカリナ弾薬庫から盗み出したミサイルを国外に

運び出す研究に没頭した。そして、台風が目がウチナー島に上陸した時にミサイルをカーリーナー弾薬庫から盗み出して国外に運び出す計画を立て、ミサイルを運び出すための器材を準備したのだった。大城が居なければカーリーナー弾薬庫からのミサイルを窃盗する計画は生まれなかった。

「大城。梅沢だ。」

「おお、梅沢さんか。」

「今度の台風十八号はウチナー島に上陸しそうだな。」

「そうだな。俺も気象予報には注目していた。梅沢さんからの電話を今か今かと待っていたよ。」

「そうか、例の仕事を決行するぞ。」

「やっぱりな。決断したんだ。」

「ああ、決断した。」

「いよいよか。しかし、ミサイルを盗むことが現実になるなんて信じられないな。感動ものだよ。こんなスケールのでかい泥棒は一生に一度しか俺にはないだろうな。俺が冗談半分で持ち込んだミサイルを盗む話を本当に実現するとはなあ。俺はまだ信じられないよ。梅沢さん。あんたはすごいよ。」

大城はミサイルを盗むのを現実化した梅沢に感心した。

「しかし、台風十八号がすんなりとウチナー島に上陸するのは百パーセントの確立ではない。今度こそ上陸してほしいよ。」

「俺の感では、今度は確実に台風の目はウチナー島に上陸するね。」

「今度こそミサイルを盗めるよ。」

「そうあってほしいよ。ところで大城。頼みがあるんだ。」

「どんな頼みか。」

「お前のアパートに二、三人の仲間を泊めてくれないか。」

「え、俺のアパートにか。」

「ああ。」

「うっん、俺のアパートに他人を泊めるのか。それは困るなあ。他

の人間に頼んでくれないかな。俺は知らない人間と寝泊りするの
嫌いなんだ。ホテルに泊まらせたらいいじゃないか。去年はホテル
に泊めただろう。」

「前はホテルに泊めた。しかし、ホテルに泊めると名前の記録が残
るし顔もホテルの人間に覚えられる。それはまずいと考えた。だか
ら今年はアパートや自動車モーターに泊めるつもりだ。行動も素早
くできるようにジャパンの運転免許を持っている人間を中心にグル
ープを編成するつもりだ。今度の仕事は台風が相手だ。台風の動き
に迅速に動けるシステムを作らないと失敗する恐れがある。」

「なるほど。梅沢さんは頭がいい。」

「だから、グループはいつも一緒に行動してほしいのだ。大城、断
らないでくれ。それなりに礼はするから。」

「なるほどな。梅沢さんの言う通りだ。そうだよな。今度の仕事は
特別だからな。今度の仕事はスケールがでかいから仕事に参加する
人間も多いだろうな。梅沢さん。何人がこの仕事に関わるのだ。」

「合計すると三十名以上になる。」

「そいつはすげーや。その三十名の人間を台風の目がウチナー島に
入った数時間に一気に動かすのだろう。とても俺には真似のできな
い芸当だ。梅沢さん、承知した。俺のグループの人間は俺のアパー
トに泊めるよ。しかし、言っておくが、もてなしは一切しないよ。
俺は人をもてなすのが苦手なんで。」

「それは仕方ない。お前は一匹狼だからな。しかし、今度の仕事は
多くの人間の連係プレーで成功する。仲間同士の不協和音があつて
は仕事はうまくいかない。この計画を詳しく知っているのは私と大
城だけだ。だから大城はリーダー的な立場だからな。それを覚えて
いてくれ。」

「うう。梅沢さんにそんな風に言われると気が重くなるなあ。俺は
リーダーなんかになりたくないよ。」

「あはは。とにかく、大城よ。大城のアパートに泊まる連中は今度
の仕事の仲間だからな。喧嘩はしないでくれよ。いいか。」

「俺は短気な男だからなあ。でも今度の仕事はスケールがでかいし一生一度の仕事だからな。ぜひ成功したい。梅沢さんよ。俺は仲間と喧嘩するような馬鹿なことは絶対にしないよ。約束するよ。」

「そうか。じゃ頼むよ。大城の部屋に泊める予定の人間がウチナー島に到着したら連絡する。」

「分かった。」

ミサイルを盗む準備は整った。

梅沢はピックアップしていた五十人の人間に優先順位に従って次々と電話を入れた。ガウリン、ミルコ、ジェノビッチ、ハッサン、シン、梅津、大城の他にベトナム人のホアンチー、フィリピン人のピコ、香港からはトンチーとルーチンなどの男たちが梅沢の誘いに乗り、仕事の内容を知らないままに翌日までにウチナー島に来て、ウチナー島で梅沢と一緒に仕事することを承知した。

梅沢はミサイルをカリナー弾薬庫から盗み出すグループのリーダーのウインストンに電話をした。

「ミスター・ウインストン。梅沢だ。」

「おお、ミスター。ウメザワ。」

「カリナー弾薬庫からミサイルを盗み出す手筈は大丈夫だろうな。」

「大丈夫だ。ミスター・ウメザワの準備はオーケーですか。」

「ああ、準備はできた。ミスター・ウインストン。お前がミサイルをカリナー弾薬庫から運び出すことに失敗すれば元も子もないからな。絶対に失敗をするなよ。」

「大丈夫だ、ミスター・ウメザワ。作業に馴れた連中だからミサイルをトレーラーに乗せるだけの仕事は造作もないことだ。カリナー弾薬庫からカリナーエアールベースに出て、カリナーエアールベースの第三ゲートから運び出す予定だ。私の仕事はカリナー弾薬庫の倉庫でミサイルをトレーラーに載せてカリナーエアールベースの第三ゲートに運び出すまでだ。そうだよな、ミスター・ウメザワ。」

「そうだ。第三ゲートからミサイルを出してもらわないと私の仕事はおじゃんになる。」

「完璧にやるから案ずることはないよ、ミスター・ウメザワ。」

「わかった。それじゃ、ミサイルを第三ゲートから運び出す時間が

決まったら連絡する。台風十八号がウチナー島に上陸する時間がはつきりしないと決めることができない。ミスター・ウィンストンも台風十八号の動きに注意してくれよ。」

「ああ、気象予報を定期的に聞くよ。」

「そうしてくれ。それから、いつでも携帯電話を取れる状態だよ。」

「もちろんだ。」

「じゃな。ミスター・ウィンストン。」

梅沢は電話を切った。

梅沢は金城に電話した。金城は自動車の修理工場を経営している人間である。梅沢が盗難車も含めて色々な中古車を輸出する時に自動車の修理、解体、切断、組み立てを金城に依頼している。自動車については梅沢の要求をなんでも応じてくれるのが金城であった。

「金城。梅沢だ。」

「ああ、梅沢さん。」

「シーモラー五台を運び出す準備をしてくれ。」

梅沢はシーモラー五台を金城の修理工場の近くにある倉庫に置いてあった。

「いつシーモラーを使うのですか。」

「明後日になるだろうな。はっきり言えば台風十八号がウチナー島に上陸した時だ。」

「台風十八号がウチナー島に上陸した時ね。」

「そつだ。台風十八号の進路と時速が関係するからその日にならないと正確な時間は言えない。」

「まあ、梅沢のやる仕事だから驚きはしないよ。」

梅沢は苦笑した。

「ところでシーモラーを載せるトレーラー五台と運転手の手配は大丈夫か。」

「私の会社の従業員がトレーラーの運転はできるし、トレーラーの

準備もすぐできる。」

「シーモラーは私が指示する場所に運んでくれるだけでいい。場所是一般人が入ってはいけない場所だから、運んだらお前らは直ぐに引き上げるのだ。」

「前にも聞いたが、シーモラーでなにをするつもりなんだ。やっぱり私には教えないか。」

「そうだ。金城は聞かない方がいい。」

「しかし、知りたいな。」

と言って金城は笑った。

「仕事が成功したら後で教えるよ。」

梅沢は笑いながら言ってから、

「シーモラーの準備を頼むよ。」

と言った。

「承知した。」

金城の返事に、「頼むよ。」と言って梅沢は電話を切った。

梅沢は金城との電話を切ると具志堅に電話した。具志堅はトレーラーで自動車や重機などを運ぶ商売をしている。

「やあ、具志堅。梅沢だ。」

「梅沢さん。仕事ですか。」

「そうだ。クレーンを運んでほしい。」

「へえ。どこのクレーンを運ぶですか。」

「オーケー重機社のクレーンだ。」

「どこに運ぶのですか。」

「今は場所については言えない。運ぶのは明後日になるが運ぶ時間はまだ決まっていない。明後日に私が指示した時間にオーケー重機社の大型クレーンがある場所に運んでほしい。オーケー重機社からクレーンを運び出す時にはこっそりと運び出さなければならぬ。」

「こっそりとか。」

「そうだ。クレーンに鍵はつけておく。そういうことでオーケー重

機社の社長と話についている。」

「わかった。」

「とにかく、明後日はいつでも行動できるようにしてくれ。」

「回収はいつやるのか。」

具志堅の質問に梅沢は苦笑した。

「回収はなしだ。具志堅、察しがつくだろう。」

「まあな。」

「オーケー重機社の社長はそのクレーンは盗まれたと警察に報告することになっている。」

「そういうことか。」

「そういうことだ。」

梅沢は笑いながら具志堅との電話を切った。

梅沢はミスター・スペンサーに電話した。ミスター・スペンサーはアジア・アフリカ一帯で武器の売買をしている武器の大商人であり、ミスター・スペンサーが梅沢からミサイルを一基一億円で買う約束をしている。

「ミスター・スペンサー。梅沢です。」

「オー、ミスター・ウメザワ。」

「台風十八号は八十パーセント以上の確立でウチナー島を直撃します。私が企画した計画をいよいよ実行する時がきました。ミスター・スペンサーの協力をお願いします。」

「フフフフ、ミスター・ウメザワはおもしろい計画を立てる。私の方は準備オーケーですよ。」

「ありがとうございます。この計画が成功すればミスター・スペンサーとの取引をもっと増やしてくれませんか。」

「よろしいですよ。」

「それでは失礼します。」

梅沢はカリーナ弾薬庫からミサイルを盗む手配の全てを終わった。後は台風十八号がウチナー島に上陸するのを待つだけである。

カリーナ弾薬庫からミサイルを盗むことができるかと豪語しているアメリカ人が居ると大城から聞いたのは六年前であった。しかし、カリーナ弾薬庫からミサイルを盗むことはできても四方を海に囲まれたウチナー島から国外にミサイルを運び出すことは不可能である。

梅沢は大城からカリーナ弾薬庫からミサイルを盗むことができるアメリカ人が居ることを聞いてもミサイルを盗みだすということに興味は湧かなかつた。

梅沢がミサイル窃盗を真剣に考えるようになったのは国際的な武器商人ミスター・スペンサーがミサイル一基を一億円という莫大な値段で買うことを知ってからである。梅沢はミスター・スペンサーに会ってそれが事実であることを確認した。

それからの梅沢はウチナー島からミサイルを運び出す方法を真剣に考えミサイル窃盗の企画を練り上げた。企画をミスター・スペンサーに説明するとミスター・スペンサーは梅沢の企画を賞賛し協力を約束した。

梅沢は二年を掛けて機材や人材の確保に奔走した。そして、三年前から台風がウチナー島に上陸するのを待った。台風がウチナー島上陸する可能性があったのが過去に五回あり、ミサイル窃盗のためにメンバーをウチナー島に呼んだのが三回あった。しかし、それらは全て期待はずれに終わった。

ウチナー島に來襲する台風に期待しそして失望したことが過去に五回あったが、どうやら今度の台風十八号は梅沢の希望を叶える台風になりそうである。台風十八号がウチナー島を直撃する確率は日に日に高くなってきて、ミサイルを盗み出す時が刻々と迫ってきた。

梅沢は一時間毎に電話で台風情報を聞き、台風十八号がウチナー島に上陸するのを今か今かと待っていた

そして、とうとうその日がやってきた。

ミサイル窃盗のはじまりだ

二〇〇四年、九月六日の朝に台風十八号はラジオやテレビが予報した通りに、ジャパン国の南端に浮かぶウチナー島に上陸を始めた。ウチナー島の空はどんよりと曇り時々激しい雨が降り風も強くなっていた。

梅沢が待ちに待っていた台風の到来である。梅沢の計画は開始された。

台風十八号とミサイル

—

カリーナ弾薬庫の広大な森林地帯の中に弾薬倉庫は木々の緑葉に覆われて潜むように散在している。弾薬倉庫の中でも山の斜面を削って建てた特別に大きな弾薬倉庫が森林地帯の奥にあり、その弾薬倉庫には五基の高性能弾道ミサイルが格納されていた。

二〇〇四年九月六日。朝。高性能弾道ミサイルが格納されている弾薬倉庫の前に一台の大型トレーラーと三台の自家用車が停まった。弾薬倉庫の周囲にはもくもくの木やすすぎがうつそうと茂り五、六メートルも伸びたもくもくはウチナー島に上陸しつつある台風十八号の強風に大きく揺れて枝は今にも折れそうである。

自家用車から下りた三人の男たちは弾薬倉庫のシャッターの前に来た。一人の男が弾薬倉庫の裏に回り、密かに作った合鍵で裏口のドアを開けて弾薬倉庫の中に入った。窓のない弾薬倉庫の中は暗闇であった。男は懐中電灯を点けた。すると目の前に二段に積み重ねられているミサイルが見えた。

「こいつをトレーラーに乗せるのか。」

男は独り言を呟きながらミサイルを電灯で照らした。ミサイルは下に三基上に二基と二段に積まれていた。

ミサイルの長さは九八〇センチメートル、直系は八七センチメートルであった。核爆弾搭載可能なミサイルは到達距離が五〇〇キロメートルのANN X?と呼ばれている高性能弾道ミサイルである。

男は懐中電灯で弾薬倉庫の壁を照らしてブレイカー盤を探した。奥の壁にブレイカー盤があるのを見つけた男はブレイカー盤の方に行き、ブレイカーのスイッチを上げた。それから、ドアの方に行き、スイッチを上げると弾薬倉庫の中が明るくなった。男は正面の壁に行き、スイッチを上げると弾薬倉庫のシャッターが金属の擦れる音を発しながらゆっくりと上がっていった。

シャッターが上がり終わると、恰幅のいい男が大型トレーラーの運転席に来て

「ロバート。トレーラーを中に入れる。」

とトレーラーの運転手に指示した。その男がグループのリーダーのウインストンである。

トレーラーはゆっくりとバックしながら弾薬倉庫の中に入った。

「ようし、ここで停まれ。」

トレーラーは運転台が倉庫に入る直前に止まった。

「ようし、ミサイルをトレーラーに乗せろ。」

五人の男達は慌しく動いた。靴音やウインチの動く音や金属と金属の軋む音がコンクリートの壁にこだました。弾薬倉庫のミサイルは次々とトレーラーに積まれていった。

「ミサイルは弾頭の爆弾は外してあるし、燃料も抜き取ってある。」

ミサイルが爆発することはない。少々乱暴に扱っても大丈夫だ。作業を急ぐのだ。」

ウインストンは仕事を急がせた。

ミサイルはトレーラーの床に置かれた固定用の台に三基が並び、三基の上に設置した固定用の台の上に二基が並んだ。ミサイルは高さ

が約四メートルの台形の形に積まれた。

「ようし、カバーを被せる。ミサイルが見えないようにしっかりと被せるんだ。」

積み終えた五基の弾道ミサイルには緑色のカバーが被せられた。

「ようし。作業は終わりだ。ロバート。トレーラーを倉庫から出せ。」

ロバートはトレーラーの運転席に戻りエンジンをかけた。五基のミサイルを載せた大型トレーラーは弾薬倉庫からゆっくりと出た。急に降ってきた強烈な雨がミサイルを覆ったカバーに当たり、バババ―と音を立てた。

トレーラーが弾薬倉庫から出ると、シャッターがきしみ音を発しながらゆっくりと下りていった。

「私達の仕事はミサイルをトレーラーに乗せるまでだ。これで私達の仕事は終わりだ。後はロバートとジョンソンの仕事だ。」

ボブはジョージに、

「今日はタイフーンで仕事は休みだ。家でウイスキーでも飲むか。」

ジョージはどうするんだ。」

と聞いた。

「俺は映画でも見るよ。ウインストンはこれからどうする。」

「そうだな。家に帰ってから考えるよ。」

「じゃな、ウインストン。」

と言ってボブとジョージは車に乗ると去って行った。

ウインストンは携帯電話を出して梅沢に電話した。

「ハロー。私はウインストンだ。ミスター・ウメザワ。聞こえるか。」

「おう、ミスター・ウインストン。梅沢だ。」

「ミスター・ウメザワ。ミサイルをトラックに乗せ終わった。これからカーリーナエアベースに向かって出発する。」

「トラブルはなかったか。」

「トラブルはない。仕事は順調だった。」

「トラブルはない。仕事は順調だった。」

「そうか。安心した。」

「トレーラーを運転しているのはロバートだ。助手席にはジョンンが乗っている。二人がミサイルを運ぶ。三十分以内にはカーリーナエアベースの第三ゲートに着くだろう。ミスター・ウメザワの準備はオーケーか。」

「ああ、オーケーだ。」

「そうか。これで私の役目は終わりだ。後はロバートと連絡をしてくれ。それじゃ、電話を切るよ。」

ウインストンは電話を切ると、大型トレーラーの運転台に近づき、ハンドルを握っているロバートに声を掛けた。

「ロバート。」

ロバートはウインストンを見た。ロバートの顔は強張っていた。ウインストンは運転台に上って来て、

「緊張しているのかロバート。緊張していると事故を起こすぞ。もっとリラックスしろ。」

と言いながらロバートの頬を軽く叩いた。

「は、はい。」

ウインストンはロバートに携帯電話を渡した。

「ロバート。カーリーナエアベースに出たらミスター・ウメザワに連絡することを忘れるな。第三ゲートに到着する時間を伝えるんだ。その後はミスター・ウメザワの指示に従って行動するのだ。なにしろ、この大型トレーラーが第三ゲートを出てどこに行くか私はミスター・ウメザワに教えられていない。トレーラーの行方はミスター・ウメザワだけが知っている。それからロバート。第三ゲートの歩哨に積み荷のことを聞かれたらこの証明書をみせながら交換済みの古い土管だと言え。それで全てOKだ。歩哨がカーリーナエアベースから出て行く積み荷をいちいち調べることはしないから心配するな。ゲートの歩哨はテロ侵入を用心してカーリーナエアベースに入ってくる車を厳しくチェックしているだけだ。カーリーナエアベースから出て行く時の車はフリーのようなものだ。それにタイフーン

が接近しているからタイフーンのことが気になって積み荷には無警戒になっている筈だ。お前もタイフーンを気にしている振りをするんだ。タイフーンが来る前に急いで土管を集積所に運ばなければならぬと話すんだ。それで絶対にゲートを出れる。分かったなロバート。」

「は、はい。」

ロバートの声は緊張の性で固かった。ウインストンはロバートの緊張した返事に苦笑した。

「ロバート。もっとリラックスしろ。緊張していたら歩哨に怪しまれるぞ。ほれ、ガムでも噛みな。」

ウインストンはポケットからチューインガムを出してロバートにあげた。

「ロバート。後は頼むぞ。」

「はい。」

ウインストンはトレーラーから下りた。トレーラーはゆっくりと弾薬倉庫を離れていった。トレーラーが車道に出ると、

「さて俺もさっさと引き揚げるとしよう。」

と言い、ウインストンは自動車に乗って去って行った。

梅津と大城はすで見張られていた。

二

二〇〇四年九月六日。朝。台風十八号はウチナー島に接近してきていた。空は黒い雲が激しく蠢いて移動している。時おり激しい雨が降ったりしている。大城が住んでいるアパートはギノワンシティーのフテンマヘリコプター飛行場に隣接する住宅街の一角にあった。大城のアパートから百メートルほど離れた道路沿いに一台の車が停まっていた。車の中には二人の男が乗っている。助手席で仮眠を取っているのが鈴木であり運転席で大城の部屋をじつと見張っているのが斎藤であった。大城の部屋を見張っていた斎藤が助手席で仮眠をしている鈴木の肩を揺すった。

「鈴木君。大城達が出て来たぞ。」
コンクリート建ての家やアパートが密集しているギノワンシティーのフテンマヘリコプター飛行場に隣接する住宅街の狭い道路に車を停車して鈴木と斎藤は昨夜から大城のアパートを見張っていた。ワイパーが動いていないフロントガラスは雨の滴がいくつももの筋となって流れ、外の景色が歪んで見える。

鈴木は斎藤に肩を揺すられて起き上がり目を開くとフロントガラス越しに百メートル近く離れた古い三階建てアパートの二階を見た。フロントガラスの向こうに大城と梅津とハッサン、シン兄弟の四人の男がアパートの二階から下りて来た。

アパートは大城が借りているが二日前に梅津が東京からやって来て大城のアパートに泊まった。昨日の夕方にはハッサンとシンが台湾からやって来て大城のアパートに大城や梅津と一緒に泊まった。

大城達の見張りをしている斎藤と鈴木は防衛庁の武器盗難特別捜索班に属している防衛庁の職員である。

二日前に東京からウチナー島にやって来た梅津は関東一帯の自衛隊基地に所属している不良自衛隊員が盗み出した拳銃や自動小銃などの武器を買い集めているという噂があり、鈴木は二ヶ月前から梅津の身辺調査をやっていた。梅津は鈴木が尾行を始めてから数人の自衛隊と接触をしていて、自衛隊員と一緒にスナック等で飲食もやっていた。しかし、梅津が自衛隊員と拳銃や自動小銃等の取引をしている現場を押さえることはまだできなかった。

二日前に、都内のパチンコ店で昼間からパチンコに興じていた梅津に電話が掛かってきた。電話の声を聞いて梅津は急に神妙になり、話しながら電話の相手に何度もおじぎをした。梅津は電話を終えると急に慌しい行動を取った。

携帯電話をポケットに入れた梅津はパチンコの玉を隣りの人間にあげてパチンコ店を出るとタクシーを拾って羽田空港に向かった。そして、ウチナー島行きの旅客機に乗った。梅津を調査していた鈴木も梅津を尾行してウチナー島にやってきた。

梅津とハッサン兄弟を自分のアパートに泊めている大城という男はウチナー島在住の男で、彼も梅津と同じように自衛隊員やアメリカ兵から拳銃や自動小銃等の武器を買い集めているという噂のある人物であった。大城は拳銃の不法所持でウチナー警察に逮捕されたこともある。運転席に座っている斎藤は一ヶ月前から大城の身辺調査をしていた。

ウチナー島には二人の武器盗難調査隊員が配置されていた。斎藤はウチナー島の中北部の自衛隊員やアメリカ兵から拳銃や自動小銃等を買集めていると噂のある人物を調査していて、もう一人の天童は南部一帯の自衛隊員を調査していた。最近の斎藤は中部で暗躍しているという情報がある大城の調査を集中的にやっていた。鈴木が調査をしている梅津が二日前にウチナー島にやって来て大城と合流したことで、東京から梅津を尾行して来た鈴木と大城を調査してい

た斎藤は合流し、一緒に二十四時間張りつきで大城と梅津の調査を遂行することになった。

三

梅沢から大城に電話が掛かってきた。

「大城。那覇空港に梅津という男が午後五時十分にやって来る。迎えに行ってくれないか。」

「俺のアパートに泊める人間か。」

「そうだ。梅津の電話番号を教えるから書きとめてくれ。」

梅沢は梅津の電話番号を大城に教えた。

「どんな奴だ。」

「どんな奴だと聞かれても困る。まあ、普通の人間だと言うしかできないな。」

「梅沢さん、断っておくけど、俺はちやほやした接待はしないよ。仕事だから仕方なく俺の家に泊めるだけだからな。その梅津という奴にも梅沢さんから俺の考えをちゃんと伝えてくれよ。」

梅沢は苦笑しながら、

「分かった。伝えるよ。」

と言つて電話を切った。

羽田空港からナーフア空港に到着した梅津を迎えたのは大城であった。ナーフア空港のロビーに下り立った梅津は電話を掛けた。すると同じ空港ロビーにいた大城の携帯電話が鳴った。大城は携帯電話のモニターを見た。モニターに映った電話番号は梅津の電話番号であった。

「もしもし、大城だ。」

「大城さんか。俺は梅津だ。今、どこに居るか。」

「ロビーに居る。」

ロビーで立ち止まった状態で携帯電話を耳に当てていたのは大城と

梅津だけだった。二人は電話で話し合いながらお互いの存在を確認し合った。

「あんたが梅津か。」

「そうだ。あんたが大城さんか。」

「そうだ。」

「梅沢さんから聞いていると思うが、俺は梅沢さんに頼まれて仕方なくあんたを俺のアパートに泊める。それだけだよ。俺はあんたをお客さん扱いはしないよ。」

「それでけっこうだ。」

ロビーで顔を合わせた梅津と大城は笑顔で挨拶することもなく、一度握手したきりで親しそうに会話を交わすことはなかった。

二人はナーファ空港の駐車場に行き、大城の車に乗った。ナーファ空港を出て国道五八号線に入った時、

「腹が減っているか。」

と、運転している大城は助手席の梅津に聞いた。

「ああ、減っている。」

「俺も腹が減っている。それじゃあ、飯でも食おう。」

梅津と大城はウチナー島の中心都市であるナーファシティーのレストランで食事を取った。

「梅津はスラグマシンをやるか。」

レストランを出ながら大城は梅津に聞いた。

「スラグマシンは余りやらない。しかし、パチンコは好きだ。毎日やっている。」

大城が微笑した。

「そうか、そいつはよかった。俺はこれからウラシーシティーのパチンコ店にスラグマシンをやりに行く。お前も行くか。行かないならウラシーシティーに連れて行くからそこで適当にぶらぶらしてくれ。スラグマシンが終わったら迎えに行く。」

「俺もパチンコ店に行く。」

大城と梅津はウラシーシティーのパチンコ屋で夜遅くまで梅津はパ

チンコに興じ大城はスラグマシンに興じた。パチンコ店で遊ぶのが二人の共通点のようだ。大城と梅津は夜遅くまでパチンコとスラグマシンを興じた後はウラシーシティーのラーメン屋で食事を取った。大城はスラグマシンをやった後にラーメンを食べ、それから馴染みのスナックに行くのが習慣であったが、梅津と一緒にスナックに行く気にはならなかった。大城はスナックに寄らずに梅津を連れてギノワンシティーの大城のアパートに帰った。

「大城はラーメンを食べた後にスナックに行くのが習慣ですが、今日は行かなかった。梅津がスナック嫌いなのかな。」

「そんなことはありません。梅津も毎日スナックに行っています。変ですね。」

梅津と大城はほとんど毎日スナックやバーに通っているのに今日に限って行かなかった。

「大城と梅津はお互いに酒を酌み交わす気になれないのかな。」

「そうかも知れませんが。」

二人の会話の少ない不自然な行動を観察して、梅津と大城が合流したのは二人が親しい間柄であるからではなく二人に共通する何者かの指示によるであろうと鈴木と斎藤の推測は一致した。そのことをはっきりさせたのは大城と梅津がハッサンとシンを迎えに行った時だった。

翌日の早朝に梅沢から大城に電話があった。

「今日の午後三時に台湾からハッサンとシンがナーフア国際空港に着く。迎えに行ってくれ。」

「台湾からか、台湾人にしては名前が変だな。」

「ハッサンとシンは台湾人ではない。インド人だ。」

「インド人だって。俺はインドの言葉を話せない。」

「心配するな。ハッサンは英語が話せる。」

「そうか。」

「よろしく、頼む。」

「分かった。」

大城の返事を聞いて、梅沢は電話を切った。

梅津がウチナー島に来た翌日の大城と梅津は午前中は昨日と同じウラシーシティーのパチンコ屋でスラグマシンとパチンコに興じていたが、午後になるとパチンコ屋を出てナーファ国際空港に向かった。二人はロビーに出て来た白いターバンを巻いたインド人を探した。梅沢の電話ではハッサンとシンを見つけやすいため二人は白いターバンをやることになっているという。大城と梅沢はロビーに出て来る外国人を見ていたが、梅津が白いターバンを巻いた若いインド人を見つけて大城に耳打ちした。

「大城。あのターバンをやっている二人がハッサンとシンではないか。」

「そうだろうな。」

大城は梅津の言葉に頷いた。白いターバンを巻いたインド人は立ち止まり周囲を見回した。大城は白いターバンを巻いたインド人に近寄っていった。

「ソーリー。アー ユー ハッサン。」

と大城が言うと、ハッサンが、

「イエス。」

と答えた。

予想通りターバンを巻いていた二人はハッサンとシンであった。大城は梅沢に頼まれてハッサン兄弟を迎えにきたと話し、自分の名前を紹介した後に梅津を呼んで梅津を紹介した。四人はお互いに自分の名前を紹介し合って軽く握手を交わした。ハッサン、シン兄弟は握手をする時に親しみを込めた笑顔を作ったが、大城と梅津はにこりともしないで握手をした。

大城は握手をした後は、「ついて来い。」と言うと、ハッサン兄弟を背にしてさっさと歩き出した。あっけに取られているハッサンに

梅津は手を振って着いて来るように合図した。ハッサンとシンは口ビーが出る時に梅津と大城がハッサンとシンを見つけるための目印に使った白いターバンを取った。

ロビーを出て、四人は駐車場にある大城の車にやって来た。大城は運転席に乗るとドアのロックを解いてハッサン兄弟を見向きもしないでハンドルを握りエンジンを始動した。梅津はハッサンに後ろに乗るように指示してハッサンとシンが車に乗るのを確認してから助手席に乗った。大城の無愛想にハッサンは呆れたように肩をすくめた。

「アー ユー ハングリー。」

大城はハッサンに聞いた。ハッサンとシンを顔を見合わせた後にハッサンが、

「イエス。」

と答えた。

「こいつらにはなにを食わせはいいのかな。」

大城は梅津に聞いた。

「インド人だから、カレーがいいじゃないのか。」

「それじゃあ、インドカレーを食わすことにしよう。」

大城はハッサン兄弟をナーファシティーのインドカレー専門店に連れて行った。それが大城のハッサン兄弟への唯一の接待だった。

インドカレー専門店を出た大城は昨日と同じウラシーシティーのパチンコ屋に直行した。車を運転しながら、

「ハッサン。パチンコを知っているか。」

と聞いた。

「ノー。」

とハッサンは答えた。

暴風雨の中、大城たちは動いた。しかし・・・

「スラグマシンを知っているか。」

と大城は言い、ハッサンが返事に困っていたのでスラグマシンについて説明した。

「知ってはいるがやったことはない。」

大城はハッサンの返事を聞いてがっかりした。

「こいつらはパチンコを知らないしスラッグマシンはやったことがないらしいぜ。」

「それじゃあ、パチンコ店に行くのは止めるか。」

「冗談じゃないよ。お前とハッサンとシンと俺の四人でどこに行けばいいと言っただ。俺は四人であつちこつちうろつろするのはやりたくない。俺はパチンコ店以外に行く所はない。お前がハッサンたちとどこかに行きたいならこの車を貸すぜ。」

「馬鹿言え。俺も後ろの二人と一緒にぶらぶらするのはやりたくない。」

「それじゃあ、パチンコ店に行くしかない。」

「そついうことだ。」

大城と梅津は笑った。大城の車はウラシーシティーのパチンコ屋に向かった。

大城の車はパチンコ店の駐車場についた。車から下りた大城はハッサンにパチンコ店に一緒に行こうと誘った。

「ハッサン。俺はパチンコ店でスラグマシンをやる。梅津はパチンコをやる。お前たちもやったらどうだ。」

大城に誘われてハッサンは迷っていたが、車から出てシンと一緒に大城たちの後ろをついて行った。大城、梅津、ハッサン、シンはパチンコ店に入って行ったが、暫くすると耳を押さえながらハッサンとシンはパチンコ店から出て来た。ハッサンとシンを追って大城も

パチンコ店から出て来た。大城はパチンコ店に戻ろう説得したがハッサンは店の中がとてもうるさいからといって断った。

大城は車のドアを開けてハッサンとシンを車に乗せた後に、パチンコ店に戻って行った。ハッサンとシンは大城がスロットマシンに興じている間は車の中でじっとしていた。外国からはるばるやって来たハッサン兄弟を丁重に持てなす気持ちは大城や梅津にはなかった。

四

大城、梅津を尾行している鈴木と斎藤はナーファ国際空港から出て来た大城、梅津、ハッサン、シンを見た。

「斎藤さん。二人の男はインド人に似ています。」

「そうですね。二人は顔や体躯が似ているから兄弟だと思えます。」

「そうですね。私はインド人二人の素性を調べます。斎藤さんは四人を尾行してください。」

「分かりました。」

斎藤はナーファ国際空港から出た大城の車を尾行し、鈴木はインド人の素性を調べるためにナーファ国際空港に残った。

斎藤がウラシーシティーのパチンコ店の駐車場に停まってから数分すると鈴木から電話があり、ナーファ国際空港に下りた二人のインド人は兄弟であり名前が兄はハッサンで弟はシンであることを伝えてきた。

「斎藤君は今どこにいますか。」

斎藤は車を駐車しているウラシーシティーのパチンコ店の名前と場所を教えた。

「分かりました。私はタクシーで斎藤君の所に向かいます。」

「待っています。」

数十分後に鈴木はウラシーシティーのパチンコ店に到着した。鈴木

はパチンコ店の入り口近くでタクシーから下りて斎藤に電話した。

「鈴木です。四人の様子はどうですか。」

「斎藤です。大城と梅津はパチンコ店に入っています。ハッサンとシンは車の中に居ます。」

「私はパチンコ店の入り口に居ます。斎藤君の車はどこに駐車していますか。」

鈴木は斎藤と電話で話しながらハッサンやシンに見られないように斎藤の車に近づき背を屈めて車の助手席に乗った。

「インド人がやって来るとは以外でした。」

「そうですね。」

「外国からも仲間を呼んだということは大掛かりな武器窃盗が目的なのでしょうか。」

「多分そうだと思います。そうでなければ、大量の武器弾薬を国外に運び出すつもりだと思います。」

「面識のない四人が『大きな仕事』をやるために謎の人物によって呼ばれたことに疑いの余地はありません。」

「四人を集めた人物はどんな人間なのだろうか。」

「外国人を呼べるということはかなりの大物でしょうね。」

「そうだと思います。その男を見つけて逮捕したいです。」

「同感です。」

と斎藤と鈴木は武器窃盗団の大物を捕らえることができるかもしれないことに緊張が高まっていった。

深夜の十一時頃に大城と梅津はパチンコ店から出て来た。四人は昨夜と同じラーメン屋で食事をしてから大城のアパートに帰った。

大城と梅津の親しみのない態度。大城と梅津のハッサン兄弟に対する無碍な扱いが四人は旧知の間柄ではないことを示していた。無理矢理一緒に寝泊りさせられていることは明らかである。四人を呼び集めた人物がいる。四人をウチナー島に呼んだ人物が彼らのリーダー

一である。なぜ四人をウチナー島に呼んだのか。リーダーの正体は誰なのか、鈴木も斎藤も具体的には何も知らなかった。ハッサン兄弟と梅津、大城の四人が合流してからの行動をつぶさに観察していた鈴木と斎藤は以下のように分析した。

- 一、 大城と梅津の個人的な関係は希薄である。
- 二、 インド人のハッサンとシンは大城、梅津とは初対面である。
- 三、 ハッサンとシンの正体は不明だが知的教養があるとは認められない。恐らく二人は肉体労働かそれに近い仕事をやっている。
- 四、 四人は大城が集めたのでもなければ梅津が集めたのでもない。
- 五、 四人を集合させた人物が存在する。
- 六、 その人物がリーダーに違いないが、リーダーの正体は不明である。
- 七、 梅津、大城、ハッサン・シン兄弟が合流したということは近日に自衛隊基地かアメリカ軍基地から窃盗した武器の取り引きがあるか、でなければ自衛隊基地かアメリカ軍基地から武器を窃盗する計画がある。
- 八、 外国からハッサン、シンが合流したということは大規模な武器の取り引きあるいは武器の窃盗が近日中に行われるであろう。

以上が鈴木と斎藤の分析結果であった。気になるのは四人を合流させたリーダーの正体が分からないことと取り引きあるいは窃盗の規模と実行日がまだ予測できないことであった。ウチナー島の自衛隊基地から大量の武器が盗まれたという情報はなかったし、アメリカ軍基地から大量の武器盗難の報告が防衛庁にあったという事実もなかった。そして、自衛隊基地かアメリカ軍基地から大量の武器を窃盗する計画があるという情報も皆無であった。しかし、東京から梅津、台湾からハッサン兄弟がウチナー島にやって来て大城と合流したということは近い内に大きな武器取引きまたは武器窃盗があることを予感させる。四人を徹底して尾行すれば彼らの犯行現場を押さ

えることができるだろう。鈴木と斎藤の緊張は高まった。

五

大城のアパートを出た梅津、ハッサン、シン、大城の四人は大城の運転する車に乗りアパートの駐車場を出た。

「これからパチンコ店に行くのでしょうか。」

「パチンコ店に行くには時刻が早すぎます。違うと思います。それに四人の表情が普通と違います。」

「そうですね。緊張している表情をしていますね。」

大城達の表情は明らかに緊張していた。これから四人の男達はどこに行きなにするのだろうか。大城達を見張っている鈴木と斎藤も緊張した。

大城達の乗った車は家やアパートが密集している窮屈な狭い道路を通り抜けてフテンマタウンの大通りに出た。大通りを直進するとフテンマ三叉路に出る。フテンマ三叉路は大通りから国道三百三十号線に出る交差点であり、大城達の車はフテンマ三叉路を右に曲がって国道三百三十号線を北に向かった。

「ウラソエシティーのパチンコ店とは逆方向です。」

「そうですね。」

国道三百三十号線を北上している大城達の車は坂を下っていった。暫くすると坂は上り坂になった。坂を上りきると再び長い下り坂になった。道路の左側はアメリカ軍基地であるキャンプズケランを囲う金網が続き、右側もアメリカ軍施設のキシヤバテラスハイツを囲っている金網が続いた。この通りは道路だけが民間地域で右も左もアメリカ軍基地であるといういびつな国道である。

大城達の車はアメリカ軍基地の金網に挟まれたいびつな国道三百三十号線を走り続けた。キャンプズケランの金網に沿ってゆるやかな坂を下ると、やがて三叉路が見えた。大城の運転する車は三叉路を

左折して間道に入った。間道を直進するとウチナー島の西側の幹線道路である国道五十八号線に出る。

大城達の車は国道五十八号線に出ると右折した。右折して国道五十八号線を北に進むと右側にはアメリカ海軍病院のあるキャンプクワエというアメリカ軍の敷地があり、左側の海岸には映画館や観覧車等の娯楽施設が集合しているウチナー島の新しい繁華街になっているミハマタウンがある。大城達の車はミハマタウンを過ぎ、なおも北の方に向かった。

「大城達の車はどこに向かっていているのだろうか。」

「これから先はカリナーシティー、ユンタンヴィレッジ、ウンナヴィレッジです。もう少し進むと国体道路入り口がありますが、国体道路はコザシティーに通じている道路です。コザシティーに行くのなら国道三百三十号線を直進した方が近いですから国体道路に入ることはないとおもいます。」

「そうですか。暴風雨はますます激しくなりました。運転は注意してください。」

「はい。」

激しい雨がフロントガラスを襲い視界を悪くした。ワイパーを最速にしても次々と襲い掛かる大粒の雨がフロントガラスを覆い視界は悪かった。

キャンプクワエの敷地はコザシティーに通じている国体道路入り口まで続いていた。国体道路入り口を過ぎるとアジア最大のアメリカ空軍基地であるカリナーナエアールベースである。大城達の車は国体道路入り口を過ぎ、カリナーナエアールベースの金網沿いを走り続けた。

大城達の車はカリナーナエアールベースのゲートを通り過ぎ、カリナーナエアールベース専用のゴルフ場、スナビヴィレッジ、アメリカ空軍貯油基地を通り過ぎてカリナーシティーのミジガマに入った。カリナーナエアールベースの広大な滑走路が金網の向こう側に広がっている。カリナーナエアールベースの滑走路は全長四キロメートルもあり、ジェット戦闘機だけではなくB 52などの重爆撃機も難なく離着陸で

きる。

大城達の車はカリナーシティーのミジガマに入ると国道五十八号線沿いにあるコンビニエンスの駐車場に入った。

「コンビニの駐車場に入りました。私たちも駐車場に入りますか。」と齋藤が言った。

「いや、それはまずいです。コンビニの駐車場は小さいです。駐車場に入ったなら尾行していることが知られてしまう恐れがあります。しかし、国道に停まるのもまずいですね。」

「コンビニエンスを過ぎたらドライブインがあります。ドライブインの駐車場に入りましょう。」

齋藤はコンビニエンスを通り過ぎて、ドライブインの駐車場に入った。大城達四人はコンビニエンスでおにぎりや弁当、ハンバーグにソフトドリンクなどを買って車で戻った。大城の運転する車はコンビニの駐車場を出て再び五十八号線を走った。

大城達を尾行している齋藤と鈴木は次第に緊張が高まってきた。フテンマのアパートから出た大城の運転する車はフテンマ三叉路からキャンプズケラン沿いを通り、国道五十八号線に出てミハマヴィレッジ、ハマカーヴィレッジ、スナビヴィレッジそしてカリナーシティーへと走り続けた。朝食はコンビニエンスで買い、車を走らせながら食べている。大城達の車の走り方は大城のアパートを出てから迷わずにある目的地へ向かって一路に走っている様子を窺わせた。大城、梅津、ハッサン、シンはこれから仕事をやるうとしていた。

鈴木はそう確信した。

「齋藤君、どう思いますか。私は彼らがこれから仕事をするのではないかと思います。」

「そうですね。アパートを出た時から四人には緊迫感が漂っていたし、普通ではないですね。しかし、今日はこれから暴風雨が激しくなります。今日のような天候では仕事はできないと思います。私は仕事をやる可能性よりも彼らのリーダーに会う可能性が高いと思っ

ています。大城と梅津が合流したのは一昨日、ハッサン、シンが合流したのは昨日ですからね。仕事をするには準備期間が不足していると思います。多分、彼らはリーダーに会って仕事の打ち合わせをするのではないですか。私はそのように推理しています。」

斎藤の説明の方が理に適ってはいるが、鈴木直感の意見と違っていた。アパートから出てきた時の四人の顔つきは戦場に赴くのに似た緊張感が漂っていた。リーダーに会い、リーダーから計画を聞くという緊張感とはなんとなく違うように鈴木には思われた。しかし、彼らが仕事をするという根拠は鈴木直感であり、はつきりした根拠に基づくものではないから強く主張することはできなかった。

「斎藤君の言う通りかもしれませんが、四人のこれからの動きは要注意です。我々の意見を青木隊長に報告したいと思いますが、斎藤君はどう思いますか。」

「私も同意見です。もし、彼らがリーダーに会うとしたら、リーダーを尾行する必要があります。車一台で大城達とリーダーの車の二台を尾行することはできません。できたら応援を頼んだ方がいいと思います。」

「そうですね。」
助手席に座っている鈴木は携帯電話で彼らの隊長である青木に連絡をした。

武器盗難調査班の隊長は青木である。青木は斎藤と天童の調査情況の報告を聞くために一週間前からウチナー島に滞在していて、梅津、大城、ハッサン兄弟の四人が合流したことを報告すると青木は非常に関心を持った。青木は大城達を徹底して尾行すると鈴木と斎藤に厳命した。

さあ、ノンストップアクションの始まりだ。

「青木隊長ですか。鈴木です。斎藤と私は大城、斎藤、ハッサン、シンの四人が乗っている車を尾行してカリナーシティーの国道五十八号線を走行中であります。四人の行動には只ならぬ気配を感じます。私と斎藤隊員の共通の判断と致しまして、これから彼等は仕事をやるかそうでなければ彼らのリーダーと会うのではないかと思われます。は、いえ、まだ確信があるわけではありません。四人の緊張した顔つきが気になりますし四人の乗る車もなにやら目的地にひたすらに向かっているような走りをしています。私達の誤判断かも知れませんが、気になりましたして青木隊長に連絡したわけでありまして。はい、分かりました。よろしくお願いします。」

携帯電話を切った鈴木はほっとした顔をした。

「青木隊長と天童が応援に来てくれるそうだ。」

「そうですか。それはよかったです。今日こそは梅津と大城の尻尾を掴んでやりましょう。」

「そうですね。」

六

大城達の乗る車はカリナーロータリーに入ると国道五十八号線を右折して県道二十四号線に入った。国道五十八号線をそのまま北進すればヨミタンブレイッジに入り、オンナブレイッジそしてナゴシティーへと続く。右折して県道二十四号線に入り東の方に進路を取ると、再び広大なカリナーエアーベース沿いを走ることになる。カリナーロータリーからコザシティーまでは五キロ以上もあり、カリナーロータリーからコザシティーの間はカリナーエアーベースを囲っている金網が延々と続いている。

「あれ、右折しました。北進は止めました。」

「どこに向かっているのだろう。」

「そのまま進めばカリナーエアーベース沿いを走ってチバナ十字路に出ます。チバナ十字路は国道三百二十九号線にあります。チバナ十字路に行くのならフテンマから国道三百三十号線を真っ直ぐ進んでコザ十字路で左折して国道三百二十九号線を通った方が早いです。国道五十八号線に出てカリナーロータリーを右折してチバナ十字路に行くのは遠回りになります。」

「そうですか。すると大城達はチバナ十字路には行かないということなのですか。」

「そのように考えるのが普通だと思います。しかし。この道路は一本道です。チバナ十字路つまり国道三百二十九号線に出る道路なのです。大城達はどこに行くのだろう。変ですね。」

齋藤は大城達がカリナーロータリーを右折して県道二十四号線に入ったことに戸惑った。

「鈴木君。大城達が方向転換したことを青木隊長に連絡したほうがいいと思います。」

「そうですね。」

鈴木は急いで青木に電話をした。

「隊長ですか、鈴木です。」

「おう、鈴木君。大城達の動きはどうなっているのか。」

「はい。大城達はカリナーロータリーを右折してチバナ十字路方向に向かいました。」

「右折したのか。」

「はい。右折してチバナ十字路方向に向かいました。」

「そうか、わかった。私たちもチバナ十字路に向かうことにする。」

鈴木君。梅津、大城にハッサン・シンの四人が合流したということ。梅津は関東をテリトリーにしている人間で大城はウチナー島をテリトリーにしている人間だ。二人とも弾薬・火器類の密売はしているが二人には直接的

なつながらりはない。二人を支配している人間が梅津をウチナー島に呼んだのは確実だ。その人物は外国からハッサンとシンも呼んでいる。大きい仕事をやる目的があるから梅津やハッサン達が大城とウチナー島で合流したのだ。暴風雨であつても油断はしないことだ。気をつけて尾行してくれ。君が話した通り、これからの四人の行動は要注意だ。絶対に四人を見失いなわなないでくれ。当然のことだが尾行していることを彼らに気づかれることは絶対にあつてはならない。尾行は細心によつてくれ。私と天童も応援に向かっている。鈴木君、絶対に武器を窃盗されてはならない。絶対に大城達の尻尾を掴むのだ。」

「はい、承知しました。」

鈴木は電話を切ると、

「大城達を絶対に見失うなと青木隊長に言われました。」

と斎藤に言った。斎藤は黙って頷いた。二人は前方を走っている大城達の車を凝視した。

二年前、コザシティーの自衛隊員が住んでいる借家で大爆発があった。爆発で借家人の自衛隊員が即死した。警察が調べてみると爆発で即死した自衛隊員の借家には拳銃や自動小銃だけでなく、手榴弾や対戦車用のバズーカ砲まで発見された。警察が武器の入手経路を調査していくとそれらの武器は自衛隊基地やアメリカ軍基地から盗み出された盗品であるということが判明した。現役の自衛隊員が大量の盗品武器を所持していたのだ。そして、他の住民を巻き込んでしまうような大爆発を起こしてしまった。防衛庁は大量の武器が盗まれていた事実が判明したこの大爆発事件にショックを受けた。それ以来自衛隊からの武器盗難に防衛庁は神経過敏になっていた。上からの自衛隊の武器盗難を徹底して無くすようにという厳しい通達に青木隊長はじめ武器盗難特別捜索班のメンバーは武器窃盗犯を捕まえるのに必死になっていた。

大城達四人の乗った車はカリナーシティーのヤラを過ぎセンガンダも素通りした。センガンダはカリナーシティーの東端にあり、コンビニエンス、ガソリンスタンドと続き、カリナーエアーベースを見学する観光客相手のお土産店を過ぎると家並みは途絶える。県道二十四号線の右側はカリナーエアーベースの金網が延々と続き、左側は濃い緑が絨毯のように広がっている森林地帯であった。濃い緑に覆われている森林地帯はカリナー弾薬庫と呼ばれ、車窓からは見えないが広大な森林地帯には密かに建っている弾薬倉庫が数多く点在している。カリナー弾薬庫はアメリカ軍のあらゆる種類の銃や爆弾やミサイルが格納されているアジアで最大の弾薬の宝庫である。

大城の運転する車はカリナーエアーベースとカリナー弾薬庫に挟まれた県道七十四号線を東進し続けた。暫くすると前方に十字路が見えた。カリナーエアーベース第三ゲート前の十字路である。大城の車はカリナーエアーベース第三ゲートの十字路に近づくとスピードを落として十字路をゆっくりと左折した。

「大城達の車が左折して間道に入りました。」
ハンドルを握っている斎藤が言った。

「左折したらどこに向かうのですか。」
「そのまま間道を進めば三二九号線に出ます。しかし、間道には左折する道路が数ヶ所あります。それらの道路がどこに行くか私は知りません。」

「大城達の車を見失ったら大変です。急いで十字路を左折しなければ見失うかも知れません。」

「そうですね。」

大城達の車の二百メートル後方で車のハンドルを握っていた斎藤は左折した大城達の車を見失わないようにとスピードを上げた。

大城達の車を追って十字路にやって来て、左折指示のランプを点滅

しながらスピードを落とした時、鈴木は大城達の車が十字路を左折していないことに気づいた。

「あれ、大城達の車が駐車場にあるぞ。」

「え。」

斎藤は鈴木の声に驚いた。そして、

「しまった。」

と叫んだ。

十字路を左折したと思っていた大城達の車は十字路を左折してはいなかった。カーリーナエアベース第三ゲートに面している十字路の左側には道路に沿って十台ほどの車が駐車できる小さな駐車場があり、大城達の車は十字路を左折したのではなくて十字路手前で左折して小さな駐車場に入ったのだ。駐車場には五台の車が駐車していて、駐車場の入り口に近い所に駐車していた大城の車を鈴木は見たのだ。

大城達が十字路を左折したと思ったのは斎藤と鈴木の錯覚であった。その駐車場はアメリカ軍関連の事務所が使用しているが駐車場には困いがなく管理者も居ないので誰でも自由に駐車することができた。駐車場は車道からは見通しが悪く、第三ゲートの十字路近くまで来た時に始めて左側にある駐車場の存在に気づくほどだ。

斎藤の運転する車は左折のランプを点滅させながら十字路の白線近くまで来ていた。信号は青であった。信号が青であるのに停車をすれば大城達に怪しまれてしまう。斎藤は停車することもバツクすることも許されなかった。

「あそこに駐車場があるのは知りませんでした。信号は青です。停車はできません。もう左折するしかありません。」

斎藤はハンドルを左に回転させて間道に入った。

なぜ、尾行している大城達の車が十字路手前の駐車場に入ったのだろうか。鈴木は大城達に尾行を感づかれてしまったのかと心配になった。

「なぜ、あの駐車場に入ったのだろうか。もしかして私たちの尾行に気づいたのだろうか。」
と鈴木は言った。

「そうですね。私達が尾行しているのに気づいて、尾行されているかどうかを確認する目的で十字路の駐車場に車を駐車させたかもしれません。」

と言いながら斎藤は十字路を左折するとスピードを上げて駐車場の横を通り過ぎ、駐車場の車が見えなくなった場所でスピードを落としました。斎藤はバックミラーを見ながら、

「もし、大城達が私達の車を怪しんでいたら、私達の車を追ってくるかも知れません。」

と言った。雨水がフロントガラスを流れていてバックミラーでは後続の車を見ることはできなかった。

「鈴木君。大城達が追って来ているかどうかの確認をお願いします。」

「わかりました。」

鈴木は後部座席に移ってフロントガラス越しに後続車があるのかないかを見た。

後続車は見えなかった。

「私たちを追ってくる様子はありませんか。」

「走って来る車は一台もありません。」

「そうですね。」

斎藤は車を停車した。

「まだ、後続の車はありませんか。」

鈴木は注意深く後ろを見た。車の姿は見えなかった。

「ありません。大城達は私達を追ってきてはいないようです。」

「そうですね。もしかすると、私達の尾行から逃れようとカリナーシティー方向に逃げて行ったかも知れません。」

「そうですね。」

「私は大城達の車がまだ駐車場にあるかどうかを確かめてきます。」

鈴木は車から下りようとした。

「下りるのは待ってください。車をバックさせます。」

斎藤は車をバックさせて、駐車場から百メートルほど離れた場所で止めた。

「それじゃ、駐車場の様子を見てきます。」

と言って鈴木は車を下り、強風雨の中を背を屈めてカーリーナエアーベース第三ゲート向かいの駐車場に向かった。

大城達の車はまだ駐車場にあるかどうか斎藤は心配だった。大城達の車が駐車場を出てカーリーナエアー方向に引き返していたら尾行は失敗である。ハイスピードで追っても大城達の車を再び見つけ出すのは困難だろう。それに尾行していることに気づかれていたらこの車の車種やプレートナンバーを覚えられているだろうからこの車で尾行することはできない。

斎藤は苛々しながら駐車場の様子を調べに行つた鈴木が帰つて来るのを待った。五分ほど過ぎて鈴木は戻つて来た。助手席に座ると、「大丈夫です。大城達の車はありません。私達の尾行にはまだ気づいていない様子です。」

と鈴木は言った。斎藤は鈴木の話聞いてほつとした。

「そうですか。私達の尾行は大城達にまだ気づかれていないですね。安心しました。私達の尾行に気づいて駐車場に入ったのではないとすると大城達四人はあの駐車場に来るのが目的だったということですね。一体あの駐車場でなにをするのでしょうか。やっぱり彼らのボスとあの駐車場で会う予定なのですかね。」

「駐車場には五台の車が駐車しています。もしかすると五台の車の中には大城達のボスの車があるかも知れません。」
と鈴木は言った。

「そうですね。」

暴風雨の最中で駐車場の側を通る車がほとんどないとは言え、道路から丸見えの小さな駐車場で武器の売買をやるとは考えられない。

鈴木はアパートから出てきた大城、梅津、ハッサン、シンの緊張し

た顔つきを見て危険な仕事をやるに違いないと予想していたが、どうやら自分の予想はずれていたようだ。斎藤が予想した通り、今日は大城、梅津、ハッサン、シンの四人を集めたボスに会うのが目的なのかも知れない。鈴木は張り詰めていた気持ちが緩んだ。

「斎藤君の予想が当たったようですね。あの小さな駐車場で武器等の取引はあり得ません。彼らの今日の目的はボスとの待ち合わせでしょう。」

「そうだと思います。」

「もう少し車を駐車場に近づけましょう。道路沿いは金網だけで身を隠す場所がありませんし、この風雨ですから車の外で見張るのは厳しいです。」

と鈴木は言つて、後部座席に移った。

「駐車場がぎりぎり見える所まで誘導しますのでゆっくりバックして下さい。」

「わかった。」

斎藤はゆっくりと車をバックさせた。駐車場から五十メートルほどの場所まで近づいた時に鈴木は車を止めるように斎藤に指示した。

「大城達の車が見えました。」

と鈴木は言つた。斎藤と鈴木は駐車場から五十メートルほど離れた場所に車を停めて大城達の車を見張った。

鈴木は青木に連絡した。

「もしもし、青木だ。」

「鈴木であります。大城達の車はカーリーナエアーベース第三ゲート向かいの駐車場の中に駐車しました。駐車場には大城達の車を含めて五台の車が駐車しています。私たちは駐車場から五十メートル程離れた場所に居ります。」

「四人の乗った車の様子はどうだ。」

「はい。大城達に気づかれないうちに大城達の車がぎりぎり見える場所に駐車していますので車内の様子を見ることはできません。大城達の車は現在も駐車したままです。移動する気配は今のところは

「ありません。」

「そうか。その場所で見張りを続けてくれ。その駐車場に新たに入
つて来る車もチェックするように。カーリーナエアベース第三ゲ
ートにもう直ぐ私たちも到着する。到着したら連絡する。」

「了解しました。」

鈴木は車の中から駐車場を見続けながら電話を切った。

ミサイルを積んだトレーラーが登場

九

梅津は駐車場から梅沢に電話をした。

「もしもし、梅沢さんですか。」

「ああ、梅沢だ。」

「梅沢さんの指示した通りにカーリーナエアール第三ゲート向かいの駐車場に車を停めました。」

「そうか。カーリーナ弾薬庫からのミサイル運び出しはうまくいったようだ。ミサイルを積んだトレーラーはカーリーナ弾薬庫からカーリーナエアールベースに入ったという報告があった。今は第三ゲートに向かっている。梅津、すべては順調に進んでいる。暫くすると次の指示を出すよ。その時まで待機していてくれ。それからその駐車場には仲間の車が二台駐車している。木村が運転している車とガウリンが運転している車だ。お前とは初顔だが仲間だから気にする必要はない。大城と電話を代わってくれ。」

梅津は大城に携帯電話を渡した。

「大城だ。」

「梅沢だ。ガウリンを知っているな。ガウリンも今度の仕事に参加している。」

「え、ガウリンが。」

大城はガウリンが駐車場に居ると聞いて驚いた。

「ガウリンというインドネシア人のあのガウリンか。」

「そうだ。そのガウリンだ。大城。急いでハッサンとシンをガウリンの車に移動させる。ガウリンには連絡済みだ。」

「分かった。」

大城は車から下りて駐車している車を見回した。しかし、風雨が強く駐車場に駐車している車の車窓を激しい雨滴が覆っているの

で車内の様子が見えなかった。車から離れてガウリンの車を探していると、四台目の車の屋根からガウリンが顔を覗かせた。

「ヘーイ、大城さん。」

ガウリンは大声で大城の名を呼び、手を振った。

「おお、ガウリン。」

大城は車に戻り、ハッサンの座っている後部座席のウィンドーを叩いた。ハッサンがウィンドーを下ろした。

「ハッサン。別の車に乗り移るから下りろ。」

大城はハッサンとシンを連れガウリンの車に行き、ハッサンとシンを後部座席に乗せて自分は助手席に乗った。

「ガウリンも来ていたのか。」

「大城さん、久しぶりです。」

「久しぶりだな。まさか、こんな所でガウリンに会うとはな。驚いたよ。いつウチナーに来たんだ。」

「二日前ね。大城さんに電話したかったけど、梅沢さんに誰にも連絡すると言われていたからやらなかった。大城さんは元気でしたか。」

「ああ、元気だったよ。懐かしいなガウリン、二年振りだよ。商売はうまくいっているか。」

大城の質問にガウリンの顔は沈んだ。

「商売は辞めました。」

「え、辞めたのか。」

「はい。」

「それでウチナーには来なくなったのか。」

「はい。ウチナーに来るのは二年前ぶりです。」

「そうか。だから、俺の方に電話をしなくなったのか。」

「はい。」

ガウリンは十年前からインドネシアの民芸品をウチナー島のフリーマーケットで店を出している人間や観光客を相手にしている商店等

に卸売りをやっていた。大城は知人に頼まれてガウリンに中古の軽貨物車を売ってやったり、アパートや倉庫を世話してあげたのが縁でガウリンとは親しくなった。ガウリンの商売は十年前はうまくいっていたが、フリーマーケットを開催していた大きな空地には次第にテナントビルが増えていって、フリーマーケットは消滅していった。それに、大手の卸店がガウリンの扱っている民芸品を扱うようになっていったのでガウリンの売上げは次第に減っていき、ガウリンは二年前に民芸品の卸商売を止めてウチナー島に来なくなった。ウチナー島に来る度に大城に連絡してきたガウリンが二年前の夏以降は大城に連絡しなくなっていた。

「そうか、ガウリンも敵しかったんだ。」

「そうですねしかたです。」

「それで梅沢の下で仕事をするようになったのか。」

ガウリンは黙って頷いた。

大城は自衛隊やアメリカ兵から入手した拳銃等を梅沢に売ったり、梅沢に頼まれて盗難車を保管したり、梅沢の欲しい中古車を集めたりして梅沢とは協力関係にあった。

八年前にガウリンを梅沢に紹介したのは大城だった。梅沢は麻薬を民芸品に隠して密輸する商売をガウリンに持ちかけたのだがガウリンは恐がって梅沢の話を断りたいきさつがある。ガウリンが麻薬の運びを断ったので梅沢とガウリンの縁はそれでなくなったと大城は思っていた。しかし、ガウリンは民芸品の商売がうまくいかなかったので梅沢の下で仕事をするようになったのだらう。梅沢はガウリンの話はしなかったし、ガウリンは大城に連絡しなくなったので、大城の頭の中でガウリンのことは薄れていっていた。

「そうか。しかし、梅沢の仕事を手伝うということは命がけだらう。ガウリンも大変だなあ。」

麻薬の密売は東南アジアの国々では重罪とされ死刑判決が下されることもある。ガウリンはため息をついた。

「仕方がありません。商売で失敗したから借金があります。借金を返さなければなりません。お金を稼がなければなりませんから。」

ガウリンは淋しそうな顔をした。

「大城さんもお金に困って梅沢さんの仕事を手伝っているのですか。」

大城は苦笑した。

「いや、そうじゃない。梅沢さんとは腐れ縁でな。昔から仕事を組んでいるんだ。」

「それじゃ、麻薬も扱っているのですか。」

「いや、それはやっていない。個人相手にちまちまと麻薬を売る商売は俺には向いていないからな。それにボスになって手下に麻薬を売らせるような芸当は俺にはできない。ガウリンだから言うが、実は、盗んだ車や拳銃などの武器を集めて梅沢さんに売っている。俺ができる仕事はそんなものだ。」

「そうだったんですか。」

「俺の仕事は警察にばれても刑務所で何年か臭い飯を食べばいいが、ガウリンは違うだろう。警察にばれれば死刑になる場合もあるだろう。」

「はい。」

ガウリンは暗い表情で頷いた。大城は、「そんな危険な仕事からは早く足を洗った方がいいぞ。」と言いたかったが、ガウリンの生活のことを考えれば言えなかった。

「家族は元気か。」

「はい、元気です。もう少しで五人目の子供が生まれます。」

「え、子供が生まれるのか。」

「はい。」

「そうか。」

借金があるなら子供なんか作るなと喉まで出かかったがガウリンの瘦せた顔を見るとそんな冗談を言う気になれなかった。

「それはいいことだ。今度の仕事でいくらもらうことになっているんだ。」

「一万ドルです。」

「一万ドルか。俺がもう少しアップしてくれるように梅沢さんに頼んでやるよ。」

「本当ですか。」

「ああ、大丈夫だ。早く借金を返して、新しい商売を始めるよ、ガウリン。」

ガウリンは元気がない、暗い笑いをした。

「ガウリン、そんなみみっちい顔なんかするな。人生は七転び八起きっていうからよ。ガウリンにも明るい明日があるさ。」

大城はガウリンの背中を叩いた。

「人生は霸気次第だからよ。霸気がなけりゃなにもかもうまくいかないものさ。ガウリンも霸気を出さなくては駄目だよ。」

「はい、久しぶりに大城さんの話を聞いて元気が出ました。」

「ウチナー島で商売する時は俺が手伝うからさ。じゃな、頑張れよ、ガウリン。」

「はい。」

大城はガウリンと右手で握手をやり、左手の拳で軽くカウリンの胸を突いた。大城はガウリンの車を下りて自分の車に戻った。

大城と梅津が乗っている車、ガウリンとハッサンとシンが乗っている車、それに木村とミルコとゼノビッチが乗っている車の三台はカリーナエアベース第三ゲート向かいの駐車場で風雨に叩かれながらじっとしていた。三台の車に乗っている八人のミサイル窃盗グループはボス梅沢の電話連絡を暴風雨が襲い掛かる小さな駐車場で待った。雨と風はますます強くなっていく。

梅津の携帯電話が鳴った。梅津は急いで携帯電話を取った。

「梅津か。」

「はい、梅津です。」

「梅津、第三ゲートにミサイルを積んだトレーラーがもうすぐやって来る。」

梅津はカリリーナエアベースの第三ゲートを見た。第三ゲートの監視所は県道七十四号線から百メートル奥の位置に建っていた。トレーラーの姿はまだ見えなかった。

「そのトレーラーの行き先は大城が知っている。ガウリンの車はトレーラーの直ぐ前を走り、木村の車はトレーラーの直ぐ後ろを走ることになっている。私は木村の車の後方に着く。お前たちは今から出発して斥候役をやるのだ。交通事故や通行止めがあったら直ぐに私に連絡をしてくれ。大型トレーラーは小回りが利かないから通行止めがあったら早めに進路変更をしなければならぬ。進路変更は私と大城が相談して決める。大城はウチナー島の道路に精通しているからな。それから、この暴風雨だ。木が倒れて車が通れない場所があるかも知れないし道路が冠水している場所があるかも知れない。冠水している場所があったら急いで車から下りて冠水している水溜りの深さを調べてくれ。トレーラーはどんな水溜りでも通れると思うが私達の自家用車が通れるか通れないかが問題になる。その時の対処のやり方も大城と私が相談して決める。わかったな。」

「はい。」

「大城に電話を代われ。」

梅津は大城に電話を渡した。

「大城だ。」

「トレーラーはもうすぐ第三ゲートに来る。お前はすぐ駐車場を出ろ。」

「分かった。」

「いよいよ私達の計画が実行される。」

「ぞくぞくするぜ。」

「ああ、ぞくぞくする。クレーンやシーモーターも目的地に向かって

いる。全ては順調だ。」

「そうか。」

「お前達の役割りについては梅津にも伝えた。トレーラーが第三ゲートに到着したらすぐに出発しろ。」

「わかった。」

大城は携帯電話を梅津に渡した。大城と梅津は第三ゲートを見つめた。暫くすると、大きなトレーラーが現われた。梅津が、

「トレーラーが来た。」

と緊張した声で言うと、大城は、

「いよいよ、始まるぜ、梅津よ。」

とにやりと笑いながら車をバックさせて車列から出ると向きを変えて駐車場を出た。

「あのトレーラーには何を積んであるのだ。」

「ミサイルだ。」

「ええ、ミサイルだって。本当か。」

「ああ。」

と大城は嬉しくてたまらないという風になやにやしなから言った。

「信じられない。」

梅津は目を丸くして驚いた。

「ふふ、さあ、一世一代の大泥棒が始まるぞ。」

駐車場を出た大城が運転する車はハンドルを左に回転させて十字路を左折した。

大城の運転する車は間道をゆっくりと進んだ。この道路は国道三百二十九号線に出る間道になっている。

「大城達の車が駐車場から出て十字路の方に向かいました。」

「え、本当か。」

斎藤はギアを入れ、車を出そうとした。

「車を出すのは待ってください。信号を左折してこちらにやって来

ます。今、車を出せば怪しまれます。」

大城の車は道路沿いに停車している鈴木と斎藤が乗っている車に近づいて来た。

「大城達はなんのために駐車場に入ったのだ。」

「そうですね。彼らのボスの車が入ってくると思っていました。車が一台も入ってきませんでしたし、動きもありませんでした。集合場所を変更したのでしょうか。」

斎藤と鈴木は大城達の車が駐車場に入った理由が理解できなかった。大城達の車はどんどん近づいてきた。

「なぜ、大城達の車がこの道路に入ったのだろう。」
斎藤と鈴木は身を臥せた。

「こっちの正体がばれたのかな。」
と不安になってきた斎藤が言った。

「そんなことはないと思います。」

大城達の車は斎藤達の車の側を通り過ぎていった。

「大城達の車は通り過ぎて行きました。」

「そうですね。私達の尾行はばれていないようです。」

大城達の車がカーブを曲がり、車が見えなくなった時に斎藤は起き上がり、車を始動させて大城達の尾行を再開した。鈴木は助手席に移動すると青木に電話を掛けた。

「青木隊長、鈴木です。」

「おお、鈴木か。大城達に動きがあったのか。」

「はい、ありました。大城達の車が駐車場を出しました。私たちの車の横を通り過ぎていきました。今から尾行を開始します。」

「なに、お前達の車の側を通り過ぎていったのか。」

「はい。」

青木の車はコザシティーの方から来て、カーリーナエアベース第三ゲートの手前二百メートルの場所に停車したところだった。

「駐車場で仲間と落ち合うか取引相手と会うと思っていたが、私の予測は外れた。気をつけて尾行を継続してくれ。私達は駐車場が見

える場所に停車したところだ。私は暫くの間駐車をみ張っている。

「え、青木隊長は第三ゲートに着いたのですか。」

「今、着いたところだ。」

鈴木は青木が来たことを知りほっとした。

「慎重に大城達を尾行してくれ。」

「分かりました。」

駐車で大城達が彼らのボスに会うだろうと予測していた青木は自分の予測がはずれたのでがっかりした。大城達が駐車していた駐車場には手掛かりになるものは何もないとは思ったが、念のために駐車を調べることにした。

「天童、駐車場に行ってくれ。」

青木は車をスタートするように天童に指示した。その時駐車場から新たな車がゆつくりと出てきた。

「天童、車を止める。」

駐車場から出てきた車はカーリーナエアベース第三ゲート前の十字路を左折すると十字路から数十メートル進んで止まった。

「大城達の仲間でしょうか。」

「大城達と同じ駐車場から出て来たということは大城達の仲間である可能性が高い。」

青木の顔は険しくなった。

「なぜ、あそこに車を止めたのでしょうか。」

「分かん。とにかく、駐車場には大城達の仲間がすでに来ていたということだろう。もしかすると駐車場で仕事の打ち合わせをしていたかも知れない。駐車場から二台の車が出て来たということは彼らの仕事が始まるかも知れない。天童。しばらく様子を見よう。」

「はい。」

天童はギアをノーマルしてからサイドギア引いた。

その時、赤いスポーツカータイプの車が青木の車の横を通り過ぎていった。赤いスポーツカータイプの車が十字路に差し掛かった時、第三ゲートから黒い煙を吐きながら大型トレーラーが出てきた。大型トレーラーは山のような荷を緑のカバーで覆っていた。大型トレーラーは轟音を出しながら急停車した赤いスポーツカータイプの車の前を通り過ぎカーナエアーベース第三ゲートの十字路から間道に入っていた。赤い車はトレーラーが通り過ぎた後にカリナーシェイの方へ去って行った。

青木は予想もしなかった大型トレーラーの突然の登場に驚いた。

「隊長、もしかするとあの大型トレーラーは武器窃盗集団と関係があるのではないですか。」

「うむ。もしかするとあのカバーの中には盗んだ武器が積まれているのかもしれない。」

「あれが武器だとすると大量の武器が窃盗されたことになります。」
「そうだな。」

天童は沿道に停まっていた車がないことに気づいた。

「停車していた車がありません。」

天童は慌てて大型トレーラーを追おうとしてギアを入れた。

「待て、天童。」

青木が車を発進するのを止めた。

「あのトレーラーが鈴木、斎藤が尾行している武器窃盗団と関係がある可能性は高い。しかし、相手は大型トレーラーだ。せいぜい時速二、三十キロのスピードだろう。尾行はやりやすい。それに鈴木達がトレーラーの前に居る。トレーラーを見失うということない。それよりも冷静に回りの様子を見る必要がある。駐車場にはまだ三台の車が駐車している。彼らの仲間の車がまだ残っているかも知れない。あせりは禁物だ。」

「はい、分かりました。」

天童はギアをニュートラルに戻した。

青木の判断は正しかった。大型トレーラーが間道に入った後に大型トレーラーを追うように十字路近くの駐車場から一台の車が飛び

斉藤と木村の尾行がばれた。二人の命は風前の灯

「隊長。新たな車が駐車場から出てトレーラーの後を追いました。」

「ああ。」

「尾行しますか。」

「さて、あせるな天童。大型トレーラーの前に二台の車、後ろに一台の車がついた。これはかなり綿密な計画であると考えなければならぬ。うかつな行動はできない。」

「はい。」

青木はなおも様子を見るために車を発車させなかった。大型トレーラーはスピードが遅いから追いつくのは簡単である。大型トレーラーに追尾する車がないことを確かめてから尾行を初めても大型トレーラーを見失うことはない。青木たちは暫くの間駐車場を見ていたが、駐車場に残っている二台の車は動かなかつた。

青木は駐車場の中を調べるために、

「天童、駐車場に行ってくれ。」

と指示した。天童は車を発進した。

「止める、天童。」

青木の鋭い声に天童はすぐに車を止めた。それから駐車場を見た。

しかし、駐車場の中の二台の車は動いていなかった。

「駐車場に怪しい動きはありませんが。」

「駐車場ではない。向こうを見る。」

青木は前方を指した。見るとカリナーシティー方向から水しぶきを上げて近づいてくる車があった。

「あの車も武器窃盗団の仲間なのでしょうか。」

天童は青木に聞いた。

「それはわからない。用心第一だ。あの車が通り過ぎるのを待とう。」

「

「はい、わかりました。」

カリナーシティーの方から来た車は十字路に來るとスピードを落としました。そして十字路を左折して間道に入っていった。

「隊長。あの車も武器窃盗団の仲間でしょうか。」

「その可能性は高いな。」

駐車場を出た三台目の車が最後の車ではなかったようだ。

青木は県道七十五号線に一台の車も走っていないのを確認してから車を間道に入るように天童に指示した。車が走り出すと青木は鈴木に電話した。

「鈴木です。」

「青木だ。」

「青木隊長。今のところ、尾行は順調です。」

「鈴木よく聞け。今カリナーエアーベース第三ゲートから大型トレーラーが出て間道に入った。大型トレーラーは大量の荷を積んでいた。トレーラーの荷はカリナーエアーベースから盗んだ大量の銃火器の可能性があると思われる。トレーラーの前と後ろには不審な車が追隨している。トレーラーは君達の後を追う形になった。後ろにも気を付けながら尾行をしてくれ。私たちはトレーラーの後ろを付いていく。」

「了解しました。」

鈴木は電話を切ると、

「斎藤君、後ろから大型トレーラーが来ているそうだ。」

「え、大型トレーラーですか。」

「そうです。青木隊長の話では盗んだ武器を積んでいる可能性が高いそうです。」

「それじゃ、武器窃盗団はカリナーエアーベースから大量の武器を盗んだということですか。」

「そうなのだと思います。」

「私達は武器窃盗団の車に挟まれた状態になったですね。私達はどつすればいいのですか。」

「この間道では私達は身動きができません。今は慎重に尾行をするようにとのことです。」

「わかりました。」

斎藤と鈴木は慎重に尾行を続けた。

間道のうっそうと木が生えている場所に来ると葉っぱや小枝が路上に散らばっていた。大城はスピードを落とした。

「大きい枝が道に落ちていないか心配だ。」

梅津は顔をフロントガラスに近づけて前方を注意深く見ながら言った。

「そうだな。まあ、枝だったらお前と二人で片付けることができるが木が根元から倒れているとヤバイぜ。」

タイヤがバキバキと枝を踏むのが尻に伝わってきた。

「お、あれは水溜りじゃないか。」

枝葉が散らばっている先に水溜りが見えた。水溜りは道路一杯にひろがり長さは十メートルくらいあった。

「深くなければいいが。」

梅津は呟いた。大城は冠水している場所で車を停めた。

「深くはないと思う。」

「そうかな。」

梅津は心配そうに大城を見た。

「何回か大雨の時にこの道を通ったことがあるが。あの時は大丈夫だった。」

「そうか。」

「車を入れるよ。」

大城はゆっくり水溜りに車を入れた。大城は慎重に車を進めた。大城の言った通り水溜りは深くはなかった。水溜りから出ると大城は車を加速させた。

斎藤は大城達の車がスピードを落としたことに気づいた。

「鈴木君、大城達の車がスピードを落としました。」

「え。」

「私もスピードを落とします。大城達はなぜスピードを落としたのでしょうか。」

「道路に枝葉が散らばっています。その性ではないでしょうか。」

「そうですね。」

暫くすると大城達の車が停まった。斎藤と鈴木は緊張した。

「車が停まりました。」

斎藤はそう言つと車を停めた。

「水溜りがあるのででしょうか。」

「あ、水溜りが見えます。」

大城達の車はゆっくりと水溜りを走った。

「水溜りを走っています。」

大城達の車は水溜りから出るとスピードを上げた。

「やっぱり水溜りがあったせいで車を停めたようです。」

斎藤はほつとした。そして、車のスピードを上げた。

ガウリンは前方に白い車が止まっているのを見た。暴風雨のために故障した車が停まっていると思つたがその車はゆっくりと走り出した。

「おかしいな。」

ガウリンはつぶやいた。

「大城さん達の車と私達の車の間には一台の車もないはずなのに、前の方に車が走っている。」

前を走っている白い車をガウリンは怪しんだ。

「梅沢さんに連絡をした方がいいな。」

ガウリンはそう言つと梅沢に電話した。

「梅沢だ。どうしたガウリン。」

「梅沢さん。怪しい車が前を走っています。」

「え、怪しい車だって。どういうことだ。」

「私達と大城さんの車の間には車が走っているはずはないのに車が走っているということです。」

「どんな車だ。」

「白のセダンです。あ、もしかすると大城さん達が駐車場に入った時に、大城さん達の後からやってきて十字路を左折していった車かもしれません。」

「え、どういうことだ。」

「大城さん達の後ろから走ってきた車があつたんです。その車は大城さん達の車が駐車場に入った後にやって来て十字路を左折しました。私が駐車場に入ってから目の前を通過した車は後にも先にもその車一台だけだったんです。」

「つまり、その車はどこかに隠れていて、大城達の車が間道に入ってきたので大城達を尾行しているということか。」

「それ以外には考えられません。」

「くそ、厄介なことになったかも知れないな。悪い予感がするぜ。」

「どうしましょうか。」

「できるなら事を荒立てない方がいい。大城達に連絡するから電話を切るよ。」

「はい。」

梅沢はガウリンとの電話を切ると急いで梅津に電話を掛けた。

「梅津、梅沢だ。」

「梅津です。」

「気を付ける。お前たちの後ろを怪しい車が付いている。」

「え、まさか。」

梅津は予期していなかった梅沢からの話に仰天した。梅沢は後ろを

見た。しかし、激しい雨のせいで後ろの車は見えなかった。

「くそ、いつから俺たちを尾行していたんだ。」

「梅津、大城に話して車のスピードを落として後ろの車に接近させる。車に乗っている奴の顔を見ってみる。見覚えのある人間かどうか確かめるんだ。」

「はい。」

梅津は携帯電話を手で押さえて大城に話した。

「大城。俺達を尾行している車があるらしい。」

「まさか、嘘だろう。信じられねえ。」

大城はバックミラーを見た。しかし、バックミラーは視界が悪くて車の後方を見ることができなかった。

「梅津、あせるなよ。尾行していると決め付けるのはまだ早い。偶然にお前たちの後ろを走っていることも考えられる。いいか梅津、よく聞け。今度の仕事はどでかい。一生に一度あるかないかのどでかい仕事だからできるだけ荒立てたくない。慎重にやってくれ。大城と話したい。お前の携帯電話を大城の耳に当てる。」

梅津は、「梅沢さんから。」と言いながら携帯電話を大城の耳に当てた。

「大城だ。」

「大城。慎重にやれ。今度の仕事はどでかい。失敗は許されぬ。」

「分かっている。」

梅津は電話を切った。

「電話は終わった。梅津。後ろの車が見えるか。」

梅津は後ろを見た。

「見えない。もっとスピードを落として。」

「ああ。」

大城はスピードを落とした。すると梅津が言った通り雨の中に白い車が見えた。

「車が見えた。大城。どうやら尾行されているのは確かのようにだ。」

「くそ。俺達を尾行しているのはどこのどいつだ。」

大城は尾行されていることにショックを受けた。

「尾行されているのは間違いない。この車がスピードを落としたらむこうの車もスピードを落としてこの車と同じスピードで走っている。」

「どうする。」

「車に乗っている人間が知っている人間かどうかを調べると梅沢さんは言った。スピードを落として後ろの車に接近してくれ。」

「わかった。」

大城は車のスピードを徐々に落としていった。

斎藤は大城が車のスピードを落としたのに気づいた。

「変だぞ。」

「どうかしたのか斎藤君。」

「前の車がスピードを落としたようです。」

「なに、なぜスピードを落としたのだろう。」

「さっきと同じように前方に障害物を見つけたのじゃないですか。」

暴風雨で道路沿いの木の枝が折れ落ちたとか、それとも水溜りを発見したかもしれません。」

「そうかも知れませんか。」

斎藤は前の車に合わせてスピードを落とした。

「お、後ろの車もスピードを落としたぞ。大城、もっとスピードを落とせ。」

「くそ。もし、俺達を尾行しているのならただじゃおかないぞ。」
大城はスピードをさらに落とした。

「大城達の車の前方に水溜りが見えません。」

「スピードの落とし方が変です。障害物がないのにかなりスピードを落としています。」
斎藤は大城達の車のスピードの落とし方を変に感じたが、斎藤は大城達の車に合わせるようにスピードを落とした。すると大城達の車はさらにスピード落としていった。大城達の車に合わせて斎藤もスピードを落としたので大城達の車はますますスピードを落とし、最後には停まってしまった。

「あ、前の車が停まりました。前方に障害物らしきものも水溜りも見当たりません。あんな場所で車を止めるのは変です。もしかしたら私達の尾行に気づいたのでしょうか。」

「分かりません。後ろからは大型トレーラーが近づいてきます。どうしますか。」

「どうしますか。」

斎藤と鈴木は顔を見合わせた。

「彼らに尾行していることが知られているとしたら、ここに停車しているのは危険です。それにここに停車し続ければ尾行していることを確実に知られてしまいます。仕方ありません。尾行を中止しましょう。」

「え、尾行を中止するのですか。」

「この車は大城達に覚えられています。この車で尾行するのは無理です。引き返して青木隊長の指示を仰いだ方がいいと思います。」
斎藤はコーナーンした。

「梅沢さん。やっぱり俺達を尾行している車のようです。俺達の車が停まったらその車も止まりました。で、止まったままです。」

「くそ。あり得ないことだ。信じられない。そいつらの正体は一体何者なんだ。いいか梅津。こうなったら逃がすわけにはいかねえ。」

絶対に捕まえる。」
「分かりました。」

「あれ、前の車がユーターンしたぞ。」
怪しい車がユーターンしてガウリン達の方に向かってきた。ガウリンは怪しい車が逃げるのを防ぐために反対車線に車を入れた。トレーラーを運転しているロバートはガウリンの車が反対車線に入ったのを見て、ユーターンしてやってくる車が敵の車であり、逃げ道を防がなければならぬと思った。ロバートは反対車線にカーブを切り、トレーラーで二車線道路を塞いだ。

斎藤は逃げ道を塞がれて車を止めた。

「まずいです。後ろの人間にも尾行を気づかれたようです。トレーラーが二車線を完全に封鎖しました。ここから逃げるのは不可能です。」

斎藤は再びユーターンした。

「どうしますか。」

「どうしますか。」

前も後ろも塞がれたので若い斎藤と鈴木はパニック状態になった。

「仕方ありません。前の車を抜きましよう。それしかないと思います。」

「そうですね。それしかないと思います。」

斎藤は大城達の車に近づいていった。

「やっぱりやっぱり。くそ。あの車は俺達を尾行していたんだ。尾行しているのがばれたので逃げる気だな。大城、あの車の逃げ道を

塞げ。」

「まかせとけ。」

大城は車をバックさせて道路の中央に止めた。

齋藤は大城の車が道路中央に移動したのを見て車を停めた。

「車が道路の中央に移動しました。どうしますか。」

「前方の車の側面を通って逃げるしかありません。もし、前方の車にぶつかってもそのまま突っ切ったほうがいい。」

「わかりました。もし、前方の車と衝突して車が止まってしまったら走って逃げます。それでいいですか鈴木君。」

「それしか方法はないようです。了解。」

齋藤はアクセルを踏んだ。齋藤と鈴木は車から素早く逃げられるようにシートベルトを外した。齋藤が運転する車は大城達の方に向かってゆっくりと走り出した。

正体不明の車が大城の車にゆっくり接近してきた。

「ここを強行突破する気だな。そうはさせないぞ。大城、あの車にここを突破させるなよ。」

「ああ、まかせとけ。」

梅津は急いで車から降りて車の後ろに回って拳銃を抜いた。大城はハンドルを握り、走ってくる車を待った。走ってくる車が左側を通り抜けようとすれば車をバックさせる。右側を通り抜けようとすれば前進する。走ってくる車が右側を通っても左側を通っても進路を断つつもりだ。大城はギアをニュートラルにして接近して来る車を待った。接近して来る車は右側を通るか左側を通るか。

梅津は車の背後に回り拳銃を構えた。正体不明の車はゆっくりと接近してくる。正体不明の車が大城の車にぶつかって止まったら、直ぐに車に駆け寄って正体不明の車に乗っている人間に銃を付きつけ

て彼らを捕まえる積もりだ。

斎藤は梅津が車の後ろから拳銃を構えたのを見た。

「鈴木さん。相手は拳銃を持っています。」

斎藤は車を止めた。

「そうですね。武器窃盗団だから拳銃を持っていて当然かも知れませんが。」

鈴木は拳銃を抜いて安全装置をはずした。

「前を突破する以外に方法はありません。」

「そうですね。」

斎藤も拳銃を抜いた。

ガウリンは斎藤達の車を追ってスピードを上げた。

「どうしたのですか、ガウリンさん。」

異常事態を察知したハッサンはガウリンに聞いた。

「あの前の車は大城さん達を尾行している車のようです。捕まえなきゃ。」

「敵ですか。」

「ああ、敵だ。」

ハッサンはガウリンの話聞いて拳銃を抜いた。

正体不明の車は急にスピードを出して右側の車線に入った。大城は前進して正体不明の車に接近した。正体不明の車は急停車するとバックして止まり左側車線に入ってきた。大城は慌ててバックして反対車線に入った。すると正体不明の車はカーブを切って右側車線に入ってスピードを上げた。・・・逃げられる・・・と思った梅津は正体不明の車に向かって拳銃を撃った。梅津が放った銃弾は正体不明の車のフロントガラスを撃ち抜いた。

尾行者の斎藤と鈴木は銃撃戦で殺された。

斎藤は突然の敵の銃撃に驚いた。被弾したフロントガラスにひびが入り穴が空いた。気が動転した斎藤は思わずハンドルを切りアクセルを踏んだ。斎藤の運転する車は濡れた車道を横滑りして路肩に鈍い音を立ててぶつかり跳ね上がった。跳ね上がった車は街路樹のヤシの木にぶつかって止まった。

鈴木と斎藤はシートベルトを外していたために衝突の衝撃で斎藤はハンドルに胸を強く打ち、鈴木もダッシュボードに胸を打ち、頭がフロントガラスにぶつかりそうになったが腕で防いだ。ひびの入ったフロントガラスは鈴木の手が当たって割れた。激しい雨と風が車内に浸入した。

「大丈夫か斎藤君。」

斎藤は苦しそうにうめいていた。鈴木は外を見た。大城と梅津が近づいてくるのが見える。鈴木は割れたフロントガラスの間から拳銃を撃った。そして、

「斎藤君。」

と斎藤の名を呼んだ。

「す、鈴木君。苦しい。」

と斎藤は胸を押さえてあえぐような声を出した。

「しっかりとしろ斎藤君。車の中は危険です。外に逃げよう。」

鈴木は斎藤の肩を引っ張った。しかし、斎藤は胸の痛みがひどくて動けなかった。鈴木は斎藤を運転席から引っ張り出すことができなかった。

「斎藤君。」

鈴木は何度も斎藤の名を呼んだ。そして、斎藤の肩を引っ張った。斎藤は鈴木の声に反応し徐々に助手席に移動した。

ガウリンとハッサン、シンが銃を構えて斎藤達の車に近づいている時に、

「ガウリン。」

と背後で呼ぶ声があった。振り返ると梅沢と木村、ミルコ、ジエノビッチがトレーラーの方から走ってきた。

「尾行している奴はどうなった。」

「車の中に居ます。大城さん達と撃ち合っています。私達は後ろから攻めようとしています。」

「そうか。木村。ミルコ。お前達も行け。」

「へい。」

木村、ミルコ、ガウリン、ハッサン、シンの四人が腰を低くして斎藤達の車に近づいていった。

鈴木はドアを開けて車の外に出て、助手席に移った斎藤の頬を叩いた。

「斎藤君。大丈夫か。」

「胸がひどく痛いです。」

「敵は拳銃で襲撃しています。反撃しましょう。」

「あ、ああ。」

斎藤は胸の痛みを我慢しながら拳銃を握り、起き上がると大城達に向けて拳銃を撃った。

「斎藤君。早く脱出しないとまずいです。動けますか。」

「なんとか動けます。青木隊長に連絡しなくては。」

斎藤は応戦しながら内ポケットから携帯電話を出した。

「駄目だ。壊れている。」

斎藤の携帯電話はハンドルに胸を打った時の衝撃で壊れていた。

「内ポケットに入れていた私の携帯電話はハンドルとぶつかって壊れています。鈴木君。青木隊長に電話をしてください。」

「携帯電話が見つかりません。」

「え。」

「落としたようです。」

鈴木は車が衝撃を受けた時に携帯電話を落としていた。

「探してみます。」

斎藤は助手席の回りを探した。

「ありました。」

鈴木の携帯電話は助手席の下に落ちていた。

「う。」

斎藤の肩に激しい痛みが走った。銃弾が肩を射抜いたのだ。斎藤は肩の痛みを我慢しながら、携帯電話を鈴木に渡した。

「鈴木君。早く青木隊長に電話した下さい。」

「はい。」

鈴木は斎藤から受け取った携帯電話を開いた。しかし、開くと自動的に明るくなる画面が明るくならなかった。鈴木はスイッチを押した。しかし、画面は明るくならなかった。

「変です。携帯電話がつきません。」

「え、どうして。」

斎藤は助手席の床に手を置いた。床は浸入した雨で水が溜まっていった。

「床は水浸しです。携帯電話に水が入ったと思います。」

携帯電話のスイッチを押し続けていた鈴木の親指が止まった。

「ああ、もう駄目だ。」

鈴木は絶望の声を上げた。

梅沢の指示でハッサンは車の後ろに回り、車の中の様子を調べた。

ハッサンは助手席に一人、助手席の外に一人居ることを伝えた。梅沢は大城達に拳銃を撃たせて鈴木達の注意を大城達に向けさせながら、助手席の斎藤を狙って運転席の方にはガウリンと木村を、車の外にいる鈴木を狙って車の左側にはハッサンとシンを配置した。

梅沢の合図で四人は立ち上がり、斎藤と鈴木を狙って一斉に拳銃を

撃った。

銃声が止んだ。梅沢は銃弾を打ち込んだ車に駆け寄った。大城と梅津も駆け寄ってきた。木村は銃を構えながら運転席に近寄った。斎藤が助手席から体をずらして仰向けに倒れている姿が見えた。木村は斎藤を凝視しながら車の窓から顔を入れて斎藤を見た。斎藤も銃弾を浴びてすでに死んでいた。

ハッサンは鈴木に近寄っていった。開いているドアに後頭部をつけて体をくの字にして鈴木もすでに死んでいた。

木村は梅沢に、

「梅沢さん。二人とも死んでいます。」

と斎藤と鈴木が死んでいることを伝えた。

「そうか。」

梅沢は尾行していた男達が死んでほっとした。しかし、なぜ二人の男が大城達の車を尾行していたのか、そのことに対する不安は消えなかった。

梅沢が一番恐れていたトラブルが発生してしまった。暴風雨でもカーリアエアークラスから目的地まで車なら二十分しか掛からない。大型トレーラーなら四十分あれば到着できる距離である。たった四十分もかからない道程だというのにカーリアエアークラスから出て間もない場所でトラブルが発生してしまった。一難は去った。しかし、こんなにも早く難がやってきたということは二番目の難もすぐにやって来るのかもしれない。

不安と苛立ちに梅沢は、

「ち。」

と舌打ちをした。

しかし、どのような事態が起こっても一世一代の大仕事を仕掛けた梅沢にはぐずぐず迷っている余裕はない。一分一秒でも早く最悪事態を処理してミサイルを目的地まで運ばなければならない。

「二人を引きずり出して身元を調べる。」

梅沢の命令で梅津とハツサンが鈴木を引きずって車の側に運んできて仰向けに寝かした。木村とシンは助手席から斎藤を引きずり出して鈴木の前側に並べた。

「こいつらは何者なのだ。」

梅沢の後ろに居たミルコが、

「ミスター・ウメザワ。」

と梅沢を呼んだ。

「なんだ。」

と言って後ろを振り返るとミルコがトレーラーの方を指さした。

トレーラーを見て梅沢は啞然とした。ミサイルを覆っていたカバーがめくれてしまい、めくれたカバーが吹き上げる暴風雨と激しく踊っていたのだ。全然予想しなかった光景である。踊っている緑のカバーがバーンと倒れてミサイルを覆った。あっけに取られている梅沢は呆然とトレーラーを見た。倒れたカバーは再び立ち上がり狂ったように踊り始めた。

止まっていた梅沢の思考が動いた。カバーが破れたのだろうか。暴風雨とはいえミサイルが丸見えの状態で国道を走るわけにはいかない。暴風雨でも国道を通っている車はあるだろう。トレーラーと交錯する車の運転手がカバーが破れて露わになったミサイルを見れば警察に通報するに違いない。パトロール中のパトカーとすれ違う可能性だつてある。パトカーにミサイルを見られてしまえばミサイル窃盗計画は頓挫し、梅沢達は刑務所行きだ。最悪の事態だ。なんとかしなければならぬ。

「くそ、なんでカバーが破れるんだ。ロバート、ジョンソン。俺と一緒に来い。」

梅沢はロバートとジョンソンを連れてトレーラーの方に走った。

「くそ、今日は厄日だ。」

梅沢は忌々しげに言葉を吐いた。

「くそ、最悪だ。最悪の事態だ。」

しかし、梅沢は最悪な事態に困惑している余裕はない。早く決断し早く行動し早く目的地に到着しなければならぬ。なにしろミサイルをアメリカ軍から盗むのは梅沢一世一代の大仕事なのだ。破れた箇所を応急処置して、一刻も早くカバールをミサイルに被せなければならぬ。

「ロバート。カバールのどこが破れているのだ。修理はできるか。」
ロバートはミサイルの上で踊っているカバールを調べた。激しく動き回っているカバールは裂けてはいないし穴が開いているようでもなかった。

「カバールは破れては居ません。」

「本当か。カバールは破れていないのか。」

梅沢はカバールが破れていないと聞いてほっとした。

「はい。カバールを繋いでいたロープが切れています。」

「良かった。直せるか。」

「ロープを繋ぐだけだから直せます。」

「それじゃ、ロバートはジョンソンとトレーラーに上ってカバールを直せ。できる限り早く直せ。」

「この暴風雨では二人では無理です。あと二人か三人の応援が必要です。」

「分かった。おうい。木村。ミルコ、ジェノビッチ。」

梅沢は木村、ミルコ、ジェノビッチの三人を読んだ。梅沢に呼ばれた三人が走ってきた。

「お前らもトレーラーに上れ。ロバートを手伝って早くカバールを直すんだ。」

梅沢はミルコ、ガウリンもトレーラーに上らせた。

「ぐすぐすすするな、早くやるんだ。」

苛々している梅沢は怒鳴った。梅沢はカバールの補修の手配をやって、急いで大城たちのところに戻った。

「二人の正体は分かったか。」

と梅沢は聞いた。

「梅沢さん。こいつら防衛庁の人間ですぜ。」

梅津が言った。

「なに、防衛庁だと。」

梅津達の車を尾行していた人間が防衛庁の人間と聞いて梅沢は驚いた。ミサイル窃盗の実行計画の全容は梅沢だけが知っている。今日ミサイル窃盗を実行するのは直前まで大城以外は誰も知らなかった。防衛庁が今日のミサイル窃盗を知っているのはあり得ないことである。

「本当に防衛庁の人間なのか。」

尾行していた二人が防衛庁の人間であるのが梅沢は信じられなかった。

「ポケットに身分証が入っていました。写真付きです。二人が防衛庁の人間であるのは間違いないです。」

「どうして防衛庁の奴らに尾行されたのだ。考えられない。」

梅沢は呟いた。鈴木を見た大城が、

「ひよっとすると梅津はこいつにずっと尾行されていて、こいつは梅津と一緒にウチナーに来たのかも知れないな。」

「え、どうしてだ。」

梅津が驚いて大城に聞いた。

「こいつの膚が白い。まだウチナーの陽に全然焼かれていない。一週間もウチナーに居ればナイチャーの膚は赤くなる。こいつはウチナー島に来て間もないな。」
と大城は言った。

陽射しの強い亜熱帯気候のウチナー島に住んでいる大城は膚の焼け具合で温帯気候の本土から来た人間がウチナー島に来てどのくらいの日数を過ごしたかを判別することができる。本土から来た直後の人間はウチナー島の強烈な太陽の紫外線を受けていないから膚が白い。本土から来た人間は一週間もすればウチナーの強烈な太陽の日差しに焼かれて膚が赤くなり、一年が過ぎれば赤っぽい赤銅色にな

り、数年もすれば黒っぽい赤銅色になる。鈴木が白いということとは鈴木はウチナー島に来てまだ数日しか経っていないということになる。

「梅津の膚の色とこいつの膚の色は同じ白さだ。ということはこいつは梅津と同じ日にウチナー島にきたことになる。」

「なるほどな。」

梅津は頷いた。梅津は鈴木が自分の膚の色と比べた。

鈴木と梅津の膚の白さは同じだった。

「俺が尾行されていたのか。くそ、気づかなかった。」

梅津は恐る恐る梅津の顔を見た。梅津は斉藤を指して大城に聞いた。

「こいつはどうだ。こいつも本土から来たのか。」

「こいつはウチナーに来て一年くらいは住んでいる。」

「そうか。」

梅津をこっぴどくとつちめたい梅津であったがしかしそんな時間的な余裕はない。防衛庁の尾行者二人と銃撃戦をやり、トレーラーのミサイルを覆ったカバーがめくれた。トラブルがたてつづけに起こってしまった。トラブルを早急に解決して、目的地に出発しなければならぬ。梅津が防衛庁の人間に尾行されていたことの問題に触れる余裕はなかった。梅津は事故の後始末を急いだ。

「二人をここに放置しておくのは拙いな。大城の車のトランクに入れて置け。」

と言ったが、すぐに車のトランクに入れるのはまずいと考えた梅津は、

「いや、死人をトランクには乗せない方がいい。」

と言いながら梅津は辺りを見廻わした。歩道の側にうっそうと雑草が生えている場所があった。

「梅津。あそこの草むらに死体は隠しておけ。車から見えないように草の中に隠すんだ。」

「はい。」

苛立っている梅津は大声を出した。

「死体を隠したら急いで出発するんだ。」

「梅沢さん。車はどうする。草むらに隠そうか。」
と大城は聞いた。

「車を移動するのは時間がかかる。車はそのままがいい。とにかく
逃げ。くそ、今日は厄日だ。」

その時、トレーラーに一台のスポーツカータイプの車が近づいて
きた。車に気づいたミルコが横で作業をしている木村の腹をつつい
た。木村がミルコを振り返るとミルコは赤い車を指さした。赤い車
はトレーラーの後ろに停めてある梅沢の車の後ろに停まった。木村は
大声で梅沢を呼んだ。赤い車から一人の若い男が出て来て、トレ
ラーに近づいてきた。

「梅沢さん。」

と木村は梅沢を呼んだが暴風雨のせいで梅沢の耳には届かなかった。

木村は、

「梅沢さん。」

と大声で呼んだ。

「なんだ。」

と梅沢はトレーラーの方を振り向いた。

「男が一人やってきた。」

「なに。」

梅沢の声ははつきりとは聞こえなかった。

「男が一人トレーラーに近づいてきた。」

と木村は若い男を指しながら叫んだ。

「大城、ちょっと待って。」

梅沢は大城達が二つの死体を移動するのを止めて、

「なんだ。」

と言いながら、トレーラーの方に走った。

「男が一人、やってきていますぜ。」

走って来る梅沢に木村はトレーラーの側まで来ている若い男を指し

ながら言った。

「男がやって来ただと。」

と梅沢が聞くと、木村は頷いた。

その男は防衛庁の人間なのだろうか、それとも一般人なのだろうか。トレーラーに近づいてきた男が防衛庁の人間であろうが一般人であろうが事故現場も二つの死体も見せるわけにはいかない。

「くそ、どうして災難がこうも続くんだ。」

と苦々しく呟きながら梅沢はトレーラーの運転台を回った。その途端に若い男と鉢合わせになった。

青木隊長は最後尾を走っている梅沢の車の後を追った。暫くすると梅沢の車がスピードを落として停まった。

「隊長。梅沢の車が停まりました。」

「天童、車を止める。」

天童は車を停めた。

梅沢の車の前を走っていた車も停まっていて、その車の前には間道を横断して止まっているトレーラーが見えた。トレーラーの後ろに停まった二台の車に乗っていた人間達は車から下りて梅沢を先頭にトレーラーの反対側に走って行った。

「隊長。あれはなんでしょうか。」

天童はトレーラーの荷台を見て言った。激しい雨の中でトレーラーの荷台の上で激しく動き回るものが見えた。

「カバーだ。トレーラーの荷物を覆っていたカバーのロープが解けたのだろう。」

「トレーラーは事故を起こしたのでしょうか。」

「うむ。その可能性もあるな。」

「鈴木さん達に電話で聞いた方がいいのではないですか。」

「そうだな。聞いてみよう。」

青木は携帯電話を取り出して鈴木に電話をした。しかし、鈴木の話は、電波の届かない場所かスイッチが切られているというメッセ

ージを繰り返し、鈴木は電話を取らなかった。

「変だ。」

青木は悪い予感がした。

「どうしたのですか。」

「鈴木の話に繋がらない。」

「本当ですか。」

青木は次に斎藤に電話した。しかし、斎藤の携帯電話の反応も同じだった。

「斎藤の電話にも繋がらない。」

天童の顔が強張った。

「鈴木さん達はトラブルに巻き込まれたのでしょうか。」

「ううん。トレーラーが事故を起こしただけなのか、それとも鈴木達も巻き込んだトレーラーの事故なのか。」

「心配です。」

「電話に出ないということは鈴木達に何かが起こった可能性が高い。」

「はい。」

「二人とも無事であればいいのだが。」

青木の斎藤達を心配する言葉に天童は黙って頷いた。

トレーラーの向こうでなにが起こったのか。斎藤と鈴木の二人は無事なのか。青木は斎藤と鈴木の身が心配であった。しかし、武器窃盗団がいる危険な場所に行くわけにはいかなかった。しばらくは様子を見るしかない。青木は回りを見た。

「ここに停車しては怪しまれてしまう。彼らに見られない場所に移動しよう。」

反対車線の近くに石灰岩が山のように積まれた空地があった。

「天童。あの空地に車を移動してくれ。あそこに車を停めて様子を見よう。」

「わかりました。車を移動します。」

天童は車をゆっくりとターンして石灰岩が積み上げられている空地に車を入れた。

青木と天童の二人が斎藤達からの電話が掛かってくるのを待っていると赤い車が目の前を通り過ぎていった。

「赤い車が通り過ぎていきました。仲間でしょうか。」

「そうではないだろう。あの車はカリナーナエアース第三ゲートで私達の車の側を通ってカリナーシティ方面に走っていった車ではないかな。」

「そう言えばあの時の車に似ています。」

天童はドアのロックを外した。

「隊長。私は様子を見てきます。」

「そうしてくれ。」

天童は車から下りて歩道の近くに移動した。歩道の側にはすすきが生えていた。天道はすすきに隠れながらトレーラーの方を見た。赤い車は二台の車の後ろに停まり、中から若い男が出て来た。若い男はトレーラーに近づいていった。

啓太はコンビニエンスの新米店長

十

とうとう台風十八号がウチナー島にやってきた。年中無休二十四時間オープンをもットーとしているコンビニエンスの店長にとって台風来襲がなんといつても一番辛い。年中無休二十四時間オープンを売り物にしているのだから台風が来たからといって店を閉めることはできないのだ。例えば停電してもローソクや懐中電灯を準備してオープンするのがコンビニエンスのもットーなのである。

グシチャーシティーにあるコンビニエンスの店長をやっている啓太は南太平洋で発生した台風十八号がウチナー島に直進しているのが気になっていた。

「どうぞ、ウチナー島に襲来しないでください。よそに行ってください。」

と、ウチナー島の南東の太平洋上にある台風十八号が東か西に曲がってくれるように祈っていたが、啓太の祈りと期待を裏切った台風十八号は東にも西にも曲がらないで北西への進路を保ち、ウチナー島に接近し続けた。そして、いよいよ台風十八号は今日の朝にはウチナー島に上陸を開始したのだ。

テレビの気象予報では、これから風雨がどんどん強まり、昼過ぎには台風の目がウチナー島に上陸するという。これから台風十八号がウチナー島で猛威を振るうのだ。台風が気になる啓太は午前六時にはコンビニエンスに来た。

「今日は一日中店の番だ。台風が直撃するのだから、店は確実に停電するな。」

啓太はため息をついた。

台風を中心辺りの最大風速が四十メートルもあるという大型台風が

直撃するのだ。コンビニエンスが停電するのは間違いない。コンビニエンスにとって一番辛いのが停電だ。停電した時に店の運営は果たしてうまくやっていけるだろうか。初めて体験する大型台風の襲来に啓太はとても不安だった。

啓太は店長になって一年にも満たない新米店長である。啓太は二十五歳。元暴走族。私立大学を中退して定職にも就かずぶらぶらしていることに腹を立てた啓太の母親が啓太を強引にコンビニの店長にさせた。コンビニのオーナーになるには入会金、商品代金、運転資金、家賃や敷金等を含めると総額で一千五百万円もの資金が必要である。母親は五百万円は現金で、残りの一千万円は銀行から借りてコンビニエンス開店の資金を作った。母親はコンビニエンスのオーナーとなり、銀行から借りた一千万円は啓太が返済するという条件で啓太にそのコンビニエンスの店長をさせた。

啓太の母親の名前は和代といい、コザシティーで美容院をやっている。美容院はそこそこに繁盛し啓太達三人の子供を母親一人で育てた。啓太の父親は母親と別居をしていた。啓太の父親の名前は啓四郎といい、大学の時学生運動をやっていたらしい。大学に五年も在籍していたが卒業することができなくて六年目の春に大学を中退した。大学を中退した父親は学習塾を始めた。学習塾をやっている時に母親の和代と父親の啓四郎は出会い、そして結婚した。二人の間には長男の啓太と長女の春奈と次女の美夏が生まれたが、啓太が十歳の時に父親は学習塾経営に飽きたと言って学習塾を止めた。それからビデオ店をやったり古本屋をやったりライブハウスをやったりフリーマーケットをやったりと次々と商売を代えていった。商売を代えていつている内にいつの間にか父親は家に戻らなくなった。今はインターネットショップで商売するのに興味を持ち、パソコンを勉強しながらバーデスというアジアからアクセサリや民具等の商品を輸入して日本の各地の小売店やインターネットショップで販売しているアメリカ人からインターネットショップのやり方を教わ

りながら彼の商売を手伝っていた。

父親の啓四郎が世話になつてゐるバーデスというアメリカ人は元アメリカ海兵隊員でアメリカ海兵隊を十年前に除隊してウチナー島に住み、アジア各地を回つてアクセサリーや民具等を仕入れてウチナー島で卸販売をやつてゐる。バーデスはパソコンの知識も広くインターネットショップ販売もやつていた。

父親の啓四郎はバーデスからパソコンの操作やインターネット販売の方法を習いながら、今ではバーデスがアジアに出掛けてゐる時は啓四郎がバーデスの代わりに商品配達をやつたりインターネットでの注文を受けて商品の宅配の手配をやるようになっていた。

啓太の父親と母親が完全なる別居状態になつて十年以上になる。啓太の父親は自由奔放な人間で仕事は次々と変わるし啓太たち子供の面倒も母親任せであつた。母親はそんな父親に恨み言も言わないで父親が気ままに生きてゐるのを放つていた。

しかし、啓太がコンビニの店長になつた時、母親は夫の啓四郎を家に呼んで啓太の監視役を厳しく申し付けた。

母親は今まで子供の面倒を見なかつた父親を責め、父親としての責任を取れないなら犬畜生にも劣る人間だと言ひ、啓太が店長として一人前になれるかなれないかの一切の責任は監視役の父親にあるとまで断言し、もし啓太を一人前の店長にすることができなかつたら離婚すると宣告した。母親の厳しい態度に父親は渋々と啓太の監視役を引き受け、啓太が一人前の店長になれるかなれないかは自分の責任であると言ひ、啓太を一人前の店長にすることを妻に誓つた。そのようないきさつがあつて啓太はグシチャーシティーのコンビニの店長になつた。啓太の父親は自由人ではあつたが無責任な男ではなかつたので、啓太を一人前の店長にするためにあれこれと息子の啓太を指導していた。

台風がやってくると風雨が強くなるのが怖いのではない。停電をすることが恐いのだ。停電で一番困ることは店内が暗くなることではない。ろうそくや懐中電灯があれば陳列棚から買いたい商品を探すことはできる。停電で一番困ることはコンピュータで管理しているコンビニ専用のレジスターが使用できないことである。

商品の全てにバーコードがある。レジスターのスキヤナーを商品のバーコードに当てれば自動的に値段がモニターに表示されるから店員は商品の値段を覚える必要はない。しかし、停電すればレジスターが使えないので商品の値段が分からなくなる。商品に値段が表示されていれればいいのだが最近ほとんどの商品に値段が記入されていない。

商品に値段を記入するのは小売業者の自由競争を妨げて独占禁止法に違反するといっているので生産工場に印刷記入することが禁じられているそうだ。それは国が決めたことだから商品に値段を表示していないことに文句をつけても仕方がないことである。それに停電しなければバーコードをスキヤナーでなぞらえるとピッピッとレジスターのモニターに値段が表示されるからなんの支障もない。しかし、停電した時はもう大変だ。商品のバーコードをスキヤナーでなぞらえれば商品の値段が自動的にレジスターのモニターに表示されるシステムにとっぴり馴れてしまっているから、コンビニの店員は商品の値段なんてひとつも覚えていない。だから停電した時のコンビニの店員は大変だ。停電した時のコンビニのパートは戦場のように忙しく地獄のように悲惨である。

客が買おうとしてレジカウンターにお菓子を置いたとしよう。お菓子の値段を知らないパートは急いでお菓子の置かれていた陳列棚を探す。そして、お菓子を陳列してある場所にあるプライスカードを見てお菓子の値段を覚えてレジカウンターに戻る。ノートにお菓子と書いて値段を記入。それからお客さんからお金をもらい、電子計算機を使ってつり銭を計算するというわけだ。レジカウンターに五つの商品が並べられたとしよう。パートは陳列棚で五つの商品を探

し五つの商品の値段を調べて五つの商品の値段をノートに書き、小さい電子計算機で五つの商品の合計を出し、それをノートに記入し、お客からお金を預かって、再び小さな電子計算機で計算をしてつり銭の金額を出し、それからお客につり銭をお返しする。

ノートには商品の値段だけ記入するわけではない。コンビニの商品はソフトドリンク、ファーストフード、日配、お菓子、食品、バラエティー、タバコ、酒類等に部門分けされているから商品の種類も記入しなければならない。

停電した時のコンビニエンスは停電していない時の数倍どころではなく五、六倍以上も難儀である。だから、停電になった時の難儀を少しでも軽くするために商品のひとつひとつに値段を記したラベルをラベラーで貼りつけなければならぬ。種類の多いコンビニエンスの商品にラベルを張るのは大変な作業である。

啓太は早朝からコンビニエンスに出勤して、表の立て看板やのぼりやゴミ箱を店内の倉庫に片付けて台風対策を終えて、商品にラベラーで商品の値段を記したラベル貼りをやっていた。パートにもラベル貼りをさせて停電するまでにはほとんどの商品にラベルを貼りたいのだが、午前零時から八時までは一人の深夜勤パートだけで店を見ているので深夜パートは深夜に配達されたお菓子やソフトドリンクやファーストフードなどの陳列とお客の相手でラベル貼りを手伝う余裕はなかった。八時からは二人体制になるので、パートにもラベル貼りを手伝わせたのだが、朝は客が集中して忙しいのでラベル貼りまでは手が回らない。啓太もファーストフード、お菓子、ソフトドリンク等の発注の仕事があるのでラベル貼りを中断しなければならなかった。店長の啓太も二人のパートもあれやこれやで商品へのラベル貼りに集中することはできなかった。普通の日なら午前八時半を過ぎるとお客のピークが終わるのだが、台風上陸のお陰で八時半を過ぎてもまだ買い物客が多く二人のパートはお客の対応に追われたので啓太一人だけしかラベル貼りはできなかった。

「台風が来てもすぐに停電するというのはいないからあせる必要はな

いな。もしかしたら停電はしないかもしれないしな。」
と停電しないのを期待しながら啓太はラベル貼りの作業を続けた。

啓太がラベル貼りに勤しんでいる午前九時前に啓太の監視役である父親の啓四郎から電話がかかってきた。

「もしもし、啓四郎だ。啓太か。」

「うん、啓太だ。」

「啓太、ドライアイスは準備をしたか。」

「え、ドライアイス。まだだけど。」

「おいおい、店長たるもの暴風対策を怠るものではないよ。」

「暴風対策はちゃんとやっているよ。外にある看板やのぼりは全部片付けたし、今は停電になった時の対策として商品に値段のラベル貼りをしている。ドライアイスを準備する必要があるのか親父。」

「おいおい、そんなことも知らないのか。停電した時にはアイスクリームや氷は溶けてしまうだろう。解けてしまったアイスクリームや氷は商品にならない。全て廃棄処理しなくてはならない。店にとつては大損害だぞ。だから氷やアイスクリームが溶けないようにドライアイスを準備するのは当然だろう。」

「ああ、そうか。」

「店長さんよ、しっかりしてくれよ。」

ドライアイスというのは聞いたことはあるが見たこともない。どこでドライアイスを売っているのか啓太は知らなかった。

「ドライアイスはどこで売っているのか。」

「ドライアイスを売っている所を知らないのか。」

「知らない。」

「やれやれ。」

啓四郎は啓太の無知ぶりに呆れた。

コンビニが停電した時は冷蔵庫と冷凍庫の冷却機がストップし、ソフトドリンクやアイスクリームや冷凍食品や氷を冷やすことがで

きなくなる。ソフトドリンクは冷えなくても商品として売れるがアイスクリームや冷凍食品や氷は溶けてしまうと商品価値がなくなつて売れなくなつてしまう。売れなくなつた商品は廃棄するしかない。廃棄は店の損失である。つまりは店長である啓太の損になる。損失は少なくしなければいけない。だから、アイスクリームや冷凍食品や氷が溶けるのを防ぐためにドライアイスで冷凍庫に入れるのだ。

啓四郎はコンビニエンスの店長でありながらドライアイスを買っている場所も知らない啓太に呆れたが、早くドライアイスを買って来るようにとドライアイスを買っている会社を教えた。

「ドライアイスを買っている会社はカリナーシティーの東側にある。」

「カリナーシティーか。でも、今日は台風だよ。会社は休みじゃないのか。」

「休みじゃない。台風の時にはドライアイスは飛ぶように売れるから会社は二十四時間開いている。」

「そうなんだ。」

啓太は父親の啓四郎に注意されてドライアイスを買うに行くことになつた。

啓四郎が言うにはドライアイスはカリナーシティーの東はずれにあるカモス工業株式会社で売っているという。早く行かないと他のコンビニやスーパーの連中に買われてしまつて在庫が無くなつてしまつと啓四郎は啓太を急き立てた。

啓太は啓四郎との電話が終わると直ぐにドラストアイスを買いに行くことにした。

「美紀さん。僕はこれからドライアイスを買に行くから店をお願いします。」

「え、店長は外に出るのですか。台風はこれからひどくなりますよね。店長がいないと心細いです。」

パートの美紀と澄江は店長の啓太がコンビニエンスを留守にするというので不安になった。

「カリナーシティーに行ってくるだけだから一時間以内には帰るよる」

「一時間で帰って来るんですね。」

「ああ。後は頼む。」

「急いで帰って来てね、店長。」

不安そうに美紀は言った。

「気をつけてね、店長。」

「うん。それじゃ、行ってくる。」

啓太は心細い顔をしている美紀と澄江を残して、裏口から外に出た。

十二

啓太はコンビニエンスを出ると駐車場に行き、車体が赤い愛用のRX 7に乗った。暴走族時代に乗り回したRX 7であるが父親からは廃車にしろと言われている。乗りなれた車であり愛着があるがもうかなり古い車であり燃費は高いから啓太は今度の車検が切れた時には廃車にしようと考えている。

啓太の運転する赤いRX 7は駐車場を出て、カリナーシティーのカモス株式会社に向かった。

啓太はグシチャーシティーのメイン通りに出た。車を強い風雨が襲ってきた。どうやら本格的な暴風雨になったようだ。激しい暴風雨のせいで道路を走る車は激減していた。商店が並んでいるメイン通りは強い風が四方八方に舞い、雨は激しく右往左往して路上にぶつかっている。路上に激しくぶつかる雨がいくつもの白いしぶきの集団となって路上を右左に走り回る。まるで無数の白い小さな妖精たちが追いかけてくちをしているようだ。

啓太は車を走らせながらまだシャッターを下ろしていない商店の中を見た。店の中に白い蛍光灯の光が見えた。通り一帯はまだ停電に

なっている地域はないようだ。

啓太の赤い車はティーラガーの長い坂を上ると緩やかな坂を下ってキャンへ出た。啓太の車はキャンからタカエスに入った。道路沿いのスーパーマーケットの駐車場には多くの車が駐車していた。台風慣れっここであるウチナー島の人々は暴風雨が本格的になってからスーパーマーケットに掛けこむのんびり屋な人が多い。そんな人々がスーパーに押しかけているのだろう。

「僕のコンビニもまだ客が多いだろうか。こりゃあ売り上げアップだ。」

啓太は心を浮き浮きさせていた。停電になったら大変だが、台風の時売り上げが倍増する。台風様々だ。啓太は後で売り上げを見るのが楽しみになった。早くドライアイスを買ってコンビニに戻ろう。

啓太の車はアカミチーからチバナ十字路を過ぎてイケントーにきた。イケントーに入ると道路の左側は金網が続く。金網の中は広い芝生に囲まれた一戸建て住宅が点在している。カーリーナエアベースの東側はカーリーナエアベース所属のアメリカ軍家族の住宅地になっている。啓太の車は東南アジア最大のアメリカ空軍基地であるカーリーナエアベース沿いの県道七十四号線に出た。カーリーナエアベースの金網沿いの県道七十四号線を数キロ西へ進めばカモス株式会社のあるカリナーシティーに入る。

ますます雨と風は激しくなってきた。水はけの悪い道路は冠水で水溜りができている。今は通行に支障はないがやがて水深が深くなり車のエンジン部分まで浸水してしまう水溜りが増えていくだろう。もしかすると同じ道路を帰ることができないかも知れないと啓太は心配した。急いでドライアイスを買わなくては。しかし、激しい雨がフロントガラスに当たり視界が悪いのでスピードを出すわけにはいかなかった。

カーリーナエアベース第三ゲートの十字路に啓太の車が差し掛かった時、突然豪雨の中を超大型のトレーラーが第三ゲートの方から飛

び出してきた。信号は啓太の方が青色だったのに傍若無人にも大型トレーラーは獰猛なマンモスが暴れ出す勢いで赤信号を無視して飛び出してきた。十字路に近づいていた啓太は思わずブレーキを踏んだ。啓太の車は停車線を飛び出してあやうく大型トレーラーに衝突しそうになったが、怪物のような大型トレーラーは啓太の車を無視して我が者顔で啓太の前を横切って行った。

信号を無視して傍若無人に十字路に飛び出してきたアメリカ軍の大型トレーラーの凶々しい態度に啓太は頭にきたが、大型トレーラーに怒っても仕様がなない。アメリカ軍も台風対策に大わらわのようだと思いつながら啓太は大型トレーラーが過ぎ去るのを待った。

大型トレーラーが過ぎ去ると大型トレーラーのことは直ぐに啓太の頭から消えた。啓太は暴風雨の中、コンビニが停電した時の必需品であるドライアイスを急いで買わなければならない。大型トレーラーが通り過ぎると啓太はカリナーシティーに車を走らせた。

カリナーエアベースの第三ゲートを過ぎると左側は金網の向こうに長さが四キロの滑走路が二つ並んでいるカリナーエアベースの広大な飛行場が見え、右側には緑に覆われた広大な森林地帯が見えた。カリナー弾薬庫である。

カリナーエアベース第三ゲートからカリナーシティーまでの道路は風を遮る木や建物がないので風雨はさらに強くなった。行き交う車はほとんどない。

カリナーシティーに入るとすぐに信号があり、道路の右側に白い四階建ての新しい建物が見えた。白い建物の手前の三叉路を右折して、白い建物を横切ると前方にカモス工業株式会社が見えた。サイロのような高い塔が目印になっているので啓太は難なくカモス工業株式会社を見つけることができた。啓太の車はゆっくりとカモス工業株式会社の門に近づいた。門の鉄扉は半開きしていて車一台が通り抜けるようになっていた。啓太の車はゆっくりと門をくぐってカモス工業株式会社に入った。

サイロのような高い建物はドライアイス製造工場のようにでシャッタ

「が開いている一階には機械がぎっしりと並んでいた。会社の広場には自家用車は一台も見当たらなかった。工場には誰も居ないようだ。台風のせいで工場は休みなのだろう。啓太はカモス工業株式会社に入ると車を止め工場の広場を見回して明かりの付いている建物を探した。しかし、明かりが漏れている建物はなかった。啓太はゆつくりと広場を車で移動しながら広場に沿っている建物を見たが人の居る気配はなかった。

広場を一回りして入り口近くに戻ると入り口の右側に「ドライアイスはこちらへどうぞ」と書かれた小さな看板があるのを見つけた。啓太は車を下りて背を屈めて看板の奥の建物に行った。建物はガラスドアがありガラスドアの中は暗かった。啓太はガラスドアを開けようとした。しかし、ドアはカギが掛けられていて開かなかった。

ガラス越しに建物の中を覗いて見ると、入り口の左側にカウンターがあり、カウンターの奥には十台の事務机が並んでいる。どうやらカモス工業株式会社の事務所のようだ。事務所は明かりが消え薄暗く人影らしきものは見当たらなかった。カモス工業株式会社は台風接近のために工場だけではなく販売店も休みなのかも知れないと啓太は不安になった。しかし、親父はカモス工業株式会社は台風の時は二十四時間営業をしていると言っていた。もしかすると事務所のどこかに会社の人間が居るかもしれない。

「もしもし。誰か居ませんか。」

啓太は大声を出しながらドアを叩いた。しかし、事務所の中から人が出てくる様子はなかった。啓太はカモス工業株式会社は台風の時は二十四時間営業をしているという啓四郎の言葉を信じて何度もドアを叩いた。叩いていると、事務所の奥から白髪で頭の半分は禿げている守衛らしき男がのそつと出てきた。事務所の奥から出て来たのは守衛らしき男だけで販売員らしき人は出て来なかった。守衛がドライアイスを販売するのだろうか。守衛がレジを操作してドライアイスを販売するとは思えない。カモス工業株式会社は台風の時もドライアイス販売をやっていると親父は言ったが、親父の言ったこ

とは間違っているかも知れないと啓太は不安になった。胡散臭そうに守衛らしき男がドアを開けた。

「ドライアイスを買いたいのですが。」

と啓太は言った。守衛らしき男は啓太をじろつと見てからついて来いという仕草をして事務所の奥の方に歩いた。啓太はドライアイスを買うるかどうか不安になりながら守衛らしき男の後をついて行った。事務所の奥にドアがあり、ドアを開けると小さな部屋にコンビ二エンスにもあるような平置きのアイスクリューボックスと同じ大きさの冷凍庫が置かれていた。守衛らしき男が面倒臭そうに冷凍庫の蓋を開くと中には茶色の紙に包まれたドライアイスが半分ほど詰められていた。

「何個欲しいのだ。」

守衛らしき男は面倒臭そうに言った。何個欲しいのだと聞かれても啓太はすぐに答えることができなかった。なにしろドライアイスを買うのは生まれて始めてのことだ。必要な量がどれくらいであるのか啓太は見当をつけることができなかった。啓太が答えるのに戸惑っている。

「これが一キロのドライ、これが二キロのドライだ。」

と言いながら大小のドライアイスを見せた。啓太は厚めの紙に包まれた一キロのドライアイスと二キロのドライアイスを持ち比べたがどのドライアイスがいいのかわからなかった。

「僕はコンビ二の店長をしています。停電した時にアイスクリームや冷凍庫、それに牛乳などを並べているオープンケースに入れるドライアイスが必要なんです。」

と啓太は言った。啓太はどれだけのドライアイスを買えばいいのか男のアドバイスを聞いたかったが、男は、

「あ、そう。」

と啓太の話を軽く流して、

「何個買うのだ。」

と啓太に言った。どうやら、男は啓太にアドバイスをする気は全然

ないようだ。啓太は男からアドバイスを受けるのは諦めて自分で氷や冷凍食品の入っている冷凍庫やアイスクリームの入った冷凍庫や日配コーナーに必要なドライアイスの数を予想した。啓太は二キロのドライアイスを十個買うことにした。

「それじゃあ、二キロのドライアイスを十個下さい。」

と啓太が言うと、男は大きなビニール袋にドライアイスを五個ずつ入れて両手で持つと啓太に何も言わずに事務所の方に歩いて行った。男はカウンターに入ると不器用に人差し指だけでレジのキーを打った。レジの画面を凝視してから、

「六千三百円。」

とぼそつと言った。

「え、六千三百円。」

啓太はドライアイスの値段の高さに驚いた。

「そう、六千三百円。」

男はモニターを見ながら念を押すように言った。十個で六千三百円ということは一個六百三十円である。二酸化炭素を圧縮して作った小さな塊が六百三十円もするのだ。ドライアイスは啓太が予想していた値段よりはるかに高かった。利益三十円のアイスクーキ二百十個を売り上げた利益がドライアイスの購入費になるのだ。すごく高いと啓太は感じた。しかし、氷やアイスクリームが溶けて廃棄処分するよりはいいかもしれない。啓太は一万円札を出した。男は再び人差し指だけでモニターとキーボードを交互に見ながら打った。

「おつりは三千七百円か。」

と男は呟いて三千七百円を取り出しと、男は、

「はい。」

と言っておつりとレシートを啓太に差し出した。男が差し出したおつりとレシートを受け取り、両手にドライアイスの入ったビニール袋を持つと、啓太は事務所を出た。

：啓太がミサイル窃盗団と危ない状態に

啓太はカモス工業株式会社を出て、県道七十四号線に入るとチバナ十字路に向かつて車を走らせた。カリナーシティーを出ると道路沿いに並んでいる高さ七、八メートルもあるもくもすが小さな枝を道路に撒き散らしていた。

もくもすはウチナー島の在来種の木ではない。もくもすは太平洋戦争が終わった後にウチナーに植えられた木である。一九四五年の激しい地上戦で焼け野原になったウチナー島に早く緑を増やそうと考えて、成長の早いもくもすの木をいたる所に植えたのだ。

もくもすは松より数倍も成長が早く、ウチナー島の至る所がもくもすの木で覆われた。しかし、もくもすは成長は早いが枝や幹は脆くて、風が少しでも激しいと枝はあっさりとは折れて道路に落ちて障害物になってしまう。激しい暴風雨の時には太い幹が折れて道路を塞ぎ、車の通行の邪魔をする時もある。県道七十四号線沿いのもくもすはやがて幹や枝が折れて道路を塞いでしまうだろう。

雨がますます激しくなってきた。啓太はスピードを落として進まざるを得なかった。

激しい雨の中、カリナーエアベースの第三ゲートを過ぎ、なだらかな坂を下っていると、前方に一台の乗用車が水溜りで立ち往生しているのが見えた。冠水が長さ五十メートル程道路を覆っている。

啓太は車を止め、立ち往生している乗用車の様子を見た。水面が車体まで届いている。乗用車が立ち往生している場所が一番深い場所なのか、それとももっと深い場所が手前にあるのか。冠水が泥水で水溜りの底が見えないのでどこが一番深い場所なのか見当がつかない。

「ここを通るのは危険だ。ここを通るのは止そう。」
と思った啓太は別の道路からコンビニエンスに帰ることを決め、車

をUターンした。

啓太がコンビニエンスの店長という責任ある仕事をしていなかったなら啓太は運を天に任せて冠水した場所を通つただろう。しかし、今の啓太にはコンビニエンスの店長としての責任がある。万が一、車が止まってしまったらコンビニエンスに行けなくなる。すると、コンビニエンスでパートをしている澄江さんと美紀さんに迷惑を掛ける。ドライアイスも駄目にしてしまう。親父にもこっぴどく叱られるだろう。この道路を通らないということは遠回りをするようになるが店長としての自覚が芽生えてきた啓太は安全な道路を通ることを選んだ。

啓太は車をUターンしてカーリーナエアベースの第三ゲートに引き返した。カーリーナエアベース第三ゲートの十字路を右に曲がり、啓太の車と衝突しそうになったカーリーナエアベース第三ゲートから出てきた大型トレーラーが入っていった間道に啓太の車は入って行った。この間道を数キロ進むと国道三百二十九号線に出る。国道三百二十九号線を右折すればチバナ十字路に戻る。チバナ十字路を左折すればクシチャーンティード。遠回りだがその方が安全だ。啓太の車は間道を進んだ。この間道はカーリーナエアベースとカーリーナ弾薬倉庫を繋ぐアメリカ軍の専用道路であったが、ここ一帯の軍用地は解放されて、民間人が自由に入れるようになり、最近は道路を一般車も通れるようになった。

啓太は間道に入っても安心はできなかった。県道七十四号線が冠水していたから、この間道も冠水している場所がある可能性はある。もし、車が通れないくらいに冠水している場所があれば、再びカーリーナエアベース第三ゲートの十字路に引き返して別の道路を行かなければならない。啓太は間道が冠水していないことを祈りながら車を進めた。

間道を進むと道路が二つに分かれている場所に来た。道路を左に曲がればはカーリーナ弾薬庫地帯のある金網に囲まれた森林地帯に向か

う。右曲がれば三百二十九号線に出る。啓太は右の道路に車を進めた。間道の木々は強風に激しく揺れている。啓太の車は急なカーブを曲がりなだらかな坂を下り始めた。坂を下り終えた場所が冠水していないことを祈りながら啓太は坂を下った。坂を下った場所はやはり冠水をしていた。しかし、立ち往生している車はなかった。冠水した水溜りの底は浅いだろう。啓太はゆっくりと水溜りに車を入れて進んだ。幸いにも水溜りの底は浅かった。啓太の車はエンジントラブルを起こさないうで冠水から出た。啓太は冠水を抜けるとスピードを上げた。

だが、啓太の車の行く手を阻む存在が目に入って来た。それは倒れて道路を塞いでいる木でもなければ冠水した水溜りでもなかった。前方の道路にとんでもない障害物が横たわっていた。二台の車が間道の左側に停車していて、停車している二台の車の前には大型トレーラーが二車線の道路を封鎖するように横断して止まっていた。その大型トレーラーは啓太がカーリーナエアベース第三ゲートの十字路を通り過ぎようとしていた時に傍若無人に啓太の前を横切って行ったあの大型トレーラーだった。啓太の行く手を塞いでいる予想外の障害物に啓太は愕然とした。

この間道を通り抜けることができないということになると、カーリーナエアベース第三ゲートに引き返し、十字路を右折してカーリーナシャーシティに戻り、ウチナー島の西側を縦断する国道五十八号線に出て、国道五十八号線を南に下り、国道五十八号線から国体道路を通ってコザシャーシティに入り、コザシャーシティから啓太のコンビニがあるグシチャーシティに行かなければならないのだ。とどの詰まりは広大なカーリーナエアベースをぐるっとひと回りすることになるのだ。国道五十八号線を北の方に進み、ヨミタンヴィレッジを通ってオンナヴィレッジに入りオンナヴィレッジからイシチャーシティを通ってクシチャーシティに行く方法もあるが、それはカーリーナエアベースの数倍の広さがあるカーリーナ弾薬庫をぐるっと一回りすることになるからいっそう遠回りになる。カーリーナ弾薬庫よりカ

リナーシティーを回った方が走る距離は短い、激しい風雨の中を
カリナエアースをひと回りするのは大変である。それに遠回
りの道路に冠水した場所があればなおさら遠回りをしなければなら
ない。

啓太はカリナエアース第三ゲート十字路に戻りたくなかった。
できるならこの間道を通り抜けたかった。啓太は道路を横断してい
るトレーラーの側を通り抜けることができるような隙間がないかと
思いトレーラーの前後を見た。左側はトレーラーの後部タイヤが路
肩に接触していて荷台が歩道まで飛び出していた。道路の左側は車
が通る隙間がありそうにない。次に啓太は右側の運転席の方を見た。
トレーラーの前部は路肩から少し離れていた。歩道に車体の半分を
乗り上げれば車がぎりぎりに通れそうだ。

啓太は車から下りた。風は強いが雨は小降りになっていた。トレ
ーラーを見るとトレーラーの荷台を覆っているカーキー色のカバー
がめくられて強風にはたばた揺れていた。アメリカ兵と数人の男たち
が必死にカバーを掛けようとしていたが暴風雨と一緒に踊り狂って
いるカバーを押さえるのに大苦戦していた。トレーラーの荷は十メ
ートル近くもあるミサイルだった。五基のミサイルが台形型に三基
二基と積まれている。

ミサイルの起爆装置は抜いてあり爆発することはないと思うが、暴
風の煽りを食ってミサイルがトレーラーから落下しようものなら大
変なことになるだろう。ウチナー島のマスコミは騒ぎ、社会問題に
なることは間違いない。いや、ミサイルを積んでいるトレーラーが
道路を封鎖している現状だけでもマスコミが知れば大きく報道する
だろう。いやいや、暴風雨の最中にミサイルを運んだという事実が
知られただけでも、アメリカ軍非難の記事が新聞の一面にでかどか
と載るのは間違いない。白昼の暴風雨の中をミサイルを積んだトレ
ーラーが一般道路を走ると大きな問題になるのはアメリカ軍だって
知っているはずだ。アメリカ軍も無謀なことをやるものだと啓太は
呆れた。

めくれたカバーを直そうとアメリカ兵を手伝っている日本人が居るが、啓太は手伝う気にはならなかった。啓太は一分一秒でも早くコンビニエンスに戻らなければならぬ。啓太はトラクターの前の方から通り抜ける隙間を見つけようとトレーラーに近づいた。

啓太はトレーラーの運転席から路肩がどのくらい離れているかを調べ、啓太の車が通れるか通れないかを知るために歩道とトレーラーの間の幅を目測した。車を歩道に乗り上げれば啓太の車はなんとか通り抜けることができそうだ。ほっとした啓太はトレーラーが車道を横断している原因を知るためにトレーラーの運転席の前を横切った。啓太が予想した通り交通事故が原因のようだ。左側の歩道に乗り上げた車が見えた。車の側には四、五人の男達が立っていて彼らの足元には二人の人間が横たわっているのが雨ではつきりとはしなが見えた。あの自家用車と事故を起こしてトレーラーは道路を横切ったのだらうと啓太は思いながら事故車の所に行こうとした。しかし、トレーラーの前から出ようとした瞬間に啓太の前に男が立ちはだかった。梅沢である。梅沢は手で啓太の胸を押して啓太を後退させた。啓太の視角から事故車は消えた。

「事故ですか。」
と聞いた。

「ああ、事故だ。しかし、大した事故じゃない。」
「本当ですか。」

と言いながら前に出ようとしたが梅沢が立ちはだかって啓太が前に出るのを阻んだ。

「ああ、大した事故じゃない。」
梅沢の声には威圧感があった。啓太は事故車の所に行きたかったが、啓太の前に立っている梅沢がそれを許さなかった。

「運転手は大丈夫ですか。」
「ああ、大丈夫だ。」

「警察には連絡しましたか。」

「したした。パトカーがもう少しで来る。」

倒れている人間が見えたような気がしたが、あの人間は本当に大丈夫だろうか。啓太は車の側に行つて事故の様子を直接見たかった。

しかし、啓太が正面の男を避けるように右に移動すると男も右に移動して啓太の邪魔をした。どうやら啓太には見られたくない理由があるようだ。男の態度は気に入らないが啓太もどうしても事故現場を見たいという気はなかったので、男を撥ね退けて強引に事故車の方に行く気はなかった。それよりも啓太は急いでクシチャーシテイーのコンビニエンスにドライアイスを運んで行かなくてはならない。啓太は梅沢に、

「急いでクシチャーシテイーに行かなくてはならないんです。この位の隙間ならなんとか通れそうだから通つていいですか。」

「駄目だ。別の道を行け。」
と啓太を突っぱねた。

ここは公道であり、トレーラーの前を通るのに本当は梅沢の許可は必要がない。勝手に通つていいのだ。啓太が、「通つていいですか。」と言つたのは、「通りますよ。」のことわりの意であり梅沢に許可を求める言葉ではなかったし、啓太は梅沢が承諾するのは当然と思つていた。ところが梅沢は突っぱねた。啓太は梅沢が突っぱねるのは予想していなかったので戸惑つた。

「どうしてですか。このスペースなら僕の車ならぎりぎり通り抜けることができます。ここを通つていいですよね。」

「駄目だ駄目だ。引き返せ。」
梅沢は啓太の要求を頑と受け入れなかった。

この道路は公道なのだから梅沢がことわることはできるはずがない。それなのに梅沢はまるで自分の私有道路でもあるように啓太の車が通るのを拒否した。

「それはおかしいですよ。ここから僕の車は通れるのだから通つた

つていいじゃないですか。」

「駄目だ駄目だ。引き返せ。」

梅沢の一方的な態度に啓太は怒った。啓太は短気で喧嘩早い元暴走族の若者である。

「冗談じゃない。ここは天下の公道だろう。あんたたちは事故だかなんだか起こしたかも知れないが、僕には関係ない。あんたたちが事故を起こさなければなんの支障もなくこの道路を通れたのだ。この隙間から僕の車は通れるのだからここを通ったって文句を言われる筋合いはないよ。」

と啓太は啖呵を切ったが梅沢は、

「駄目なものは駄目だ。とにかくここは通れない。他の道路から行け。」

と、啓太の啖呵を軽くはねつけた。

梅沢と啓太が言い争いしているのを見ていたハッサンが啓太達の所に走って来た。梅津は立つたまま啓太を凝視している。

「どうしたのですか梅沢さん。」

「この若造がここを通りたいと言って聞かない。」

啓太の前に立ったハッサンは啓太を睨んだ。ハッサンの睨みは凄みがあり啓太はひるんでしまった。

啓太はコンビニエンスの制服を着用し、店長・山城というネームプレートを胸に付けていた。ハッサンは小声で始末しましょうかと言ったが梅沢は迷った。防衛庁の人間二人を殺したが、啓太と防衛庁の人間と同様に扱うわけにはいかない。コンビニエンスの制服を着用して胸のネームプレートには店長・山城と書いてあり、目の前の男は防衛庁や警察とは関係のない一般の人間である。一般の人間を無闇に殺すわけにはいかない。できるなら無益な殺生はやりたくないと思っていた。

「ドライアイスを早く店に届けたいから通してくれ。」
と啓太は言った。

この若造がトレーラーの横を通り抜けると事故車の近くを通るから斎藤と鈴木之死体を見てしまう。そして、車に空いている無数の穴も目にするだろう。その穴が銃弾による穴であると気づけば、二つの死体は交通事故ではなく、拳銃で撃たれて死んだと知ってしまう。そして、ここで起こったのは交通事故ではなく殺人事件であると若造は知ってしまう。そうなれば殺人を知ってしまった若造を始末するしかない。

梅沢は、できるなら穏便に済ませたいと考えているが、もし、この若造がここを通り抜けることにこだわり続けるなら仕方がない、この若造の始末をハッサンに任せよう。梅沢はそう決めた。ここでもまごしている時間の余裕はない。

「駄目だ。別の道路を行け。」

「イケントウの道路は冠水していて車が通れない。ここを通るしかないんだ。」

梅沢は啓太を睨んだ。・・・殺すしかないか。・・・

啓太は梅沢と話しながら、梅沢とハッサンに異様な恐さを感じた。啓太は暴走族に入っていた。喧嘩も随分やった。しかし、この男達は暴走族やチンピラとは全然違う。背筋がぞくつとってしまうような恐さがある。この男達は啓太とは別の世界、それも恐い世界を生きているような冷たい不気味さがあつた。インド人は興奮していまにも殴りかろうとする勢いである。・・・やばい連中だ・・・啓太はそう直感した。暴風雨の中の間道には彼ら以外は誰もいない。ここにいたらやばいことになるかも知れない。そうそうに逃げた方がいい。元暴走族で喧嘩の修羅場を体験してきた啓太の直感がそう判断した。

「分かった。お前がそう言うなら仕方がない。別の道を行くよ。」と啓太はそう言うのと体をくるりと半回転して急ぎ足で車に戻った。得体の知れない連中に、振り返りざまに「本当に警察に連絡をした

だろうな。」と捨てゼリフを吐きたかった。喉から出掛かっていたが捨てゼリフを言うのは止した。彼らを怒らして襲われてもしたら大変だ。君子危うきに近寄らずだ。

梅沢は啓太が車の方に戻ったので急いで事故現場の方に走って行った。

啓太の車がユーターンして第三ゲートの方に引き返していった時白い車が間道の左側の空地から出てきた。トレーラーの荷台の上から啓太の車が去っていくのを見ていたロバートは空き地から白い車が出て来るのを見た。白い車は啓太の車の後を追うように去って行った。

梅沢は、

「大城。早く死体を片付けろ。」

と大城達に斎藤と鈴木の死体の処理を急がせた。その時、

「ヘーイ、ウメザーフ。」

とロバートが梅沢を呼んだ。ロバートを振り返るとロバートが手を振って梅沢に来るように合図をしていた。梅沢は悪い予感がした。

「くそ。」

と言つて、梅沢はトレーラーの所に走った。

「なんだロバート。」

「空き地から車が出てきて、さっきの赤い車の後を追って行ったよ。」

「なに。本当か。」

梅沢はロバートの話に愕然とした。

「本当に白い車が赤い車を追って行ったのか。」

「ああ、そうだ。」

赤い車を追って行ったのは恐らく防衛庁の連中の車だろう。防衛庁が組織ぐるみで梅沢達を尾行していると知った梅沢は強い危機感に襲われた。

「くそ、一難去つてまた一難か。」

梅沢には腹を立てる余裕も嘆いて頭を押さえる時間も許されていない。梅沢は降りかかる難を取り除く方法を直ぐに打たなければならぬ。例え相手が防衛庁の人間でもひるんではならない。なにしろ一生に一度あるかないかの大きな仕事だ。成功すれば莫大なお金を手にすることができるのだ。

梅沢は大城達がいる場所に戻った。

「大城。俺は梅津、ハッサン、シン、ガウリンを連れてロバートが見たという車を追いかける。死体を草むらに隠したら全員でトレーラーのカバーを被せる作業をやれ。事故った車はそのままにしろ。とにかく急いでやるんだ。トレーラーのカバーを直したら直ぐ出発してくれ。大城。お前が指示をしてくれ。」

「分かった。」

梅沢は、

「梅津、ハッサン、シン、ガウリンは私について来い。」

と言って四人を連れてトレーラーの後ろに止めてある車に戻った。

「梅津とハッサンは私の車に乗れ。ガウリンとシンは木村の車に乗れ、車のキーはついているからガウリンが運転しろ。」

梅沢達は二台の車に乗り、白い車を追ってカリーナエアース第三ゲートの方に向かった。

十一

啓太はカリーナエアース第三ゲートを右に曲がりカリナーシティーに向かった。雨は鋭い勢いで横に走っている。もう風速は三十メートルを軽く超えているだろう。車は時々襲ってくる突風にビュビュッと揺らされる。風速四十メートルの暴風雨になる前にコンビニに着きたいものだ。

啓太は携帯電話を取り、警察に電話した。

「もしもし、警察ですか。」

「はい、警察です。」

「もしもし、カリーナエアース第三ゲートから三百二十九号線に出る間道がありますよね。いえいえ、チバナ十字路に行く道路じやなくて、カリナーシティーから来るなら左折するしコザシティーから来ると右折して入る間道です。カリーナエアース第三ゲートの十字路から入る間道です。」

電話の警官は感が鈍く、啓太の説明をなかなか理解できなかった。何度も繰り返し説明してやっと警官は間道の存在を理解した。

「間道でミサイルを積んだ大型トレーラーと普通乗用車が事故つたようなんだ。その事故のせいでミサイルを積んだトレーラーが道路を塞いでしまい車が通れなくなっているんだ。早くパトカーを行かして調べた方がいいですよ。もしかすると大事故で、死人が出ているかもな。」

啓太は間道を通れなかった腹いせに事故を大げさに警察に話した。ところが、警官は啓太の話を利用しなかった。警官が啓太の話を利用しないのは無理もない。暴風雨の最中にミサイルを積んだトレーラーが民間道路を通るなんてあり得ないことである。

啓太の話を信用しない警官を納得させるためにはもつと詳しく説明しなければならなかった。啓太は詳しく話すために第三ゲートから数百メートル過ぎた個所に休憩所として利用している旧道に入って車を停めた。その道路は直線の新道路を造つたために取り残された二百メートルくらいの旧七十四号線の道路だ。車道として使わなくなった道路はドライバーの休憩場所として利用されている。

旧七十四号線に車を停めた啓太はミサイルを積んだ大型トレーラーがカリーナエアース第三ゲートから出てきたのを見たことや大型トレーラーにはミサイルが五基積み重ねていたことを詳しく話し、事故の様子のこと順序よく話した。しかし、警官は啓太の話が荒唐無稽なので次第に啓太が嘘を話していると思うようになった。

「信用しないのは無理ないけどね。本当なんだよ。ミサイルを積んだトレーラーと普通乗用車が事故つたんだよ。とにかく一分でも早

くパトカーを手配した方がいいよ。え、なぜミサイルを積んだトレーラーが民間道路を走っていたかって、そんなこと僕が分かる筈ないじゃないか。そんなのはアメリカ軍に聞けばいいじゃないか。」話を信用しない警官に啓太はいらいらしてきた。警官の方も啓太の乱暴な言い方に怒ったようだ。

「改めて聞くが君の名前は。」

「名前か。山城啓太。山城啓太だよ。さっき言っただろ。」

「本名だろうね。」

「本名だよ。」

警官は事故の様子は聞かず、啓太の名前、年齢、住所、職業を詳しく聞いてきた。いらいらしながら、啓太は警官の質問に全てを正直に答えた。

「君の名前、住所、年齢、職業は間違いないだろうね。嘘ついていたら直ぐばれるよ。」

警官の疑り深さに気の短い啓太はカーッと頭に血が上った。

「うるせえなあ。間違いないよ。パトカー一台を事故現場に回せば済むことじゃあないか。なにをだらだらつまらないことを聞くんだよ。さつさとパトカーを回せよ。」

啓太の乱暴な言葉に警官は怒った。

「警察に乱暴な口をきくとは。君はまともな人間ではないな。警察をからかうとただでは済まないぞ。わかっているかな。」

「交通事故のことをせっかく教えてあげているのに、お前の態度はなんなんだよ。善良な市民を守るのが警察だろ。交通事故が起これたら調べるのが警察だろ。さつさと調べに行けばいいだろうが。」

「台風で忙しいというのに。警察をからかうのはいい加減にしろ。」

「からかってなんかいないよ。わからず屋のへぼ警官め。」

「なに。私を侮辱したな。」

「侮辱はしてねえよ。正直なことを言ったまでだよ。」

啓太と電話の警察官とは取り留めのない口論になり、とうとう警察

官は電話を切ってしまった。

話を信用しない警官に啓太は頭に來た。しかし、啓太は見てきた交通事故について警察に報告したので自分の責任はちゃんと果たしたので啓太の気持ちはすっきりした。後は警察の責任だ。警察が間道の事故現場に行く行かないは啓太には関係のないことだ。間道の大型トレーラーの回りに居た怪しい連中にも電話の相手をした警官にも腹が立ったが忘れることにしよう。早くドライアイスをコンビニに届けなくちゃ。

啓太が電話を切ってギアを一に入れた時、コツコツと車のウインドーを叩く音がした。驚いて振り向くとスーツを着た四十代の男がウインドー越しに啓太を覗いている。啓太はウインドーを半分開いた。

「済みません、ちょっと聞きたいことがあります。よろしいでしょうか。」

青木も天童も眠らされた。啓太の危険な逃走劇の始まり。

窓から顔を見せた男はウチナー訛りのない標準語を使った。どうやら男はウチナーの人間ではないようだ。丁寧な言葉使いだからヤバイ人間ではないだろうと啓太は直感した。ポマードの髪は強風に煽られ乱れている。啓太はウインドーを一杯に開いた。

「つかぬことをお聞きします。あなたは大型のトレーラーを見ましたよね。トレーラーの荷物を見ましたか。」

スーツにネクタイ。おまけに近眼メガネを掛けている典型的な日本男性で怪しい男には見えないが、ミサイルを積んだトレーラーについて質問するのは普通の人間ではないかも知れない。啓太はウインドーのハンドルに手を掛け、いつでもウインドーを閉める体勢を取りながら、男をジロジロと凝視した。

啓太が疑いの目で見、なにも言わないのでポマードの髪の男は内ポケットから身分証を出して見せた。

「怪しい者ではありません。私は防衛庁の人間です。国家公務員です。」

身分証の上に防衛庁と記され、ポマードの髪の男と似た短い髪の顔のカラー写真が写っていた。名前は青木義雄と書いてあった。啓太には防衛庁イコール自衛隊のイメージしかなかったから、私服で髪にはポマードをつけた男が防衛庁の人間を名乗るのに違和感があった。啓太はポマードの男が身分証を見せても彼が防衛庁の人間であることを疑い返事をしなかった。

「おい、お前も身分証を見せなさい。」

青木の後ろに立っている男は二十代で髪は短く、体の姿勢もよく、自衛隊服が似合いそうな体格をしていた。青木に言われて若い男は身分証を見せた。名前は天童宗孝であった。

「唐突な話ですみません。私達はあることについて捜査をしています。それであなたに二、三点お聞きしたいのです。手間は取らせ

ません。よろしいですか。」

青木の丁寧な話し方に啓太は青木への疑念は薄らいだ。啓太は頷いた。

「済みませんがあなたの車に入ってよろしいでしょうか。雨風が強いので。」

啓太は迷ったが防衛庁の人間がわざわざ話を聞きたいというのだからなにか重要なことを聞きたいのだろう。啓太は助手席と後部座席のロックを外した。青木が助手席に座り、天童は後部座席に座った。「お忙しい所を済みません。お聞きしたいのはあなたが見た大型トレーラーについてです。あなたはトレーラーの荷物をみましたか。」

「ああ、見たよ。」

「荷物の中身は何でしたか。」

「ミサイルだった。」

「え、ミサイル。」

ミサイルと聞いた瞬間に青木と天童は驚いて顔を見合わせた。

「隊長。」

天童は絶句した。

「ミサイルだったのか。信じられない。とんでもないことをする連中だ。奴らはミサイルを盗んでどうする積もりなんだ。」

と自問自答した青木は気を取りなおして啓太への質問を続けた。

「ミサイルはどのくらいの長さでしたか。」

「だいたい九メートルから十メートルくらいあったと思う。」

「そうですか。」

「ミサイルは何基積んでありましたか。」

「五基かな。」

「五基もですか。」

ポマードの男は愕然として言葉を失った。

「隊長。そのミサイルは核爆弾搭載可能のミサイルなのでしょうか。」

青木は唇に指を当てて、天童に黙るように合図した。天童はあわて

て口を覆った。

「やつらはなんてことをするんだ。」

と青木は怒りのこもった声で呟いた。

アメリカ軍のトレーラーにミサイルを五基積載していることがなぜポマードの男を愕然とさせたのか啓太にはその理由が全然わからなかった。そもそも防衛庁とアメリカ軍は味方であるはずだ。防衛庁の人間がなぜアメリカ軍のミサイルについて根掘り葉掘り啓太に質問をするのか、それが啓太には奇妙であった。二人の男は本当に防衛庁の人間なのかと啓太は怪しんだ。

「済みません。あなたはトレーラーの事故の原因を知っていますか。」

「ああ、どうも乗用車と衝突したようだよ。」

啓太は斎藤達の車とトレーラーが衝突した事故であると勘違いをしていた。

「トレーラーと事故を起こした乗用車の車種と車体の色は分かりませんか。」

「車種は知らない。色は白だった。」

「車のナンバーを覚えていますか。」

「車のナンバーか。」

啓太は車道に乗り上げて大破していた車を思い出したが、ナンバープレートを見た記憶はなかった。

「車のナンバーは知らない。」

「そうですか。自家用車の運転手の怪我の具合はどうでしたか。」

「それは知らない。車の近くまでは行かなかったから。しかし。」

「しかし、なんですか。」

「二人の人間が車の側に横たわっていた。」

啓太の話を聞いて青木と天童は顔を見合わせた。二人は言葉を失い呆然とした。

「本当に二人だったんですか。」

と青木は啓太に聞いた。

「雨も降っていたしちらつと見ただけだから一人だったか二人だったかはつきりはしない。でも、多分二人だったと思う。」

「そうですか。」

と青木は力なく言うと、天童は、

「隊長。最悪の事態を招いたようです。」

と沈痛な声で言った。

「済みませんが、二人で話がありますので。」

と言って青木は天童に外に出るように言い、青木と天童は車の外に出た。

「まさか、こんなことになるなんて。」

と青木はつぶやいた。

「私達がやつらを見くびっていたようだ。やつらがこのような強行手段に出てくるのは全然予想していなかった。」

「隊長。彼らはミサイルをどうするつもりでしょうか。ミサイルを海外に運び出すつもりでしょうか。しかし、簡単に運び出すことはできないと思います。」

「そうなんだよ。ミサイルを盗むなんてむちゃくちゃだ。今、考えられないことが起こっている。」

「自分はミサイルが盗まれたなんて信じられません。」

「ああ、私も信じられないよ。しかし、考えられないことが現実起こったのだ。上に連絡して急いでカーリーナエアベースの司令官に連絡するように言おう。」

青木と天童は深刻な顔で話し合った。

防衛庁の二人の様子は深刻であり、なにか凄いことになっているようだ。啓太とは別の世界の事である。啓太が気になるのはいつ停電するかも知れない自分のコンビニエンスのことだった。ここでまごまごしてはいられない。早くドライアイスを店に運ばなくては。

青木と天童が車の中に入って来た。青木は啓太に質問を続けた。

「あなたはあの現場でどんな人を見ましたか。詳しく教えて下さい。」

「

「日本人やアメリカ人やインド人などがいたな。」

「あなたは彼らと話をしましたか。」

「したよ。」

「どんな話をしたのですか。」

その時、車の後方を見張っていた天童が、

「隊長。」

と言って旧道の入り口の方を指差した。青木と啓太は天童が指さした旧道入り口の方を見た。二台の車がゆっくりと旧道に入ってくる。あの車はミサイルを積んだ大型トレーラーの後ろに停車していた二台の車に違いない。

十二

梅沢の車はカーリーナエアベース第三ゲートの十字路に出た。

「くそ、どうしても捕まえるんだ。逃がすものか。」

梅沢は苛々しながら言った。

「奴らの車は左に曲がったのですかね、それとも右に曲がったのですかね。」

梅津は梅沢に聞いた。

「あの若造は県道が冠水して通れなかったから間道に入ったと言っていた。つまり左折したら冠水している所があるということだ。奴らが右に曲がったのは確実だ。」

梅沢は十字路を右折するとスピードを上げた。苛々している梅沢は、

「くそくそ。今日は厄日だ。」と何度も呟いた。

旧道の側を通り過ぎた時に梅沢の携帯電話が鳴った。電話を掛けてきたのは梅沢の車の後ろを走っているガウリンからだった。

「ウメザワさん。ガウリンです。ウメザワさんが追っている車は今通り過ぎた所に停まっています。」

「え。」

道路沿いに一台の車も見えなかった。梅沢はガウリンの話したこと

が理解できなかった。

「どういことだ。」

「さっき過ぎた所には左に入る道路がありました。その道路の奥の方に車が二台停まっていた。ひとつは赤い車でした。」

「ああ、あの旧道のことか。」

あせっていた梅沢は旧道の方を見逃していた。

「戻るぞ。」

梅沢は車をユーターンさせた。旧道の側を通り過ぎる時に旧道に赤い車が見えた。

「若造の車だ。」

赤い車の後ろに白い車が見えた。

「ようし、奴らの後ろに回るのだ。」

梅沢は県道をユーターンすると旧道にゆっくりと入っていった。

前方に白い車が見え白い車から十メートルほど離れた場所に赤い車が停まっていた。梅沢は車を停めて白い車に人間が乗っているかどうかを確かめようとしたが激しい雨が降っているために車の中が見えなかった。

「梅津。あの車に人間が乗っているかどうか調べてこい。」

「はい。」

梅津は車から下りて、背を屈めて車に近づいた。車の後ろから中を覗いた梅津は横に手を振って中には誰もいないという合図を送りながら帰ってきた。

「車の中には誰もいません。」

「そうか。防衛庁の奴は前の赤い車に乗っているということだ。よし、行くぞ。」

梅沢はゆっくりと車を進ませた。青木の車の後ろに来ると車を停めた。

「下りるぞ。」

梅沢、梅津、ハッサンは車から下りた。梅沢は後ろのガウリンも車から下りるように手で合図した。車を下りた五人の男たちはゆっくり

りと啓太の車に近づいていった。

青木と天童は旧道に入ってきた二台の車の動きを見ていた。二台の車は青木の車の後ろに停まり、一台目の車からはトレーラーの事故現場で啓太を追い返した日本人と啓太の前に走ってきて啓太に殴りかかりそうだったインド系の人間と事故車の側から啓太を凝視していた日本人が出てきた。後ろの車からは東南アジア系の男とインド系の男が出てきた。五人の男達はゆっくりと啓太の車に近寄ってくる。

「どうしますか、隊長。」

「彼らと話し合ってみるしかないだろう。前の中央の人間は知っている男だ。梅沢という人間で武器密輸に暗躍していると噂のある人間だ。梅沢は私の正体を知っているから誤魔化しはできない。どんな事態になるか知らない。覚悟しておけ。」

「はい。」

青木は啓太に、

「引き止めて済みませんでした。民間人のあなたには関係のないことですから、今直ぐ逃げて下さい。」

と言って、青木と天童は啓太の車から出た。

啓太はゆっくりと車を出した。啓太は防衛庁の人間が、「民間人のあなたには関係のないことですから、今直ぐ逃げて下さい。」と言ったことが気になった。なにやらヤバイことが起きそうな雰囲気である。ヤバイことに巻きこまれるのは御免である。啓太は県道に出て左折するとカリナーシティーに向かった。

啓太が逃げたので五人の男たちは慌て出した。リーダーの梅沢は、「ガウリン。赤い車を追え。必ず捕まえるんだ。殺してもいい。若造を絶対に逃がすな。」とガウリンに啓太を追うように指示した。

「はい。」

シンとガウリンは車に引き返した。梅沢も車に戻った。

「ガウリン、ちょっと待て。」

と言って、トランクを開けると拳銃と通信機のようなものを取り出して、ガウリンに渡した。

「ガウリン。これを持っていけ。絶対に逃がすな。」

ガウリンは梅沢に頷いて、車を発進させた。

天童はガウリンの車の前に立ちはだかつて車を止めようとしたが車はそのまま走り続け、天童はあやうく轢かれそうになった。天童は轢かれる寸前で横に飛びのき難を逃れた。

「大丈夫か天童。」

「大丈夫です。」

梅沢は青木達に近づいてきた。

「久しぶりです、青木さん。」

梅沢の両側にはハッサンと梅津が身構えて立っていた。

「こんな悪天候の日に青木さんと会ってしまおうとは。奇遇ですね。

再び青木さんと会えてうれしいです。」

「梅沢。お前はなにを企んでいるんだ。」

青木が話した途端に梅沢は右手を少し上に上げた。するとハッサンと梅津は拳銃を出して構えた。青木にとって梅沢の行動は予想外だった。青木は梅沢が最初は穏やかな腹の探り合いの会話をすると思っていた。ところが梅沢はいきなりハッサンと梅津に拳銃を構えさせたのだ。

「防衛庁の人間に拳銃を向けるとは大した度胸だな梅沢。ミサイルをどうする積もりだ。私の部下になにをした。」

青木は危険な状況の中でも梅沢と話をし梅沢の目的を探り出したかった。そして、梅沢達に隙ができたなら梅沢達と格闘をする気持ちでいた。二対三で人数としては不利であるが青木も天童も肉体を鍛えている。二対三でも青木達をねじふせる自信があった。しかし、梅沢は最初から二人の子分に拳銃を構えさせた。これでは青木はど

うすることもできなかった。

梅沢は青木にゆっくりと近づいた。

「青木さん。動かないで下さい。少しでも動けばこいつらが遠慮なく拳銃の引き金を引きますから。」

梅沢の右手には睡眠薬の入った注射器が握られていた。

「青木さん。暫くの間眠ってもらいます。抵抗するのは止めてください。本当に拳銃が火を噴きますから。」

「梅沢。お前はなにをたくらんでいるのだ。」

梅沢は青木の質問を無視して抵抗できない青木の腕に睡眠薬の注射を打ち、天童にも睡眠薬の注射を打った。

梅沢は青木が今度の梅沢達の仕事についての程度知っているか、青木以外にも梅沢達を尾行しているグループがあるかどうかを青木の口から聞き出したかったが、どうせ青木は口を割らないだろうし、梅沢には青木を問い詰める時間の余裕はなかった。大仕事は残り三、四時間あれば終わることができる。その間は誰にも邪魔されないことが重要であるし邪魔する者があれば片付けるだけだ。だから青木と天童には麻酔薬で眠ってもらった。

「二人を車のトランクに入れる。」

梅沢は麻酔薬で眠った青木と天童を車のトランクに入れた。

「二人はどうするんですか。」

「わからん。とにかく今はミサイルを運ぶのが第一だ。二人を殺すか殺さないかは仕事が終わってから考える。」

青木と天童は睡眠薬を打ちトランクに入れたから、二人が梅沢達のミサイル窃盗を邪魔する可能性は消えた。残るのは赤い車の若造である。

青木はトレーラーの荷物がミサイルであることを知っていた。赤い車の若造が教えたのだらう。あの若造は青木に防衛庁に連絡するよつに頼まれたかも知れないと梅沢は推理した。あの若造を逃がすのは危険だ。梅沢はガウリンに電話した。

「ガウリンです。」

「梅沢だ。ガウリン、その男を絶対に逃がすな。殺してもかまわない。いいな。」

「はい、ウメザワさん。」

梅沢は電話を切ると、青木の自動車をその場に放置してミサイルを載せたトレーラーの方に引き返した。

十三

啓太は県道七十四号線に出るとスピードを上げた。小雨が大雨に急変した。激しい暴風雨になった。ワイパーの回転を最速にしてもフロントガラスには次々と雨が殴りかかり視界が悪い。カリナーシティーのヤラを過ぎ、道路が直線道路になった時、ガウリンの運転する車が啓太の車の横に並んだ。シンが窓から顔を出して車を止めるように手で合図した。

青木が「民間人のあなたには関係のないことですから、今直ぐ逃げて下さい。」と言ったことを啓太は思い出した。こいつらは普通の人間じゃない。ヤバイ連中だろう。得体の知れないヤバイ人間に車を止めると言われて車を止めるバカはいない。

啓太は車を止めるどころかガウリンの車より前に出ようとスピードを上げた。

暴風雨の最中に、ミサイルをアメリカ軍基地から外に運び出すというのは考えてみると変である。それにアメリカ軍のミサイルを運んでいるトレーラーであるのに周りには日本人やインド人などがうるついていた。それも妙なことである。そして、防衛庁の人間にミサイルのことを質問され、啓太が答えるたびに防衛庁の人間は驚いたり絶望したりしていた。そして、防衛庁の人間と話している間にミサイルを積んでいたトレーラーの所に居た男達がやってきた。すると防衛庁の人間に逃げると言われた。わけが分からないで逃げると、今度はインド人らしき人間が追って来て車を止めると指示する。

五基のミサイル、アメリカ兵、得体の知れない日本人、狂気の目をしたインド人、アジア人、防衛庁の人間。……啓太は頭の中が錯綜した。

防衛庁の二人は、トレーラーに積んでいたものがミサイルであると言ったら非常に驚いた。そして、ミサイルは盗んだものであると言っていた。啓太が見たトレーラーの五基のミサイルはカーリーナエアベースから盗んだものであったのだ。すると、トレーラーの回りにいた連中はミサイル泥棒達であったということになる。信じられないことであるが、防衛庁の人間が話していたのだから本当なのだろう。

防衛庁の人間に「逃げる」と言われて旧道を出て県道七十四号線を走っていたら一台の車が追ってきた。啓太の車を追ってきたインド系の男もミサイル泥棒の仲間である。そいつの指示通りに車を止めたらヤバイことになることははっきりしている。こいつらに捕まったらなにをされるか分からない。啓太はひたすら逃げるだけだ。偶然、トレーラーに積まれたミサイルを見てしまったために啓太はヤバイ連中に追われる破目になった。

ガウリンの車がスピードを上げて啓太の車の前に出ようとした。啓太はあわててスピードを上げガウリンの車より前に出た。前に出た啓太の車は鈍いショックを受けた。啓太の車を追ってきた車が啓太の車に体当たりをしたのだ。内側車線を走っていた啓太の車はゆっくりと回転しながら外側車線に移動し、側溝にぶつかってそのまま内側車線に流れていった。水に濡れた車道で車が滑った時はハンドルやブレーキを無闇に操作しない方がいい。何度も暴風雨の中を運転したことがある啓太はあわてふためくことはなく、ハンドル操作ができるタイミングを待った。車の回転が止まると、啓太はアクセルを踏み再び国道五十八号線に向かった。啓太の車にぶつかった車も回転しながら雨に濡れた車道を滑り側溝にぶつかって車

は反対向きになった。運転技術は啓太の方が上のようだ。なにしろ元暴走族の啓太なのだ。

カリナーロータリーから五十八号線に出た時、啓太は南の方に逃げるかそれとも北の方に逃げるか迷った。北の方はヨミタンヴィレッジ、オンナヴィレッジと続き次第に人家が少なくなる。南の方はミジガマ、スナビと続き、ミハマという新興タウンに出る。ミハマタウンなら暴風雨でも車の往来は多いに違いない。啓太以外の車が走っていれば追跡車も無謀なことを仕掛けてはこないだろう。啓太はミハマタウンのある南の方に進路を取った。

暴風雨がますます激しくなり、雨混じりの突風がガタガタと車を揺らす。ハンドル捌きを間違うと直ぐにスキーのように車は車道を滑っていきとんでもない方向に流されそうだ。追跡車が接近してぶつかりそうになると啓太は車のスピードを上げたり、方向を変えたりして衝突を防いだ。追跡車の運転手は暴風雨の中の運転には馴れていないようで、側溝にぶつかったり車を回転させたりした。しかし、側溝にぶつかっても、車を回転させても、体勢を立て直すとハイスピードで啓太の車に襲い掛かってきた。

ミジガマを通過した時、前方に二台の車を発見して啓太はほつとした。前方の二台の車に入れば追跡者は二台の車に遠慮して強引に襲ってくることはないだろうと啓太は考えた。啓太は激しい暴風雨の中をゆっくりと走っている二台の車に追いつき、二つの車の間に潜り込んだ。啓太を追いかけて来た追跡車は啓太の車の横にいた。啓太が予想していた通り、追跡車は啓太の車にぶつけることはしなかった。もし、啓太の車にぶつけたら啓太の後続車が啓太の車か追跡者の車と衝突して大事故になる可能性がある。追跡車は二台の車の間に入って走っている啓太の車にぶつけるような無謀なこととはやらなかった。

「このまま、ミハマタウンあたりまで行けば追跡者に襲われない方法が見つかるだろう。」

啓太はほつとした。そして、前の車にスピードを合わせて走りなが

らミハマタウン辺りに着いた時の戦術を練った。

しかし、啓太の安堵は直ぐに壊された。突然左のウィンドーからガッツという音が聞こえた。何の音だろう。小石がぶつかったのだろうかと啓太は左のウィンドーを見た。ウィンドーはクモの巣のようなヒビがありその中央には小さな穴が開いているようだ。激しい暴風雨の最中の運転である。左のウィンドーをじっくり観察する余裕はない。啓太が一瞬見たクモの巣のようなヒビと小さな穴。一体どうしてできたのだろう。啓太の車のウィンドーは暴走族をやっていた頃に取り付けた強化ガラスである。簡単に穴が開くようなウィンドーではない。タイヤにはじかれた小石がぶつかったくらいでは穴が開かないはずである。なぜ穴があいたのか。もしかしたら・・・啓太に恐怖が走った。

再びガッツと後ろのウィンドーで音がした。ガッツという音は非常に固い物が激しい勢いで車のガラスにぶち当たり穴を開けた音であることに違いない。ガッツという音が連続して聞こえたということは偶然の出来事とは考えられない。啓太は車のガラスに穴が開いたことに恐怖が増していった。強化ガラスに穴を開けた物の正体が何であるか。追跡車から啓太の車にガラスに穴を開けた物の正体を発射したのであればその物の正体はひとつしかない。弾丸だ。信じ難いが、追跡者が啓太の車を目掛けて拳銃を撃つたに違いない。ガッツという音は拳銃から発射された弾丸がウィンドーをぶち抜いた音だろう。

恐怖で啓太の血の気が引いた。昼の国道で拳銃をぶつ放すとは。考えられない。こいつらは狂っている。啓太の後ろを走っていた車はスピードを落として離れたようでバックミラーの視界から消えていた。後ろを走っていた車の運転手は拳銃を啓太の車に向けて撃っている姿を見て恐くなってスピードを落としたのだろう。

危険を感じた啓太はスピードを上げて前の車を追い抜いた。すると追跡車もスピードを上げて追ってきた。道幅が広い国道五十八号線は横に並ばれて銃で襲われやすいので危険だ。国道五十八号線よ

り道路幅が狭くカーブが多い二車線の方が襲われにくいだろうと考
えた啓太はミハマタウンに行くのを断念した。

啓太は国道道路入り口に来た時、スピードを急にダウンさせた。啓
太は左折して国道道路に入って行った。急に啓太の車が左折したの
で、啓太の車の横に並ぼうしていた追跡車は慌てて急ブレーキを掛
けた。車は回転しながら国道五十八号線を百メートル以上も滑降し
ていった。滑降が止まるとガウリンが運転している車は国道五十八
号線を逆走して啓太の車を追って国道道路に入った。

啓太の必死の逃亡劇

国道道路はカリナーナエアールベースの金網に沿って走っている二車線でコザシティーに通じている道路である。コザシティーはカーブの多い路地が多くありコザシティー一帯は迷路のようになっている。コザシティーは啓太が生まれ育った街だ。道路はよく知っている。コザシティーの迷路のような路地に逃げ込めば追跡車から逃れることができるだろう。啓太はコザシティーを目指して車を走らした。

国道道路入り口から数百メートル進むと、国道道路は緩やかな上り坂になっていた。上り坂は激しい雨が降り続けたために赤土が混ざった濁水が激しく流れて濁流の川のようになっていた。スピードを出すと濁水がエンジン部分に入り、エンジンがストップしてしまいかも知れない。しかし、追跡者に追いつかれないためにはスピードを落とすわけにもいかない。啓太はエンジンがストップしないことを祈りながら濁流の中を進んだ。

追跡者はエンジンストップなど気にする様子もなくスピードを上げて次第に啓太の車との距離を縮めてくる。

前方に一台の軽自動車も濁流の中で立ち往生しているのが見えた。軽自動車が立ち往生している場所は凹地になっているようだ。運がなければその場所でエンジンストップするかも知れない。啓太はエンジンストップするのを恐れながらもスピードを落とさずに濁流の中を走り続けた。泥水のしぶきがどーっと舞い上がり、フロントガラスを泥水が覆い視界はゼロになった。スピードはがくと落ちたがエンジンストップは免れた。ゆっくりと濁流から出ると啓太は車を止めて車から下りた。激しい暴風雨に飛ばされそうになりながら、身を屈め足を踏ん張って歩き、立ち往生している軽自動車に近づいた。軽自動車の中を覗くと誰も居なかった。運転手は避難したようだ。激しい濁流が啓太の足をすくおうとする。足をすくわれたら一

気に濁流に流されてしまふ。啓太は軽自動車を掴み、激しい雨に打たれながら追跡車を待った。

豪雨の中から追跡車は現れた。追跡車は勢いよく濁水に突っ込んで来た。車の両サイドから泥水が高く舞いあがって、追跡車のスピードはダウンした。啓太は渾身の力を込めて軽自動車を押した。軽自動車は滑り、追跡車の正面にぶつかって追跡車を止めた。いきなり止められたショックで追跡車のエンジンが止まった。啓太の運がよければ追跡車はそのままエンジントラブルを起こして動かなくなるだろう。そうなれば啓太は追跡されることはない。例えエンジンが再始動したとしてもフロントにぶつかっている軽自動車を取り除くのに時間がかかる。その間にできるだけ遠くまで逃げれば追跡者が啓太の車を見つけることは困難になる。これで追跡車から逃げることができると思い啓太はほっとした。啓太は背を屈めて急いで自分の車に戻り、その場から去った。

なだらかな坂を登り、イヘイを通り過ぎ、ウエセドを通り過ぎてヤマウチも過ぎ、ウエチの十字路を右折して啓太の車はコザシティーの市内道路に入った。市内道路に入る前に後方を見たが追跡車の姿は見えなかった。なだらかな上り坂になっている市内道路はコザシティーの中央通りである国道三三〇号線に出るが、啓太は途中で左折して細い路地に入った。

幾つかの路地を曲がり啓太はコザシティーで一番大きい飲み屋街である仲ノ町に入り、仲ノ町の一角で車を停車した。ここなら追跡車が追ってきたとしても簡単に見つかることはないだろう。啓太はコンビニエンスに電話した。電話に出たのはパートの澄江であった。「もしもし、店長だが、店はまだ停電をしていないか。」

「店長、どこに居るんですかあ。店のウィンドーは今にも割れそうなくらい曲がるし、恐いですよお。」

澄江の声は今にも泣き出しそうである。

「ウィンドーが割れるということは絶対ないよ。大丈夫だ。まだ停電はしていないよūdā。」

「停電しそうになったです。早く帰って下さい。美紀ちゃんと私では心細いです。一分でも早く来て下さい。お願いします。」

「分かった。急いで帰る。」

啓太はアパートに戻って、濡れた服を着替えてからコンビニエンスに行く積もりだったが、そういうわけにはいかないようだ。啓太はすぐにコンビニエンスに行くことにした。しかし、ずぶ濡れの服は着替えなければならない。啓太は由利恵に着替えをコンビニエンスに持ってきてもらおうと考え、由利恵の携帯に電話した。由利恵は幼稚園の先生をしている。

「もしもし、啓太だ。」

「由利恵よ。」

「今どこに居るのか。」

「家に決まっているでしょう。」

「そうだよな。由利恵。台風の風速はどのくらいになっているか。」

「三十メートルを越したわ。」

「そうか、まいったな。」

「どうしたの。」

「由利恵に頼みたいことがあるが、しかし、風速が三十メートルを越したか。どうしようかな。」

「どんな頼みなの。」

「由利恵は外に出れるかな。台風だが。」

「このくらいの風なら大丈夫よ。」

「そうか。すまないが僕のアパートに行つて、着替えをコンビニエンスまで持ってきてほしいんだ。頼めるかな。」

由利恵は啓太の恋人でコンビニエンスの経営が軌道に乗ったら、由利恵と結婚をする積もりでいる。啓太がコンビニエンスの店長として一人前になるうと懸命に努力しているのは由利恵と結婚する目的があるからである。結婚の約束をしていた由利恵は啓太のアパートの力ギを持っていた。

「いいけど。どうしたの。」

「ドライアイスを買に行つたが、途中でトラブルがあつてさ、ずぶ濡れになつてしまった。アパートに寄つて着替えをしたいが着替えをする時間がないんだ。急いでコンビニに行かなければならないんだ。」

「分かつたわ。私がケイの着替えをコンビニに持つていくわ。ケイ、運転に気をつけてよ。」

「由利恵こそ気をつけてくれ。本当は頼みたくないけど、店は美紀ちゃんと澄江ちゃんの女の子二人だけでみているから、女の子二人では心細くてとても恐がつているんだ。僕が一分でも早くコンビニに行つて二人は早めに家に帰した方がいいだろうと思つて。」

「二人は十八歳だつたかな。恐がるのも無理ないわよ。それじゃ今日はケイと私の二人でコンビニの店番をしましょうか。」

「え、それは悪いよ。どうせ客は来ないだろうから僕ひとりで充分やつていけるよ。」

「うふふ、暴風の中の二人だけのコンビニエンス。二人の愛を育むというのもロマンがあつていいんじゃないの。台風十八号がウチナ―島を直撃するのは間違いないみたいだから、長い台風の一日になるみたいだし。」

「台風直撃か。店は確実に停電するな。」

「停電したら、ろうそくを灯して二人で過ごしましょう。ロマンティックにね。」

「それはいいな。停電するのを期待しようかな。へへへ。」
由利恵とは時間を忘れてついつい長話になつてしまふ。啓太は父親の啓四郎にも急いで電話しなければならぬことを思い出し由利恵との電話を切つた。啓太は啓四郎に電話をした。

「もしもし、親父か。」

「ああ、啓太か。ドライアイスは買ってきたか。」

「うん、買ってきた。親父、ドライアイスを買つて帰る途中で大変なことに巻き込まれたよ。」

「え、なにがあつたんだ。」

啓太はミサイルを積んだトレーラーと乗用車の交通事故のことから拳銃を撃つ不気味な追跡者などこれまでのことを詳しく啓四郎に話した。啓四郎は半信半疑で聞いていたが、啓太のリアルな話を聞いていく内に啓太の話は本当であると信じて真剣になった。

「親父よ。なぜあいつらは僕をしつこく追いまわしたんだろうか。」
「お前が防衛庁の人間と話していたからだろうな。お前が防衛庁が警察に通報するのを恐れたのだろう。」

「ふうん。僕は防衛庁の電話番号は知らないし、警察には電話したが警察は僕の話を用いなかった。もう、警察に電話する気はないよ。」

「そうか。啓太の話は警察は信じなかったのか。」

「うん。」
「まあ、そんな荒唐無稽な話を信じないのは仕方のないことではあるな。」

啓四郎は苦笑した。

「親父、あいつらは何者なんだろう。」

「お前の話によるとアメリカ兵は二、三人で日本人も二、三人。そして残りの人間はインド系やアジア系の人間たちなんだろう。」

「うん。軍服を着けていたのはアメリカ人の二人だけだった。」

「ということは彼らがアメリカ軍の兵士でないことは明白だ。だからアメリカ軍によるミサイル移動とは考えられない。」

「そうだよな。」

「啓太が見た連中は暴風雨のどさくさに紛れてカーリーナエアークラスからミサイルを盗んだ泥棒達であることには違いないだろう。」

「防衛庁の人間もそんな風に言っていた。」

「しかし、アメリカの軍事基地からミサイルを盗むとはな。余りにもスケールのでかい泥棒たちだな。恐らく啓太が見た連中は武器の国際的な窃盗団だろうな。信じられない話だよ。」

「武器の窃盗団って本当に居るのかなあ。」

「ミサイル泥棒か。なんかピンと来ないな。しかし、啓太は実際に

トレーラーに積んであるミサイルを見たのだろう。」

「うん。見た。」

「世界は広い。ミサイル泥棒が現実に居たということだ。」

「そういうことになるのかなあ。」

「しかし、分からない。」

「なにが分からないんだ、親父。」

「ミサイルをアメリカ軍基地から盗むのに成功してもだ。小さなウチナー島にミサイルを隠す場所なんかあるだろうか。隠してもすぐ見つかるだろう。それにだ。うまく隠したとしてもミサイルを海外に運び出すのはできないと思う。台風でアメリカ軍の警戒が緩んだのを利用してミサイルを盗むのは簡単にできたかもしれないが、盗んだミサイルを島内に隠すことも国外に持ち出すことも不可能だと思う。ミサイル泥棒達は盗んだミサイルをどうする積もりなのだろうか。全然見当がつかない。」

「ミサイルを解体してスクラップにして売りさばくつもりじゃないのか。」

啓太の推理に啓四郎は苦笑した。

「スクラップにして売ったら二束三文にしかならない。ミサイルをスクラップにする目的で盗むということはあり得ないことだ。」

「そうだよな。」

「とにかく奇妙な泥棒の話だ。解き難い方程式だな。しかし、啓太を拳銃で襲ったということは彼らはミサイルを盗むのに本気であるし、かなり恐い連中であることは間違いない。」

「でも、もう大丈夫だよ。追っていた車からは逃げる事ができたし、ここまで来れば僕を探し出すことはできないよ。」

「そうかも知れないが。まだ油断はできないよ。大通りは避けて裏道を通った方が賢明だ。早くグシチャーのコンビニに行った方がいい。」

「うん、そうする積もりだ。じゃ電話を切るよ。」

その時、前方に車影が見えた。啓太は悪い予感がした。

「親父、ちよつと待って。」

前方の車はヘッドライトを点け、激しい雨の中をゆっくりと近づいてきた。

「どうした、啓太。」

啓四郎の声に啓太は返事をしないで前方の車をじつと見詰めた。可能性は低いが啓太を追ってきた車かも知れない。車は徐々に近づいてきた。車の姿がはつきりと見えてきた。ああ、やっぱり例の車だ。「親父。奴らに見つかった。逃げなきゃあ。」

啓太は携帯電話を助手席に放ると車をバックした。ぐんぐんスピードを上げてからサイドブレーキとハンドル捌きで車を反転させると、急発進した。携帯電話からは「啓太、啓太。」と啓太を呼ぶ啓四郎の声がしたが啓太は携帯電話を取る余裕はなかった。啓太の車は十字路を左折して仲ノ町の中央通りを北進した。

「いけねえ。ここは一方通行だった。」

仲ノ町の中央通りは一方通行になっていて啓太は一方通行を逆走していた。前から車が来れば挟まれてしまい逃げるのができなくなる。啓太は次の十字路に来ると迷わず左折した。数百メートル進むと国道三百三十号線に出た。啓太は仲ノ町飲食街から国道三百三十を横切り、ウチナー子供の国公園方向に逃げた。

国道や道幅の大きい道路では追跡車は車を横につけ、拳銃を撃つてくる危険がある。啓太は道幅の狭い裏通りを選んで走った。コザシティーの裏通りを啓太の車は走り続けた。追跡車はガウリンが運転し、シンは車から身を乗り出して拳銃を撃とうとする。しかし、コザシティーの裏通りはカーブが多く、シンは啓太の車に銃の照準を合わせることができなかった。

啓太を捕まえようとあせっているガウリンの運転は乱暴になっていた。カーブを曲がる時にもスピードを落とさないものだからプロック塀にぶつかり、道路に飛び出ている電柱には何度もバンパーをぶつけた。しかし、車が傷だらけになってもガウリンは啓太を追いつづけた。車が二台しか通れない狭い道路のために追跡車は啓太の車

に並ぶことも追い越すこともできなかつた。啓太は心に余裕ができたので携帯電話を掴んだ。

「親父、駄目だ。あいつらを振り抜くことができない。」

「ガソリンは大丈夫か。」

「大丈夫だ。」

「携帯電話の電池は大丈夫か。」

「車から充電できるから大丈夫だ。」

「よし、よく聞けよ。コザ十字路近くのヨシワラに急坂があるのを知っているか。」

啓太は必死の逃走劇の最中だから父親のいうヨシワラの急坂が直ぐには思い出せなかつた。

「え、ヨシワラ、急坂。」

「ああ、寺があるところだ。」

啓四郎と話している内に啓太の車は裏通りから国道三百三十号線に出てしまった。コザシティーは裏通りから裏通りへといつまでも走り抜くことはできない。裏通りはいつかは四車線の国道に出るようになっていく。広い道路になると追跡車が横に並ぶことができる。電話をしながら車を運転するのは危険だ。

「親父、電話を切るよ。」

啓太は携帯電話を助手席に置くと、国道三百三十号線を左折してスピードを上げた。啓太の車はコザシティーの下町からゴヤに向かっているなだらかな長い上り坂を走った。啓太は再び裏通りに入ろうとした。しかし、行き止まりになっている裏通りもある。そのような裏通りに入ったら万事休すである。啓太はコザシティーの道路を思い描きながら、行き止まりになっていない逃走するのに都合のいい裏通りを探した。しかし、土砂降りの暴風雨のために視界が悪い。視界が悪くても追跡車に捕まらないためにはスピードを落とすわけにはいかない。啓太は視界が悪いために何度も裏通りに入るタイミングを逃した。追跡車は啓太の車に追いつき、後ろから衝突した。しかし、幸いにも上り坂だったので追跡車に衝突されても車が突き

飛ばされることも、回転させられることもなかった。啓太は裏通りに進入するタイミングを掴めないまま坂の頂上まで来た。坂を登りきるとゴヤタウンである。ゴヤタウンは子供の頃から遊び回った場所だ。ゴヤタウンの道路なら啓太は表通りから裏通りまで知り尽くしていた。

啓太は国道三百三十号線を右折してパークアベニュー通りに入った。パークアベニュー通りの最初の信号を右折し、突き当たりになって三叉路を左折すると、次の十字路を左折して再びパークアベニュー通りに出た。パークアベニュー通りを右折すると、二番目の十字路を右折して、次の十字路を左折した。啓太は路地裏の道路をジグザグに走り続けた。啓太のジグザグ走法は効果があった。ゴヤタウンの路地裏の道路に精通していないガウリンの運転はカーブをうまく曲がることができず、啓太の車との距離はどんどん離れていった。啓太は追跡車が視界から消えたのを確かめてからゲート通りを横切り、地元の人でも知っている人が少ない、狭い一方通行の道路に入り仲ノ町の裏通りに出た。啓太は啓四郎に電話した。

「親父、聞こえるか啓太だ。」

「ああ、聞こえる。今はどのような状況だ。」

「なんとか、あいつらを振り切って仲ノ町の裏通りを走っている。」

親父の言った寺の近くのヨシワラの急坂は知っている。その急坂で何をするのか。」

「うん、あそこに啓太を追っている車を誘い出して急坂を転げ落とそうという戦術だ。」

「おもしろそうだね。俺もさ、逃げている内にだんだん腹が立ってきた。善良な市民を理由もなく追いかけて殺そうとするんだよ。仕返しをやらなきゃ気がおさまらないよ。」

父親が反撃のアイデアを出したので元暴走族の啓太の血が騒いだ。

「こらこら、俺という言葉は使わない約束だ。俺は店長にはふさわしくない言葉だと注意したことを忘れたのか。善良な市民なら僕とか私とか言いなさい。コンビニの店長になって、真面目に働くと

お母さんと約束しただろう。」

「うん、うん。」

啓太は啓四郎に注意されて意気消沈した。

「まあ、元暴走族だった血が騒いだかもしれないな。しかし、一番いいのは逃げ切ることだ。啓太を追ってくる車を完全に振り切ったか。」

啓太は後ろを見た。走ってくる車は見当たらなかった。

「振り切ったようだよ。」

「そうか。追跡車から逃げ切れたのなら、早くグシチャーシティーのコンビニに行った方がいい。お前を追っている奴はお前を探して回ってコザシティー帯を走っているはずだ。コザシティーに居ると見つかる可能性があるからな。早くコザシティーから出ることだ。」

「うん、分かった。これからコンビニに向かうよ。」

「急いで行けよ。」

啓太は電話を切るとグシチャーシティーに向かって車を走らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542g/>

台風十八号とミサイル

2010年10月16日00時15分発行